福　岡　市

有田・小田部

ARI TA KO TA BE

第37集

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第725集

2002

福岡市教育委員会

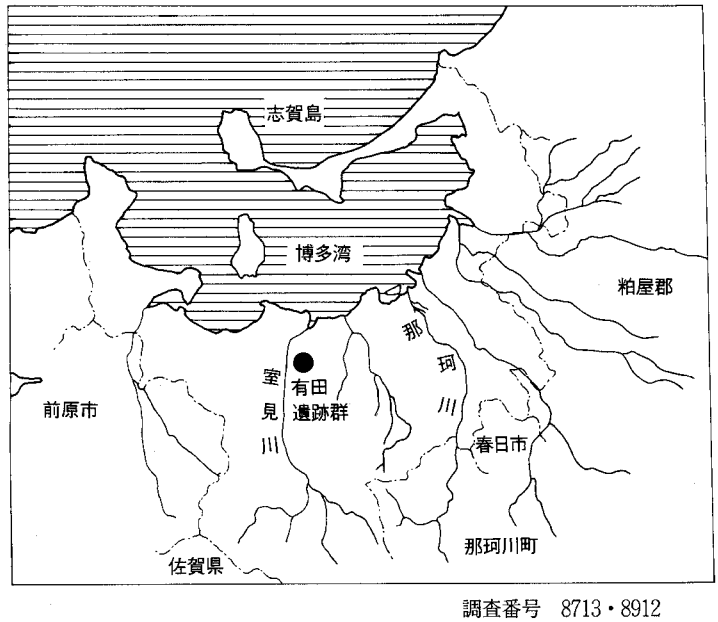
福　岡　市

ARI TA KO TA BE

有田・小田部

第37集

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第725集



調査番号　8713・8912
遺跡略号　ART－124・150

2002

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を挟んで大陸とは一衣帯水の位置関係にあり、古代から大陸文化の受け入れ窓口として栄えて来たところです。

特に本市の西南部に位置する早良平野は埋蔵文化財が数多く包蔵され、早良王墓で有名な吉武高木遺跡や弥生時代後期の環濠集落として国指定史跡となっている野方遺跡など重要な遺跡があります。

この平野の北部に位置する有田遺跡群は、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で、昭和41～43年にかけての区画整理事業に伴う調査以来、現在まで200次を超える調査が行われ、弥生時代前期初めの環濠集落や古墳時代の集落、奈良時代の早良郡衙跡と思われる大型建物群、戦国時代の小田部城に関連する堀跡など重要な遺構が発見され、学会の注目を集めています。

今回の調査は有田遺跡群で、昭和62年度と平成元年度に行われたものです。昭和62年の第124次調査では古墳時代後期の住居跡や、古代の条里制に関連する大溝と井戸跡などを、平成元年の第150次調査では弥生時代から古墳時代後期にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物からなる集落を検出しました。

今回の調査に際しましては、地権者を始めとし、関係各位に多大な協力をいただきました。心から感謝の意を表します。併せて本書が、埋蔵文化財保護の理解を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただけることを願うものです。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会
教育長　生田　征生

例　　言

(1). 本書は早良区有田・小田部・南庄地区における開発に伴い、福岡市教育委員会が、昭和62年度と平成元年度に国庫補助金を受けて実施した、第124次・150次調査の報告書である。

(2). 本書では、有田・小田部・南庄地区台地上の遺跡を一連のものと見なし、広義の有田遺跡群とする。

(3). 調査は埋蔵文化財課の山崎龍雄・米倉秀紀が担当した。

(4). 本書に掲載した遺構の実測は第124次調査が担当者の他、清原ユリ子・金子由利子・宮原邦江・桃崎祐輔が、第150次調査が担当者と行い、遺構と遺物の写真撮影は担当者が行った。遺物の実測は山崎と平川啓治・藤野雅樹が行った。

トレースは山崎と大賀順子・大神真理子が行った。

(5). 遺構記号は、福岡市の遺構略号によっている。

ＳＡ－柵、ＳＢ－掘立柱建物、ＳＣ－竪穴住居跡、ＳＤ－溝状遺構、ＳＥ－井戸、ＳＫ－土坑、ＳＲ－土坑墓・木棺墓、ＳＴ－甕棺墓、ＳＰ－ピット、ＳＸ－その他の遺構

(6). 本書に使用した方位は磁北で、磁北は真北より６度20分西偏する。

(7). 本書報告の遺物や写真・記録類は、すべて本市の埋蔵文化財センターに収蔵保管する予定である。

(8). 本書の執筆と編集は山崎が行った。

有田遺跡群第124次・150次調査概要

調査次数	調査番号	遺跡略号	調査地 地番	(㎡) 申請面積	(㎡) 調査面積	申請者	調査期間	事前審査番号
有田第124次	8713	ART-124	福岡市早良区有田1丁目24－4	711	650	毛利文夫	870623～870926	60-2-221
有田第150次	8912	ART-150	福岡市早良区小田部3丁目163	1,188	1,087	守田敏行	890510～890707	58-1-93

本　文　目　次

本文頁

第１章　はじめに……1
　１）調査に至る経過……1
　２）調査の組織……1

第２章　遺跡の立地と歴史的環境……2
　１）遺跡の立地……2
　２）歴史的環境……2

第３章　第124次調査の記録……5
　１）調査の概要……5
　２）遺構と遺物……5
　　①竪穴住居跡（ＳＣ）……5
　　②土坑（ＳＫ）……19
　　③井戸（ＳＥ）……20
　　④溝状遺構（ＳＤ）……25
　　⑤ピット出土遺物（ＳＰ）……34
　　⑥包含層出土遺物……36
　　⑦遺構面出土遺物……43
　３）小結……44

第４章　第150次調査の記録……45
　１）調査の概要……45
　２）遺構と遺物……45
　　①掘立柱建物（ＳＢ）……45
　　②竪穴住居跡（ＳＣ）……47
　　③土坑・貯蔵穴（ＳＫ）……51
　　④焼土坑（ＳＫ）……58
　　⑤溝状遺構（ＳＤ）……59
　　⑥ピット出土遺物（ＳＰ）……65
　　⑦包含層出土遺物……68
　３）小結……68

図 版 目 次

扉写真……第150次調査作業風景
PL. 1……有田遺跡群周辺航空写真(1961年撮影)
PL. 2……有田遺跡群周辺航空写真(1972年撮影)
PL. 3……(1)調査区全景(北から)　(2)調査区南側と SD01(北から)
PL. 4……(1) SC01(西から)　(2) SC02(南から)
PL. 5……(1) SC05・07(西から)　(2) SC05～08(東から)
PL. 6……(1) SC03(西から)　(2) SC04(北から)　(3) SC02竈(南から)
(4) SC05竈(東から)　(5) SD01(北から)
PL. 7……(1) SD01 1号土層(南から)　(2) SD01須恵器出土状況(東から)　(3) SD02全景(西から)
(4) SD02土層(西から)
PL. 8……(1) SK01(東から)　(2) SK02(南から)　(3) SK03(南から)　(4) SK04(東から)
(5) SE01(東から)　(6) SE02(東から)
PL. 9……各遺構出土遺物Ⅰ(縮尺不統一)
PL. 10……各遺構出土遺物Ⅱ(縮尺不統一)
PL. 11……各遺構出土遺物Ⅲ(縮尺不統一)
PL. 12……(1)調査区西側と SD01(北西から)　(2)調査区東側(北から)
PL. 13……(1)東側ピット群・SB62・63(北東から)　(2) SB57・61(北西から)　(3) SB60(南西から)
(4) SB61(北東から)
PL. 14……(1) SC45(南西から)　(2) SC46(南西から)　(3) SC48(南西から)　(4) SC49(南西から)
(5) SC52(北から)　(6) SC55(南東から)
PL. 15……(1) SD02(北東から)　(2) SD53(北東から)　(3) SD44(北西から)
(4) SD44 1号土層(南東から)　(5) SK51(南から)　(6) SK58(南から)
PL. 16……(1) SK07(北から)　(2) SK08(西から)　(3) SK10(北から)　(4) SK11(東から)
(5) SK12・36(東から)　(6) SK14(北西から)　(7) SK15(東から)　(8) SK17(北東から)
PL. 17……(1) SK23(北から)　(2) SK25(西から)　(3) SK26(北から)　(4) SK28(北東から)
(5) SK11～13・20・34～36・38(東から)　(6) SK31(西から)　(7)　SK32(南から)
(8) SK38(東から)
PL. 18……(1) SK40(西から)　(2) SK41(東から)　(3) SK43(北から)　(4) SK47(北西から)
(5) SC46内 SK56(北西から)　(6) SP18遺物出土状況　(7) SP28(西から)
PL. 19……各遺構出土遺物Ⅰ(縮尺不統一)
PL. 20……各遺構出土遺物Ⅱ(縮尺不統一)

挿 図 目 次

本文頁

Fig. 1　有田遺跡群と周辺遺跡（1/25,000）……3
Fig. 2　有田遺跡群調査地点位置図（1/7,500）……4
Fig. 3　遺構全体図（1/200）……6
Fig. 4　SC01・03と竈（1/60・1/30）……7
Fig. 5　SC02（1/60）……8
Fig. 6　SC02竈（1/30）……9
Fig. 7　SC01・02出土遺物（1/4）……10
Fig. 8　SC02出土遺物（1/4）……11
Fig. 9　SC03出土遺物（1/4）……12
Fig. 10　SC04（1/60）……13
Fig. 11　SC05～07（1/60）……14
Fig. 12　SC05竈（1/30）……15
Fig. 13　SC05出土遺物（1/4・1/3）……16
Fig. 14　SC08（1/60）……17
Fig. 15　SC08出土遺物（1/4・1/3）……18
Fig. 16　SK01・03（1/30）……20
Fig. 17　SK02・04（1/40）……21
Fig. 18　SK01～04・SX01出土遺物（1/4・1/3）……22
Fig. 19　SE01・02（1/40）……23
Fig. 20　SE01・02出土遺物（1/4・1/3）……24
Fig. 21　SD01・02土層（1/40）……25
Fig. 22　SD01須恵器群出土状況（1/30）……26
Fig. 23　SD01須恵器群出土遺物（1/4）……27
Fig. 24　SD01出土遺物Ⅰ（1/4）……28
Fig. 25　SD01出土遺物Ⅱ（1/4）……29
Fig. 26　各溝出土遺物（1/4）……32
Fig. 27　各遺構出土石器（1/3）……33
Fig. 28　ピット出土遺物（1/4）……35
Fig. 29　調査区北側東壁土層（1/60）……36
Fig. 30　包含層出土遺物Ⅰ（1/4）……37
Fig. 31　包含層出土遺物Ⅱ（1/4）……38
Fig. 32　包含層出土遺物Ⅲ（1/4・1/3）……39
Fig. 33　包含層出土石器（1/3）……40
Fig. 34　遺構面出土遺物（1/4）……41
Fig. 35　各遺構出土鉄器・玉類（1/2・1/1）……42
Fig. 36　遺構全体図（1/200）……46
Fig. 37　調査区南東壁土層（1/60）……47

Fig. 38　SB57・60～63（1/80）……48
Fig. 39　SC45・46・48（1/60）……49
Fig. 40　SC49・52・55（1/60）……50
Fig. 41　各住居跡出土遺物（1/4）……51
Fig. 42　SK07～10・12・15・17・36（1/40）……52
Fig. 43　SK20・23・24・26・28～32・34・39（1/40）……53
Fig. 44　SK11・35・38・41・43・47（1/40）……54
Fig. 45　SK14・25・37・40, SP18・28（1/30）……55
Fig. 46　各土坑出土遺物（1/4）……56
Fig. 47　SK51・58（1/40）……58
Fig. 48　各溝土層（1/40）……59
Fig. 49　SD01出土遺物（1/4）……60
Fig. 50　SD44出土遺物Ⅰ（1/4）……61
Fig. 51　SD44出土遺物Ⅱ（1/4）……62
Fig. 52　SD44出土遺物Ⅲ（1/4）……63
Fig. 53　ピット出土遺物（1/4）……64
Fig. 54　包含層その他の出土遺物（1/4）……65
Fig. 55　各遺構出土石器Ⅰ（1/3）……66
Fig. 56　各遺構出土石器Ⅱ（1/1・2/3）……67

第１章　はじめに

１）調査に至る経過

通称今宿新道の国道202号線の開通と福岡市営地下鉄１号線の開通は、小田部大根の産地として有名であった、近郊農村地帯の有田・小田部・南庄地区を一変させた。沿線には店舗や共同住宅、民家などが建て込み市街化し、往時の面影を見ることは難しくなってしまった。

福岡市は、この有田・小田部・南庄地区に所在する有田遺跡群を重要遺跡として範囲指定し、昭和52年度から個人住宅建設のような、小規模開発についても埋蔵文化財の事前審査を行い、個人住宅建設については国庫補助事業として、またその他の公共事業、営利目的の民間開発については、調査費用を事業者負担として発掘調査を行い、記録保存に努めてきた。

今回報告する第124次調査・第150次調査はいずれも民間の共同住宅建設に伴うものであるが、事業主体が個人などで調査費用の全額協力が難しい為、調査費の一部を国庫補助金で補って調査を実施し、整理報告書作業については国庫補助金で行った。調査に際しては、申請者を初めとして、多くの方々の協力を受けた。記して感謝の意を表する次第である。

２）調査の組織

発掘調査の組織は以下のとおりである。

調査委託者		（第124次調査）	毛利文夫	（第150次調査）	守田敏行
調査主体		福岡市教育委員会			
調査総括		埋蔵文化財課長	柳田純孝（現文化財部長）		
事務担当		埋蔵文化財課第２係長	飛高憲雄	（庶務）	岸田　隆
	（現在）	同　調査第２係長	力武卓治	（庶務）	御手洗　清
調査担当	（第124次調査）	同　第２係	山崎龍雄、米倉秀紀（現第１係主任文化財主事）		
	（第150次調査）	同　第２係	山崎龍雄		

調査作業　（第124次調査）　有富溢子、井上紀世子、緒方マサヨ、金子由利子、金田英夫、神尾順次、清原ユリ子、後藤ミサヲ、坂口フミ子、柴田勝子、庄野崎ヒデ子、田中克昌、徳永ノブヨ、土斐崎初栄、西尾たつよ、平井和子、堀川ヒロ子、松尾和雄、松尾司、松尾玲子、三浦義隆、宮原邦江、桃崎祐輔（筑波大学）、山田サヨ子、吉岡田鶴子、萬スミヨ、舛本亜希（熊本大学）

（第150次調査）　有富溢子、井上紀世子、緒方マサヨ、金子由利子、神尾順次、清原ユリ子、黒田和生、後藤ミサヲ、佐藤テル子、柴田勝子、庄崎ヒデ子、瀬戸啓治、高浜謙一、徳永ノブヨ、土斐崎初栄、西尾タツヨ、英豪之、平井和子、堀川ヒロ子、松井フユ子、松井邦子、溝口武司、宮原邦江、三浦義隆、門司ヒロ子、山田サヨ子、吉岡田鶴子、吉村哲美、萬スミヨ

整理作業　平川啓治、藤野雅樹、岡根なおみ、大賀順子、大神真理子、清永啓子、高田美穂、永井和子、西嶋奈美、松尾信子、村上信子（五十音順）

第２章　遺跡の立地と歴史的環境

１）遺跡の立地

有田遺跡群は、福岡市の西南部に位置する早良平野と呼ぶ小平野に所在する遺跡である。この平野は早良区と西区の東半分に広がり、博多湾沿岸部の海岸砂丘と室見川水系によって形成された沖積地から構成されている。平野の西側は飯盛山から長垂丘陵、東側は鴻巣山、油山山塊、南側は背振山系で限定されている。

有田遺跡群は平野の北側、室見川右岸にある最大標高15mを測る独立中位段丘上に立地している。この段丘は室見川や金屑川による浸食を受け、北に八手上に台地が広がる独特な形状を呈している。台地の規模は南北長約1.7km、東西最大幅約0.8km を測る。台地中央部の有田１・２丁目を最高所として、北に緩やかに傾斜している。第124次調査地点は台地中央部の幅の狭いくびれ部、第150次調査地点は西北に伸びる台地の支脈の先端に立地している。

２）歴史的環境

有田遺跡群が所在する早良平野は古くから開けた地域で、数は少ないが旧石器時代から遺跡が知られている。台地・丘陵上に遺跡は立地し、主な遺跡は吉武遺跡（15）や本遺跡（１）などである。

縄文時代早期から前期にかけての古い時期の遺跡は内陸部の内野地区や山沿いの台地部に分布する。後期から晩期になると、遺跡は平野低地部まで進出してくるが、進出限界は有田から福重あたり迄である。主な遺跡としては内陸部の四箇遺跡（16)、田村遺跡（13)、東入部遺跡、松木田遺跡などがある。

弥生時代になると遺跡は海岸砂丘部まで広がる。初期の遺跡は本遺跡や拾六町平田遺跡、石丸古川遺跡などが知られ、博多区の板付遺跡とほぼ同時期の環濠集落が本遺跡で発見されている。また吉武遺跡では弥生時代前期末から中期にかけての、多く副葬品を持つ甕棺墓・木棺墓などが調査され、弥生時代のクニの王墓と考えられている。また平野内には吉武遺跡や有田遺跡などのように地域の核となる拠点集落がいくつか存在している。後期後半頃には、平野西側の野方遺跡で環濠で囲まれた大規模な集落が確認されている。

古墳時代の遺跡は前時代とほぼ同様の範囲に分布する。海岸砂丘部の藤崎遺跡では前期の方形周溝墓が調査され、主体部から三角縁神獣鏡が出土している。前方後円墳は少なく、拝塚古墳（17）や樋渡古墳、梅林古墳（18)、羽根戸南古墳群などが知られているのみである。後期の群集墳は周辺の山沿い一帯に数多く造られている。大規模な集落遺跡としては本遺跡以外では西新町遺跡、藤崎遺跡、野方遺跡、飯倉遺跡（８)、東入部遺跡などがある。

歴史時代になると、古代は早良郡の田部郷にある。早良郡には７郷あり、本遺跡は田部郷にある。また有田地区ではこの時期の大型建物群が検出されており、早良郡衙の可能性が指摘されている。

戦国時代になると油山西側の荒平山山頂（標高392m）に安樂平城が築かれ、守護・戦国大名の大内氏・大友氏の早良郡支配の拠点となった。16世紀後半には大友氏の被官の小田部氏が安樂平城主となるが、江戸時代の編纂資料『筑前国続風土記拾遺』には小田部氏の里城が有田村にあったと書かれており、有田の小田部城跡がそれではないかと考えられる。

Fig. 1　有田遺跡群と周辺遺跡（1/25,000）

1．有田遺跡群　2．有田七田前遺跡　3．原遺跡群　4．原談儀遺跡　5．原深町遺跡
6．飯倉原遺跡　7．飯倉唐木遺跡　8．飯倉遺跡群　9．干隈古墳　10．鶴町遺跡
11．野芥大藪遺跡　12．次郎丸高石遺跡　13．田村遺跡群　14．橋本榎田遺跡　15．吉武遺跡群
16．四箇遺跡群　17．拝塚古墳　18．梅林古墳

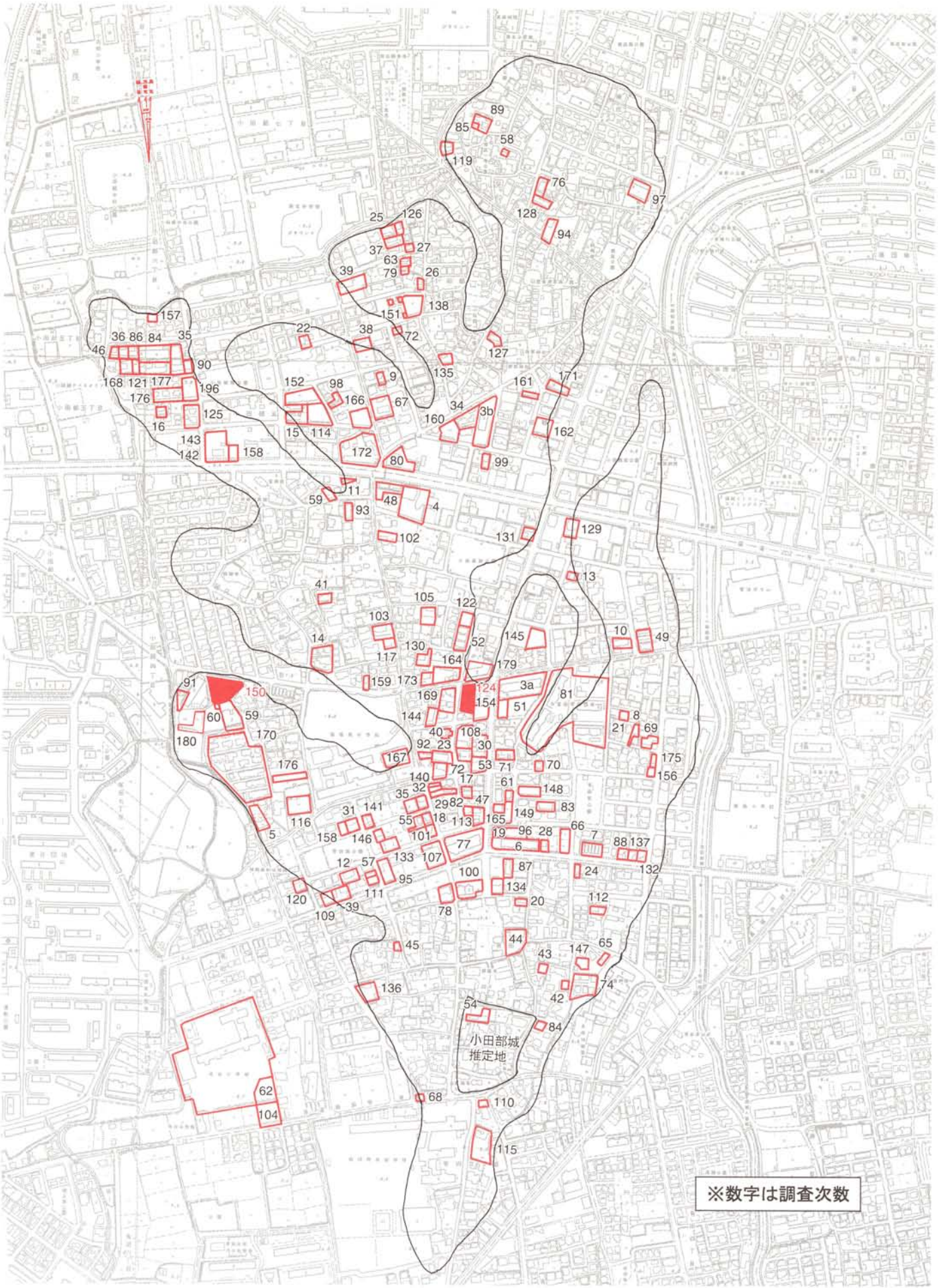


Fig. 2　有田遺跡群調査地点位置図（1/7,500）

第３章　第124次調査の記録（調査番号8713）

１）　調査の概要　(Fig.3、PL.3)

本調査区は早良区有田１丁目24－４に所在する。北に向かって八手状に広がる有田・小田部台地のほぼ中央、北から入り込む谷の付け根の斜面に位置する。周辺は調査が最もよく行われており、調査区の西側では第169次調査、東側では第154次調査、北側では第179次調査、南側では第108次調査が行われている。

発掘調査は昭和63年６月23日から９月26日にかけて行った。全体の調査面積は650㎡である。遺構面の標高は南側が10.75ｍと高く、北東谷部に向かって下傾し、その比高差は約２ｍを測る。南側は表土下すぐ鳥栖ロームの遺構面となり、北側は表土の下に客土があり、その下の厚さ60㎝程の包含層が堆積する。この包含層の上面で平安時代の大溝等の遺構を確認している。検出した主な遺構は竪穴住居跡８棟、井戸２基、土坑４基、溝９条、ピット群である。ピットは多数検出したが、建物としてまとめ得なかった。出土遺物は遺構や包含層などから、弥生時代から中世にかけての時期のものが出土している。

２）　遺構と遺物

①　竪穴式住居跡（SC)

８棟検出した。いずれも古墳時代後期の竈が付く方形住居である。時期的には６世紀後半から７世紀初めにかけてのもの。

SC01（Fig.4、PL.4）　調査区中央西側で検出した一部が西側境界にかかり、平面形態が方形を呈すと思われる住居である。南北溝SD01と東西溝SD05に切られている。全体の規模は不明だが、南北長6.28ｍ、東西長４ｍ以上、残存壁高は20㎝を測る。主柱は４本柱と思われるが、２本分の柱穴を検出している。主柱はそれぞれ２～３基の柱穴が切り合い、建て替えがあったと思われる。柱穴距離は3.1ｍを測り、柱穴の深さは60～70㎝と深い。形態から竈を持つと考えられるが、竈は確認出来ていない。床面は粘土で貼り床され、中央部分に向かって少し窪む。

出土遺物（Fig.7・35、PL.9）　弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、玉類などが出土している。

１～12は須恵器である。１・２は坏蓋。１は天井部1/2片。天井部は回転ヘラケズリでその他は回転ナデ調整。２は1/2片で復元口径は13.8㎝を測る。天井部2/3は回転ヘラケズリでその他は回転ナデ調整。内面に当て具痕が残る。ロクロ回転はいずれも時計回り。３～８は坏身。いずれも小田編年のⅢｂ期のもの。３は1/2片で、口径は12.0㎝、受け部径14.2㎝、器高4.6㎝を測る。外底部2/3は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整で、外底部には板目が残る。４は部分的に欠損するが、口径12.8㎝、受け部径が14.7㎝、器高4.3㎝を測る。外底部2/3は回転ヘラケズリ後ナデ、その他は回転ナデ調整。外面には灰がかかる。５は1/8片で復元口径は13.2㎝、受け部径15.4㎝を測る。６は1/6片で復元口径13.0㎝、受け部径14.0㎝を測る。器表面は磨滅し調整は不明。７・８は1/6片。復元受け部径は７が14.0㎝、８が12.5㎝を測る。いずれも外底部は回転ヘラケズリ後ナデ、その他は回転ナデ調整。９は蓋と思われる1/6片。復元口径9.8㎝を測る。内外面は回転ナデ調整。10は甕口縁部1/3片。復元口径は6.4㎝を測る。表面に自然釉がかかる。11は口縁部1/8片。復元口径11.0㎝を測る。口端部は玉縁状を呈する。表面は磨滅し調整不明。12は坏底部1/2片。底径7.2㎝を測る。外底部はヘラケズリ、内面はナデ調整。溝SD01からの混入か。１・３・６・10・12の胎土には黒色粒子を含む。

Fig. 3　遺構全体図（1/200）

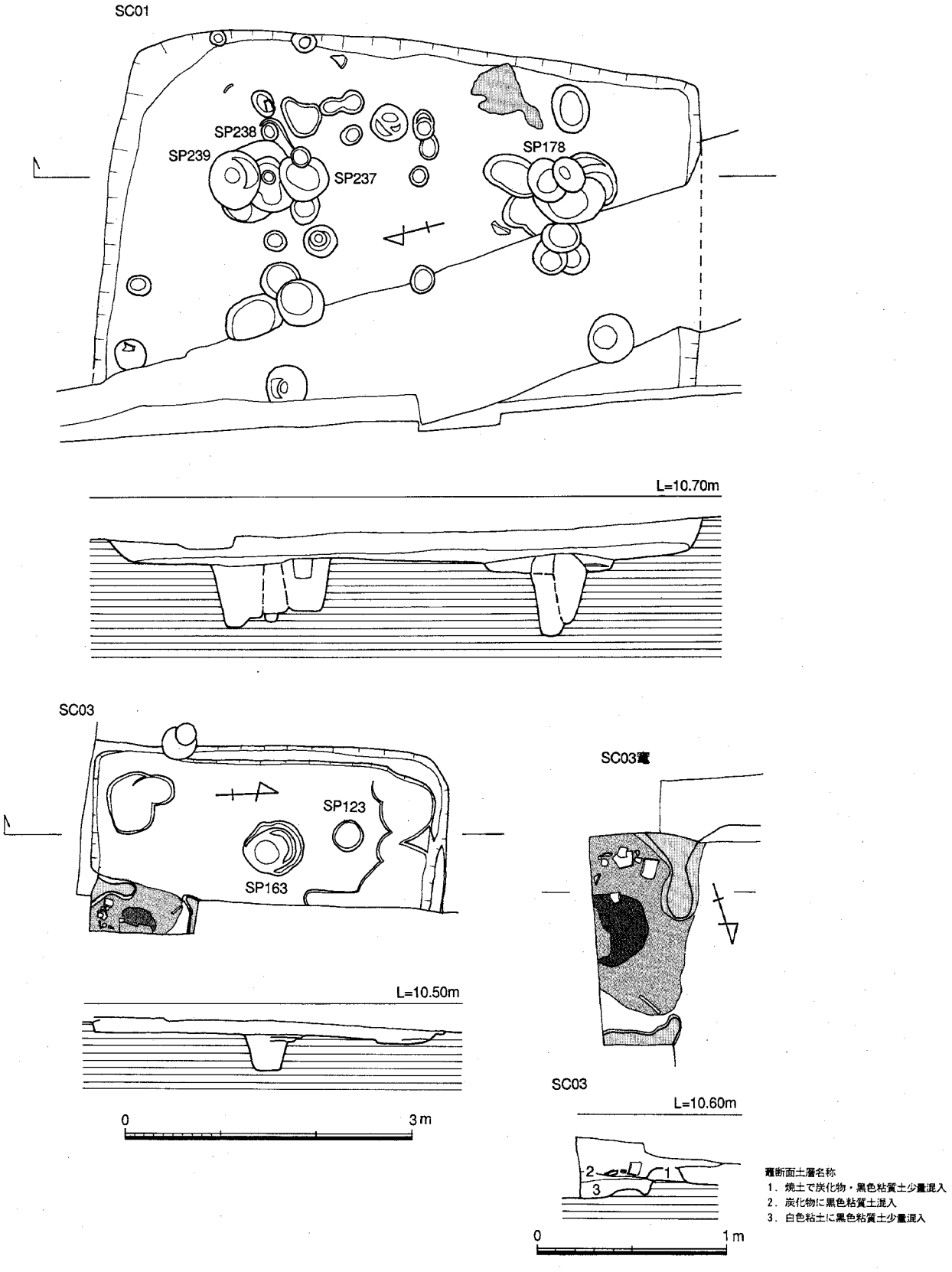


Fig. 4　SC01・03と竈（1/60・1/30）

13～21は土師器。13は壷で直立気味の口縁部1/4片。復元口径は12.6cmを測る。器表面は磨滅し調整は不明。14～17は甕。14は口縁部1/10片で、復元口径34.4cmを測る。体部外面は粗いハケ、内面はヘラケズリ調整。８世紀代でSD01に伴うものか。15は1/6片で、 復元口径16.6cmを測る。器表面は磨

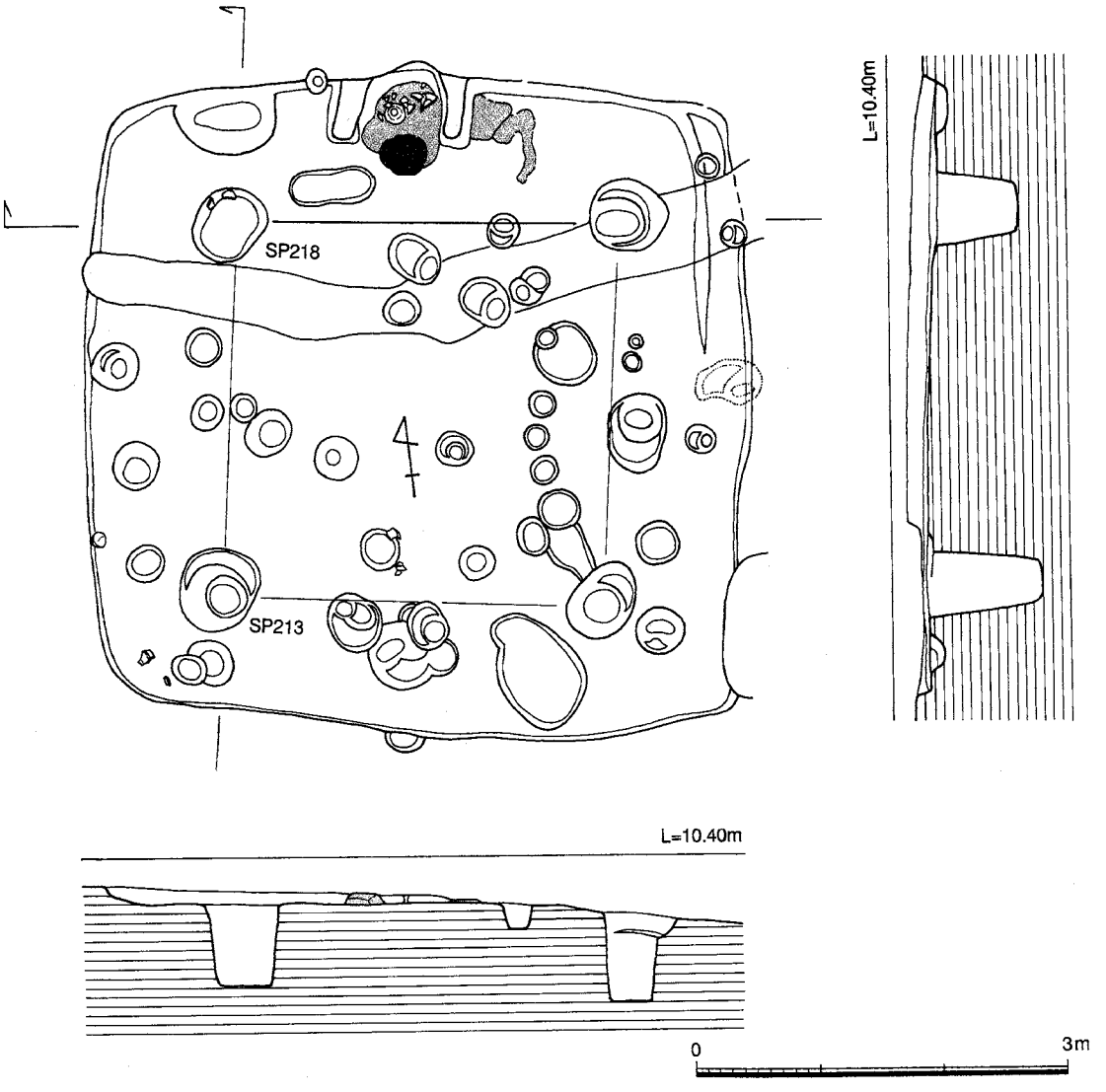


Fig. 5　SC02（1/60）

滅し調整は不明だが、内面はヘラケズリ。16は端部が丸い口縁部細片。17は口縁から体部1/6片。口端部は平坦で頸部のくびれは緩い。器表面は磨滅がひどい。内面には叩き痕がかすかに残り、また煤が付着する。14～16はいずれも石英・長石粒を多く含み、17は褐色粒子を含む。18は坏1/3弱片で復元口径16.6cmを測る。丸底気味の底部で、器表面は磨滅し調整は不明。19は平底の坏1/6片。復元口径は14.1cmを測る。器表面は磨滅し調整は不明。20・21は高坏。20は坏部底部片。21は脚部片。いずれも器表面は磨滅するが、21の外面はタテヘラケズリ、内面もヘラケズリ。18・19の胎土には褐色の粒子を含む。22は主柱穴出土の須恵器坏身1/6片である。復元口径11.4cmを測る。Ⅳa期頃のものか。１・15・21は床面出土、４は貼り床面下出土である。４・14・19は時期的にSD01に伴うものであろう。

387～389は滑石製臼玉。それぞれ直径6.5mm・７mm・６mm、厚さは３mm、孔径２mmを測る。

SC02（Fig.5・6、PL.4・6）　調査区中央で検出した平面形が方形を呈する住居で、SK01、SD05・09に切られる。規模は東西長5.4m、南北長5.3m、残存壁高15cmを測る。北壁中央部分に竈が付き、主柱穴は４本である。主柱穴の間隔は3.1～3.2m、深さは60～90cmを測る。柱径は痕跡から15～20cmと考えられる。柱穴は切り合いがなく、建て替えはない。竈は白色粘土を両袖で貼り付けたもので、幅115cm、長さ55cmを測る。竈内には焼土と炭化物が詰まっており、それを除去すると土師器の高坏を倒

立させた支脚があった。竈前面には径35cm程の円形の焼土面があった。それを撤去するとピット状に落ち込む。また竈中央壁面はやや突出しており、煙道の可能性がある。竈の東側には炭化物が散らばる。

出土遺物（Fig.7・8・27、PL.9）　弥生土器や古墳時代～古代にかけての土師器・須恵器、中世の白磁や土師器Ⅲ・玉・砥石片などが出土している。

23～39は須恵器。23～26は坏蓋。いずれもⅢｂ～Ⅳa期に相当する。23は天井部1/6片。外面は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整。24～26は同形態のものであるが、24の口端部内面に稜がつく。残存率は24は1/10、25・26は1/8である。復元口径は13.0cm、13.0cm、12.8cmを測る。27は蓋1/8片で、復元口径は12.0cmを測る。天井部にはつまみが付くものと思われる。外面天井部と口縁部の境に稜を有し、口端部内面にも段を有す。調整は天井部外面はヘラケズリ、その他は回転ナデ調整である。28～34は坏身。28～30はほぼ同形態。28は1/2片で、復元口径12.0cm、受け部径14.6cm、器高4.2cmを測る。外底部1/2は回転ヘラケズリでロクロ回転は時計回り。その他は回転ナデから内底部はナデ調整。29は1/8片で、口端部は欠損するが、復元受け部径14.0cmを測る。30は1/8片で、復元口径は13.2cmを測る。29の焼成はやや不良。30の胎土は精良である。31・32は口縁部が内傾する形態で、口端部が欠損する。残存率は31が1/10以下、32が1/6である。復元受け部径は31が14.0cm、32が13.6cmを測る。外底部は回転ヘラケズリで、31は灰カブリする。33は口縁部が外に開く形態。高台が付くものと思われる。34は口縁部1/5片で、復元口径約11cmを測る。体部が丸みを持ち、口縁部が短く「く」字状に外折する。調整は内外面ヨコナデである。35は壷の平底底部1/6片である。復元底径9.8cmを測る。外底部は回転ヘラケズリ、体部は回転ナデ調整である。胎土は精良で石英・長石の微粒を少量含む。36～39は甕。36は口縁部細片。37は頸部1/10片。外面木目直交の叩きを加える。38・39は体部細片で外面格子目叩き、内面平行する当て具痕が残る。外面赤みを持つ灰色を呈し、同一個体と思われる。

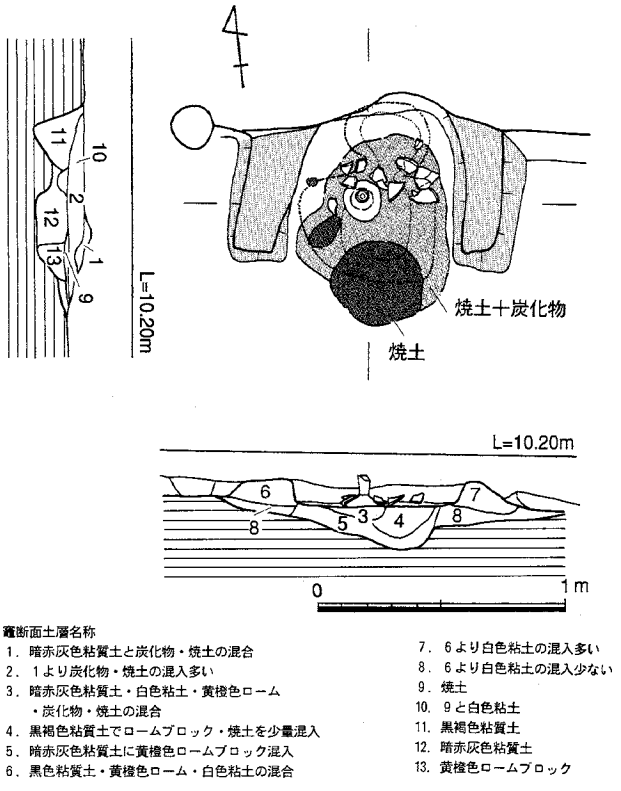


Fig. 6　SC02竈（1/30）

40～50は土師器。40は無頸の壷と思われる口縁部1/5片。口端部は平坦、僅かに窪む。器表面は磨滅し調整は不明だが、ナデ調整と思われる。胎土は精良。41～46は甕。41は小型の甕1/10片弱で、復元口径は16cmである。体部外面は粗いハケ、内面はヘラケズリ調整である。外面に黒斑がある。42～44は同形態の中型甕。42は1/6片で、復元口径は28.0cmを測る。体部外面は粗いタテハケ、内面はタテヘラケズリ調整。口縁部外面はハケ後ナデ、内面はヨコハケ調整である。胎土に金雲母を多く含む。43・44は1/10片、復元口径は25cmと25.8cmを測る。いずれも表面は摩滅するが、外面はハケ、内面はヘラケズリで、43の口縁部内面はヨコハケ、44はナデである。45・46は大型の甕。残存率はいずれも1/6と1/8で、復元口径は34.4cm、32.8cmを測る。45の外面は粗いヨコハケ、内面はヨコハケからヘラケズリ調整である。46は外面が粗いハケ、内面はハケ後ナデで、体部はヘラケズリ調整である。いずれも胎土は石英・長石と金雲母を多く含む。47は竈支柱に使われた高坏で全体にかなり欠損する。復元

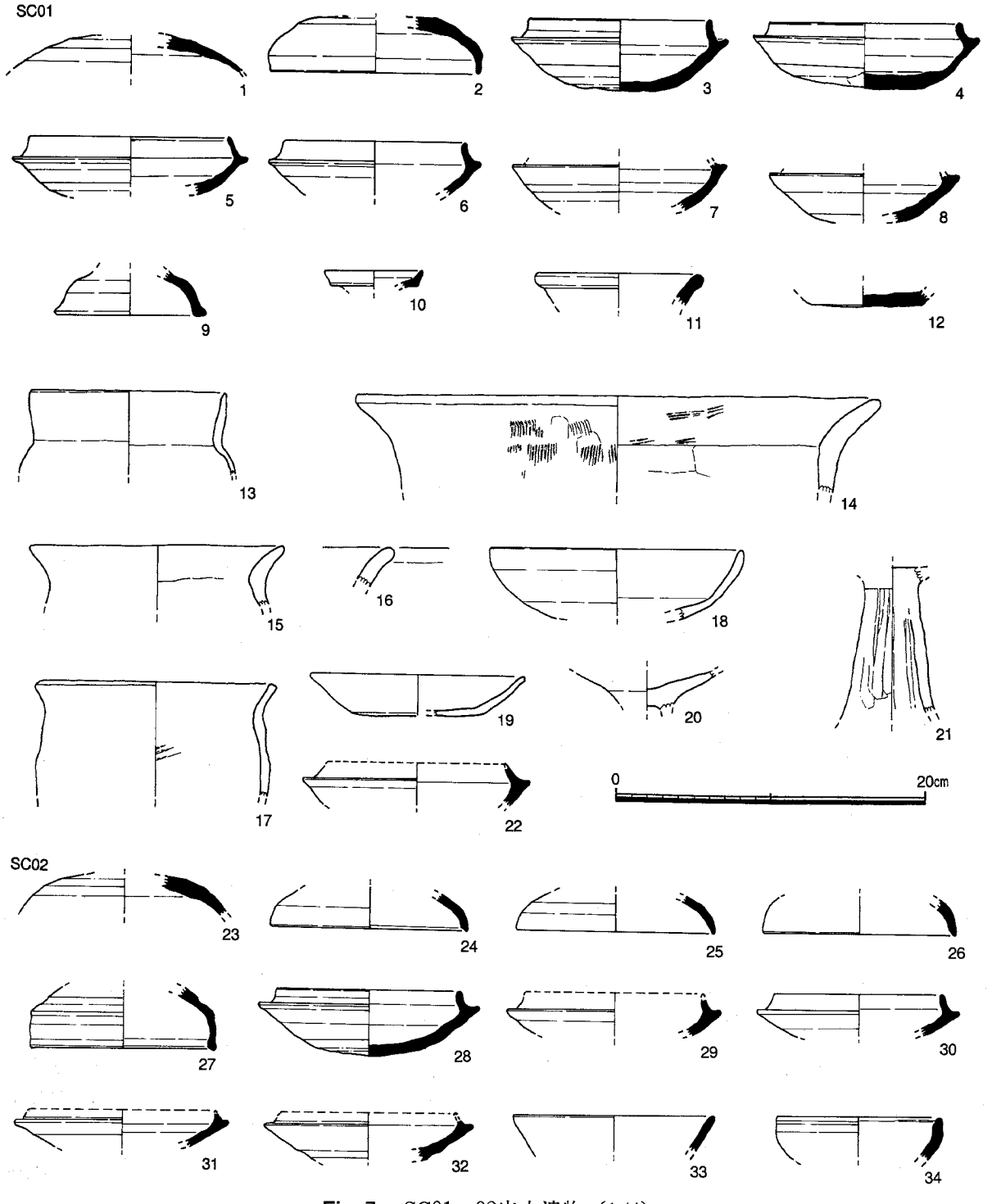


Fig. 7　SC01・02出土遺物（1/4）

口径16.6cm、器高16.3cmを測る。器表面は磨滅がひどいが、坏内面はハケとヘラミガキ、脚外面はヘラミガキ調整か。色調は明赤褐色を呈す。48は完形の手捏ね土器で口径は2.5～2.8cm、器高2.3cmを測る。胎土に褐色粒子を含む。49は坏1/8片で復元口径は13.4cmを測る。50は托形を呈すもので、上部径6.9cmを測る。底部径7.8cmを測る。器表面は磨滅するがヨコナデか。

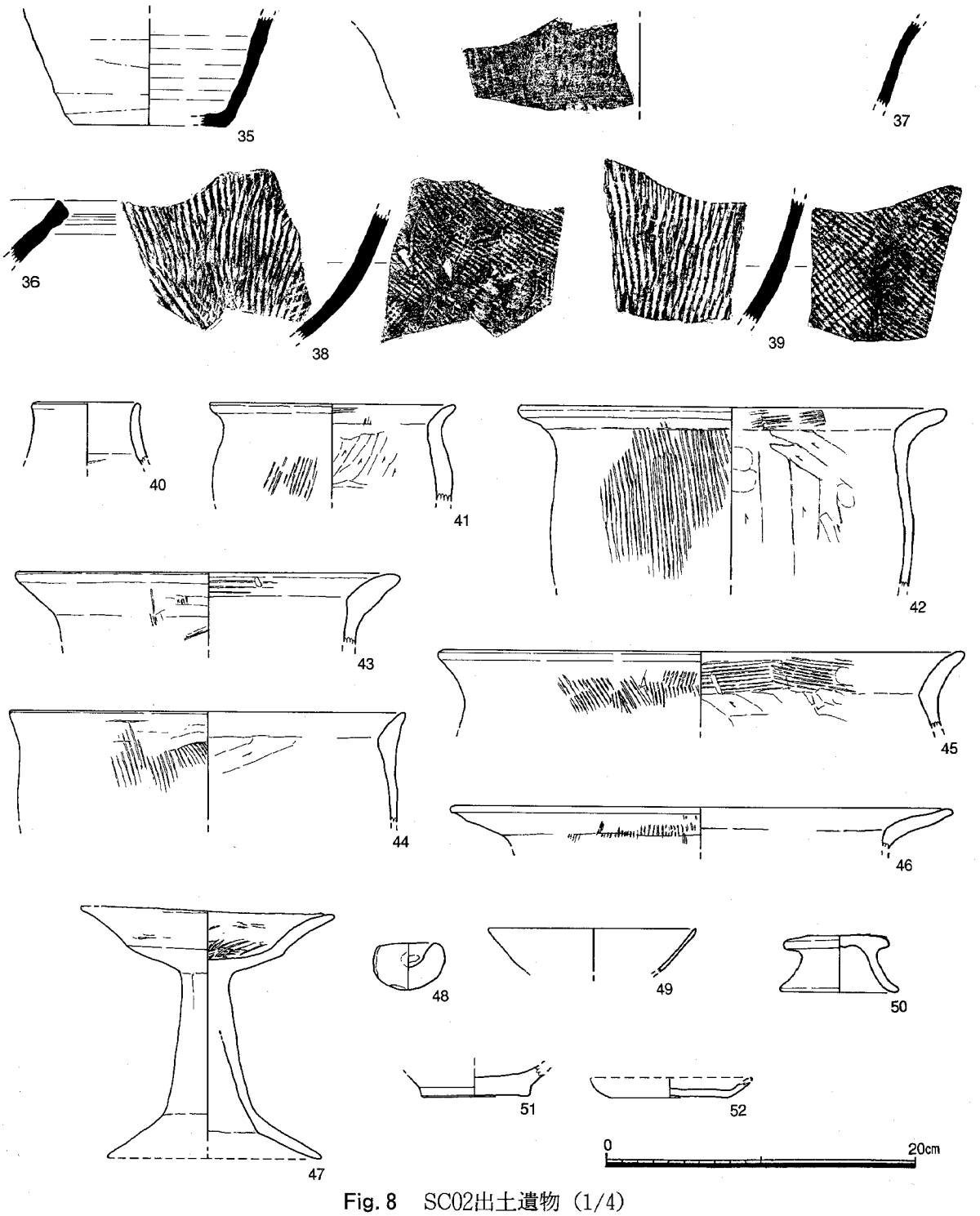


Fig. 8　SC02出土遺物（1/4）

51・52はSD05に伴うものか。51は白磁碗底部片。復元底径は7.2cmを測る。外底部はケズリで露胎、内面は釉薬がかかるが、発色が悪く焼成は不良。52は口端部を欠する土師器皿。復元口径は10.5cm、器高1.3cmを測る。器表の磨滅はひどいが、外底部はヘラケズリ、その他の調整は不明。247は砂岩製の砥石片。残存長8.9cm、最大幅7.7cmを測る。砥面は上下・左右４面で、浅黄色の仕上砥石である。

SC03（Fig.4、PL.6）　調査区南東隅で検出した住居。東側の第154次調査区にかかる。第154次調査区では平面で確認出来ず、調査区の土層断面での確認で、全体の規模は不明である。住居自体は第154

次調査区では包含層を切り込んでいる。調査区での確認規模は東西長1.7m以上、南北長3.6mで、第154次調査区迄を含むと東西長は４m以上となり、東西方向の長方形気味の住居になるものと思われる。南壁沿いには白色粘土と焼土・炭化物が集中する部分があり、調査区を一部拡張し調査した結果、白色粘土で造られた竈の一部を確認した。竈内面には土器や炭化物があった。床面中央に主柱穴と思われるピットがあるが、第154次調査区を併せて考えると、これに対応するものが見当たらない。境界の未調査区にあるのかも知れない。

出土遺物（Fig.9・35、PL.9）　弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、滑石製臼玉などが出土している。須恵器についてはⅣa期頃のものである。

53～57は住居埋土。53～56は須恵器。53は坏蓋1/8片で、復元口径は13.6cmを測る。調整はヨコナデ。54・55は坏身。いずれも1/6片で、54は復元口径11.8cm、受け部径13.8cm、器高3.4cm、55は復元受け部径13.6cmを測る。54の外底部は静止ヘラケズリ、55は回転ヘラケズリである。色調は55はにぶい橙色で、焼成は不良。いわゆる赤焼け須恵器である。56は高坏の器台脚部1/3片。復元脚端径11.0cmを測る。内外面ヨコナデであるが、ヘラ切りの透かし窓が入ると思われる。57は土師器の高坏脚部。器表面は磨滅し調整は不明。内面しぼり痕が残る。胎土に石英・長石粒を多く含む。

58～64は竈内出土。58～62は須恵器。58・59は同形態の坏蓋である。1/6強片と1/8弱片で、復元口径は13.4cm、13.6cmを測る。60は坏身1/10片。復元受け部径13.4cmを測る。61は高坏坏部片。調整はヨコナデ。62は甕胴下半部細片。外面木目直交叩き、内面同心円の当て具痕が残る。

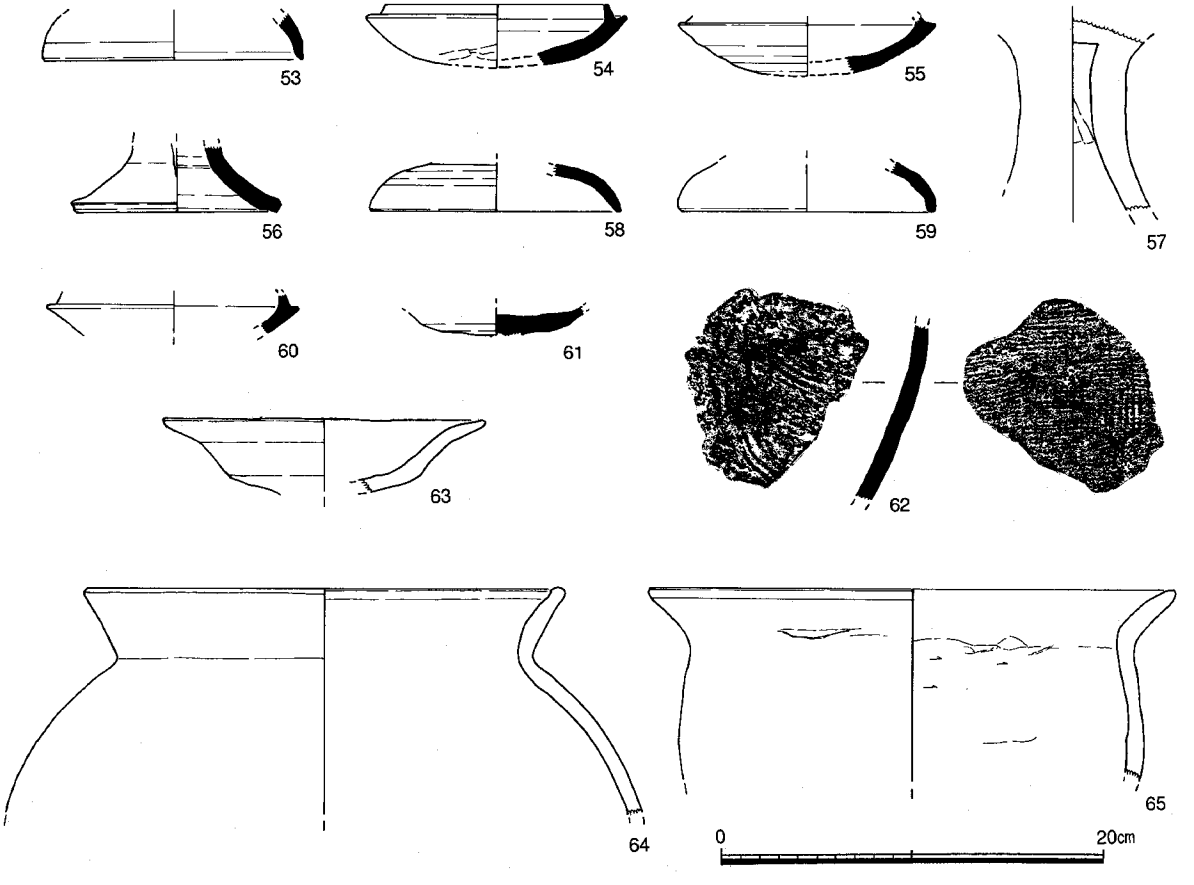


Fig. 9　SC03出土遺物（1/4）

63～65は土師器。63は高坏坏部1/2片。復元口径17.0cmを測る。器壁は割合厚みがある。器表面の磨滅はひどく、調整は不明。64・65は壷の口縁から胴部片。復元口径は25.4cmを測る。器表面はやや磨滅するが、体外面叩き後カキ目、内面同心円状の当て具痕が残る。胎土に石英・長石粒を多く含む。65は甕1/6片で復元口径27.8cmを測る。器表面はやや荒れるが、口縁部はヨコナデ、胴部内面はヘラケズリである。胎土に長石・長石粒を多く含む外、金雲母を少量含む。

390・391は滑石製臼玉。いずれも直径は4.5mm、厚さは２mm・３mm、孔径は１mmを測る。

SC04（Fig.10、PL.6）調査区南西隅で検出した住居。残りは悪く、南境界地に焼土と炭化物、壁の一部を検出したことから住居とした。主柱穴は不明で、**出土遺物**は無く時期も不明。

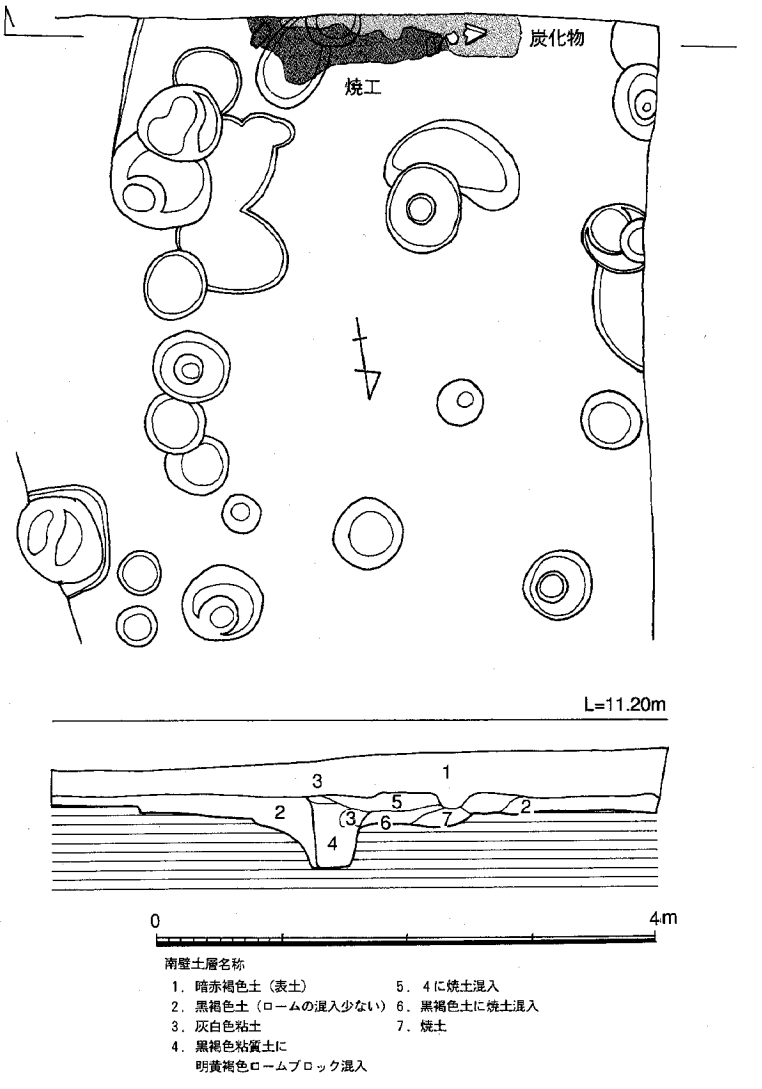


Fig.10　SC04（1/60）

SC05（Fig.11・12、PL.5・6）　調査区北側で検出した方形の住居。SC07を切り、SC06と建て替えである。またSK04が切る。住居床面は地山粘土で貼り付け、 平坦にしている。また壁溝はない。規模は東西長5.40m、南北長5.54m、残存壁高40cmを測る。主柱穴は４本で、柱間距離は2.60～2.70mを測る。柱の深さは60～70cmで深くしっかりしている。柱径は痕跡から20cm前後であると推定される。西壁中央やや南寄りに白色粘土を貼り付けて築造した竈がある。竈幅は95cm、長さ90cm程で、竈内には焼土塊や炭化物、土器片が散布しており、その中央部分には上半が焼けた支脚に使われたと思われる石が２個埋まっていた。焼土・炭化物などを取り除くと竈床面は浅く窪む。また竈内壁側は僅かに突出し、煙道があったものと思われる。

出土遺物（Fig.13・27・35、PL.9）　弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器・滑石製臼玉などがあるが、SC06・07を切る為、それらの住居の遺物が混入している可能性がある。

66～75は須恵器。Ⅲｂ期からⅣa期頃の時期のもの。66・67は坏蓋である。1/8片と1/10片で、復元口径は13.6cmと13.8cmを測る。調整は66が回転ナデ、67は天井部が回転ヘラケズリ、口縁部外面が回転ナデで板目痕が残る。67の胎土は黒色粒子を含む。68～72は坏身。68・69はⅢｂ期頃のものか。68は上半部はかなり欠損するが、復元口径12.3cm、復元受け部径15.1cm、器高4.4cmを測る。底部2/3は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ、内底は不整ナデである。色調は灰褐色を呈し、焼成は良い。ロクロ回転は時計回りである。69は1/8片で、復元受け部径15.6cmを測る。胎土は精良、色調はにぶい褐色

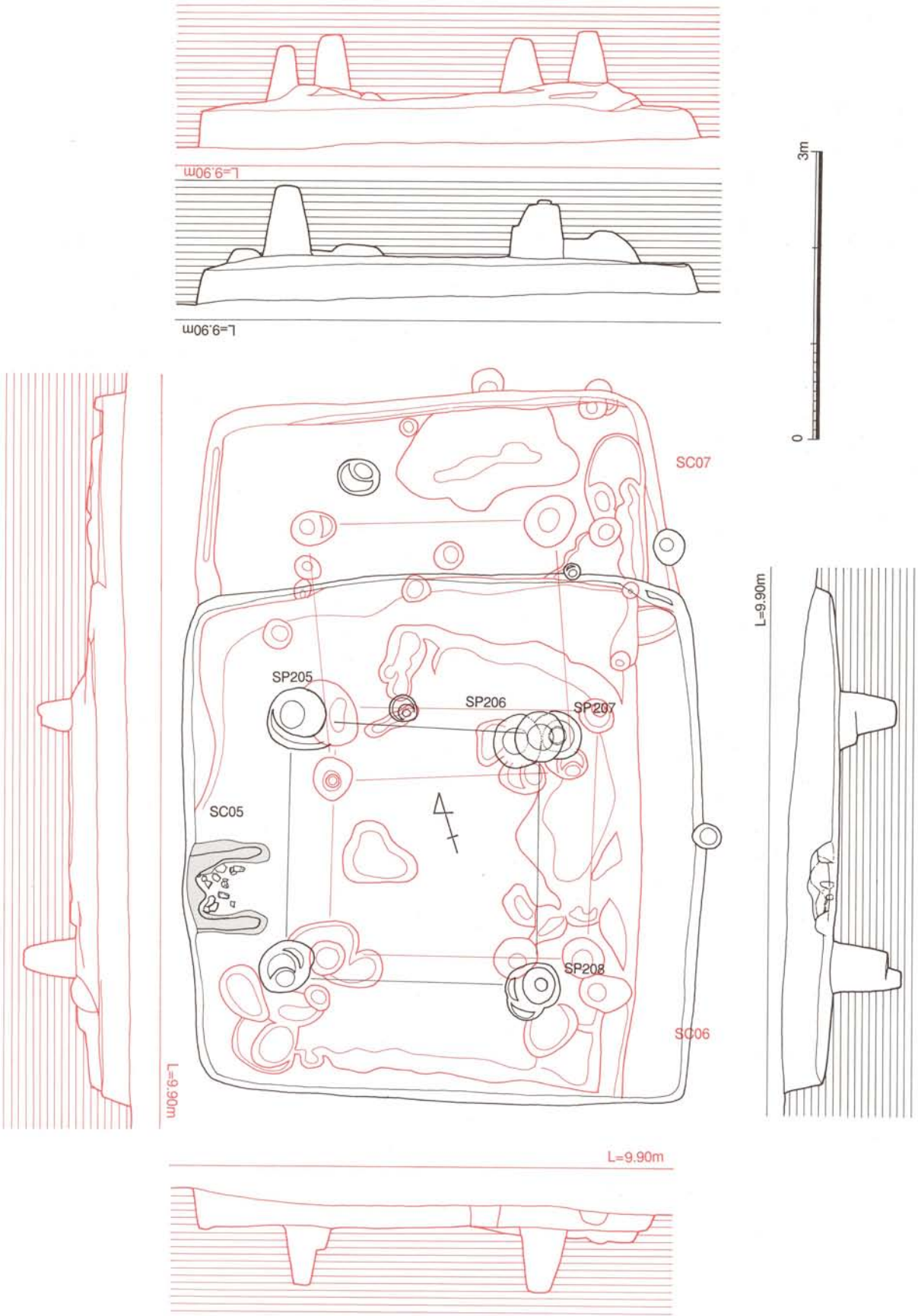


Fig.11　SC05～07（1/60）

を呈す。68・69いずれも赤焼きの須恵器である。70はⅣa期頃のもの。1/6片で復元口径8.6cm、復元受け部径13.0cmを測る。口縁部には蓋の口縁片が付着する。器表面が剥離する所もある。71は1/8片で口縁端部を欠損する。復元受け部径は14.0cmを測る。72は底部1/2弱片。外底部は回転ヘラケズリでその他はヨコナデ、内底部は不整ナデである。色調はにぶい褐色を呈し、赤焼け須恵器である。73は坏か高坏の坏身部分1/4片。復元口径15.8cmを測る。内外面回転ナデ。胎土に石英・長石を多く含む外、黒色粒子も含む。74・75は高坏脚裾端部。74・75は1/6片と1/4弱片で、復元口径は14.2cmと9.6cmを測る。いずれも調整はヨコナデ。

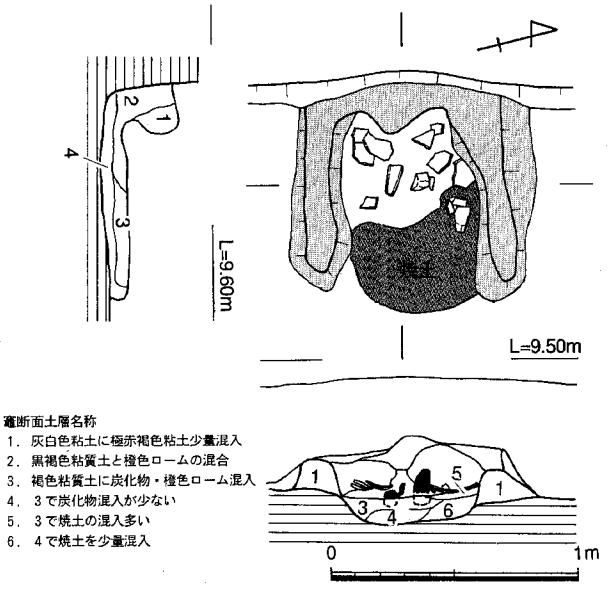


Fig.12　SC05竈（1/30）

76～92は土師器。76は坏口縁部1/6弱片。復元口径は14.6cmを測る。器表面は磨滅するが、回転ナデ調整である。胎土に長石・石英以外に褐色粒子を含む。77は口端部を欠損する坏または皿小片。復元口径は14.6cmを測る。器表面は磨滅する。78～80は高坏。78・79は坏部1/2弱片と1/6片である。復元口径は12.6cmと15.2cmを測る。79は口端部を欠損する。いずれも口縁部と底部の境に稜を有す形態。77は焼きが良く、赤焼けの軟質な須恵器の可能性がある。80は前期頃の脚部片。器表面は荒れるが、内面にはしぼり痕が残る。胎土はいずれも石英・長石以外に、78は金雲母・褐色粒子、79・80は雲母も含む。81～91は甕。81～84は小型の甕。81は1/3片で復元口径は13.2cmを測る。口縁部内外面はハケ後ナデ、体部内面はヘラケズリ調整である。82は1/4弱片で復元口径16.4cmを測る。器表面は磨滅するが、ヨコナデ調整である。83は1/3片で復元口径16.2cmを測る。器表外面は、磨滅するが、体部内面はヘラケズリ調整である。84は1/10片で復元口径は18.8cmを測る。体部内面はヘラケズリ調整である。胎土は石英・長石粒子以外に81には雲母、83には褐色粒子を含む。85～91は中型の甕。85は1/6片で復元口径は21.2cmを測る。口縁部内外面ハケ後ナデ調整である。86は1/2片で復元口径は19.4cmを測る。口縁部外面はハケ後ナデ、内面はヨコハケ調整。胴部外面はハケ後ナデ、内面はヘラケズリ調整である。胎土は石英・長石・黒雲母を含む。87は胴部下半1/3弱片である。外面指オサエ後ナデ、内面ヘラケズリ調整で上部には指オサエ痕が残る。外面下部には煤が付着する。88は壷の可能性もある胴頸部1/2片。胴部外面はタテハケで頸部近くはハケ後ナデ、内面はヘラケズリ調整である。89は胴部下半1/5片である。外面は粗いタテハケ、内面はやや磨滅するが、ヘラケズリ調整である。外面には煤が部分的に付着する。90は口縁部1/10片で復元口径22.8cmを測る。口縁部内外面はハケ後ナデ調整。91は口縁部1/10片で、甑の可能性もある。器表面の磨滅がひどく、調整は不明。胎土は石英・長石粒を含む外、86・90には雲母、87には黒雲母・褐色粒子、91には褐色粒子・角閃石粒子などを含む。

92は古墳時代前期の鉢1/10片。口端部と底部を欠損する。器表面は磨滅し、調整痕ははっきりしないが、体部外面から口縁内面はヘラケンマか。胎土は精良。焼成も良い。93はイイダコ壺1/2片。復元口径5.5cm、最大胴部径8.4cm、推定器高8.4cmを測る。外面ナデで、内面は指オサエとナデ。胎土は石英・長石粒を多く含む。焼成は良い。94は孔があいた土製品。不定形の焼けた粘土塊で未貫通の孔がある。孔径は1.3×1.1cm、深さ2.1cmを測る。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土に石英・長石・黒色粒

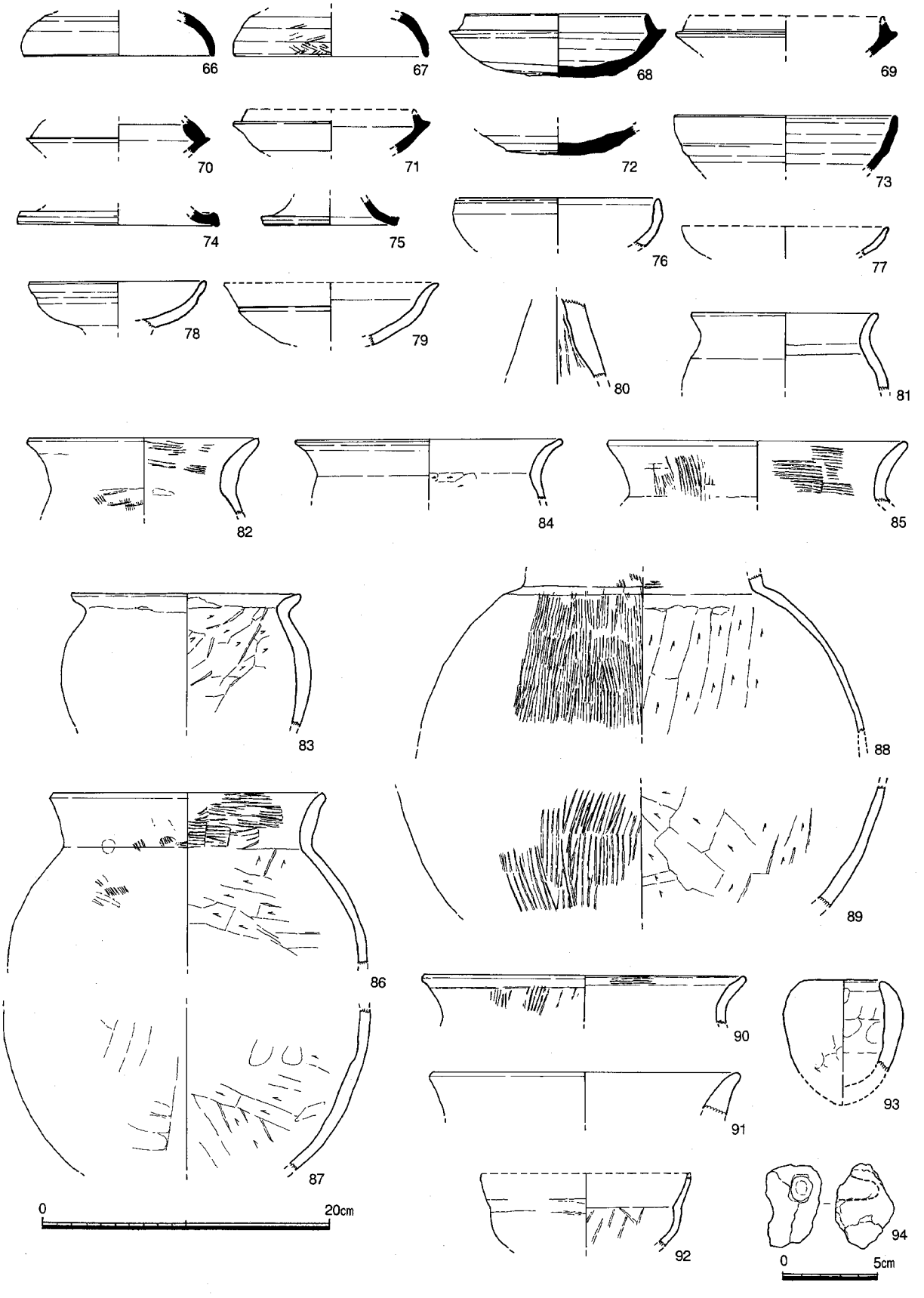


Fig.13　SC05出土遺物（1/4・1/3）

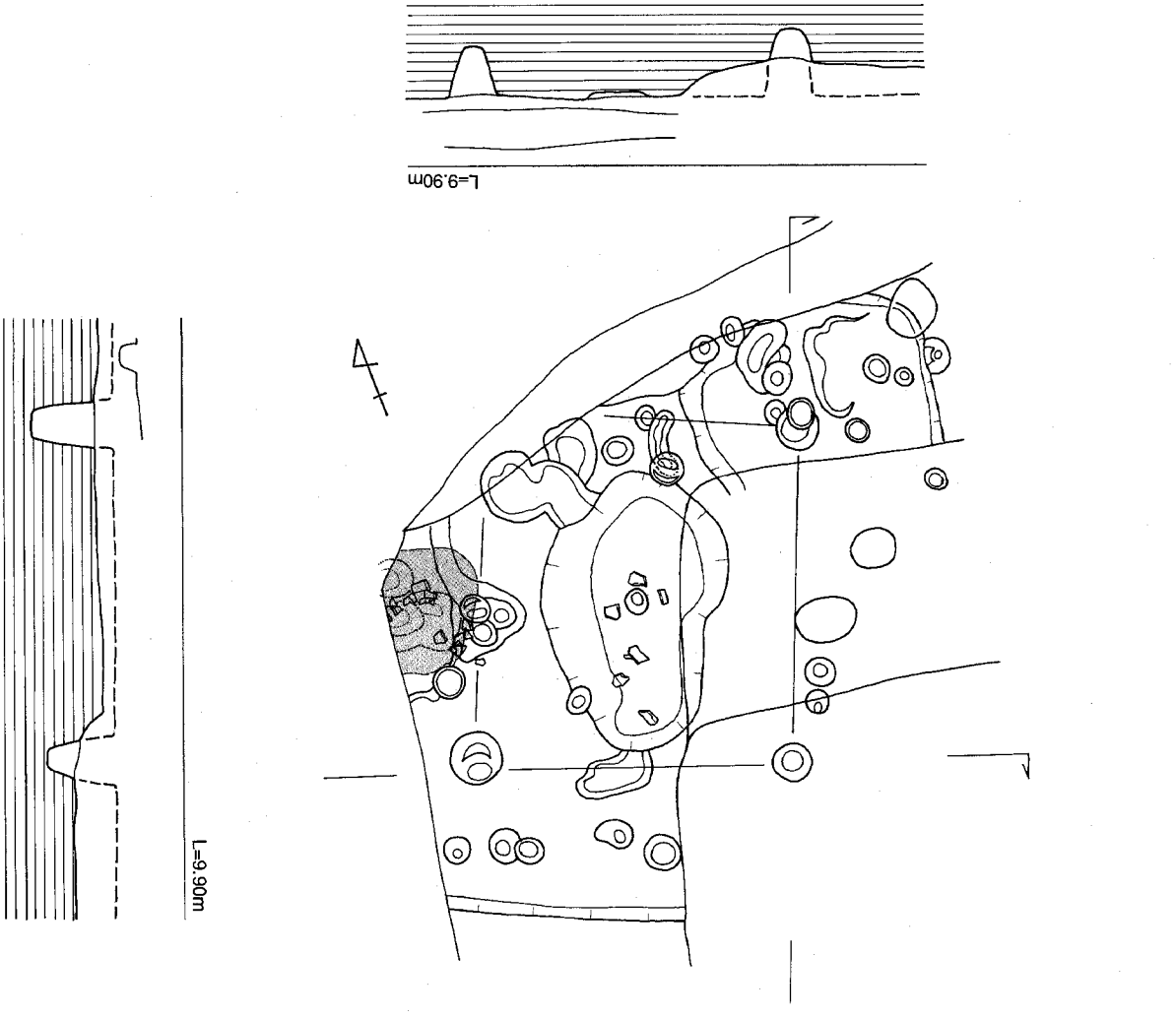


Fig.14　SC08（1/60）

子を少量含む。248は玄武岩製の叩き石。焼けて赤褐色を呈す。全体に磨滅し、使用痕は下端にある。375は不明鉄器片。一辺が3.6㎝四方の小片であるが、右端が折れ曲り、鎌と思われる。厚みは0.6㎝を測る。68・69・73・88～90は竈内出土である。

392・393は滑石製臼玉。いずれも直径は8.4㎜・8.7㎜、厚さ４㎜・５㎜、孔径は2.5㎜を測る。

SC06（Fig.11、PL.5）　SC05と重複する住居で、建て替え関係にある。規模はSC05と重なる為はっきりしない。SC06の床面はSC05より更に最大で20㎝ほど深くなる。主柱穴は４本で、柱間距離は2.56～2.7ｍを測り、SC05とほぼ同間隔である。柱穴の深さは60～65㎝ほどで、柱底のレベルはSC05とほぼ同程度である。焼土や粘土などがなく、竈の痕跡は確認出来なかった。SC05と重なっているものと考える。**出土遺物**はなかったが、14年間の未整理期間中に、紛失した可能性がある。

SC07（Fig.11、PL.5）　SC05に切られる住居で確認規模は東西長4.98m、南北長２ｍ以上を測る。主柱穴は４本で、柱穴間距離は2.54～2.70ｍを測り、柱穴と壁までの距離は1.1～1.3ｍほどで、底から住居全体規模を復元すると、一辺が5.0～5.3m程になり、SC05・06より僅かに小さい住居となる。残存壁高は20～25㎝である。柱穴の深さは60～65㎝を測る。この住居も**出土遺物**はなく、14年間の未整理期間の中で、紛失した可能性がある。

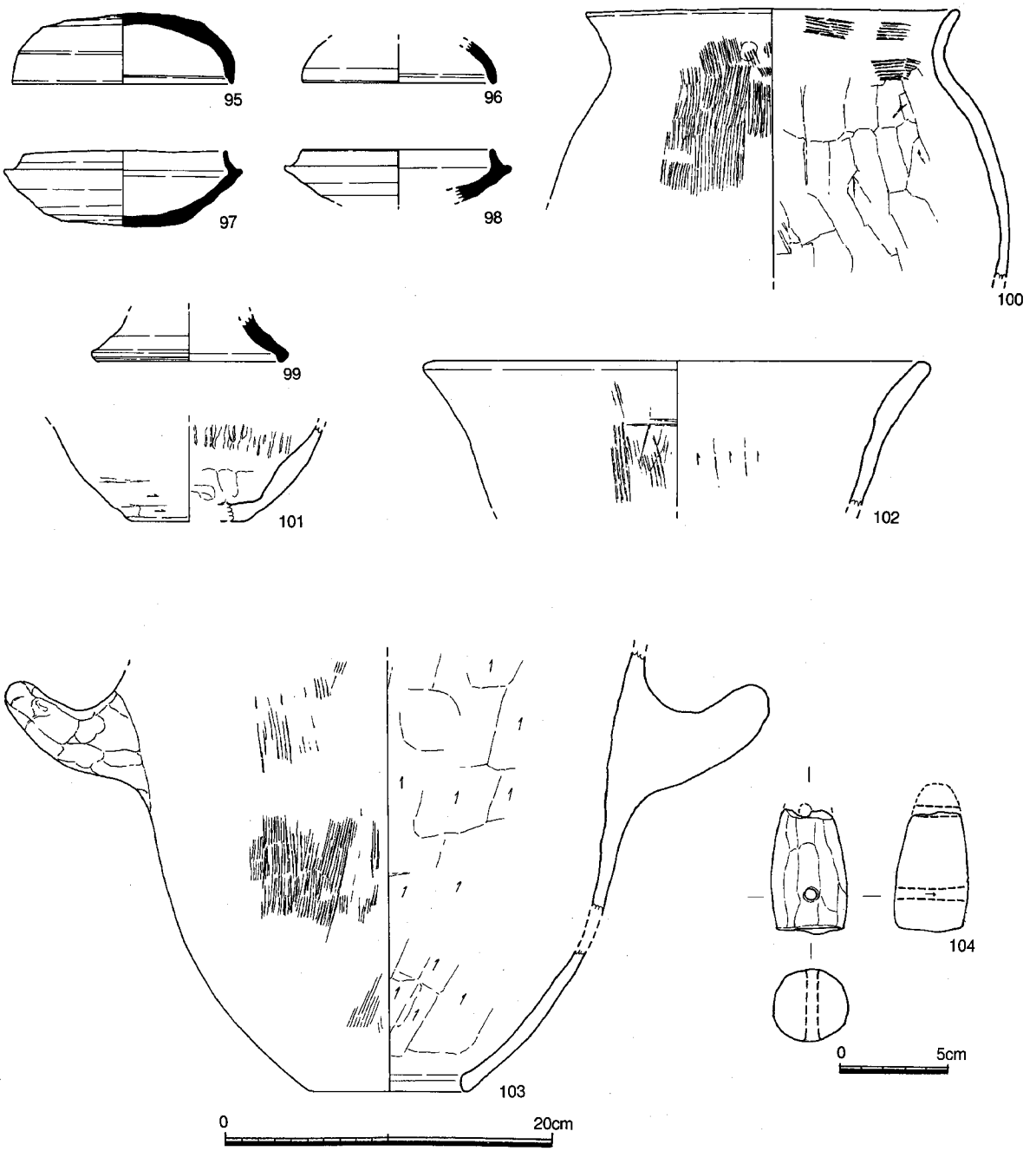


Fig.15　SC08出土遺物（1/4・1/3）

SC08（Fig,14、PL.5）　調査区北西隅で検出した住居で、SC05～07に切られる。北東コーナーがあり、住居は方形住居と考えられる。住居の規模は東西長4.6m以上、南北長5.3m程で、SC07とほぼ同規模と思われる。遺構は比較的残りは良く、最大で40cmを測る。主柱穴は４本柱と考えられる。竈の痕跡を北西境界地で検出した。

出土遺物（Fig.15、PL.9）　古墳時代後期の須恵器・土師器、土錘などが出土した。

95～99はⅢａ期～Ⅲｂ期の須恵器。95・97は竈前出土。その他は埋土出土である。95・96は坏蓋。95はほぼ完形。口径13.6cm、器高4.3cmを測る。外面は口縁部と天井部の境に段を有し、口端部内面に

は明瞭な段を持つ。天井部2/3は回転ヘラケズリ、天井部内面はナデ、その他は回転ナデ調整である。ロクロ回転は逆時計回りである。96は1/8片で復元口径は12.0cmを測る。口縁部内面に僅かに段を有す。97・98は坏身である。97はほぼ完形。口径12.6cm、受け部径14.6cm、器高4.7cmを測る。口縁端部は焼けひずんで波打つ。外底部は2/3は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整である。ロクロ回転は逆時計回りである。98は1/10片で復元口径11.8cm、受け部径14.0cmを測る。外底部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整である。99は高坏脚部1/8片。復元脚端部径は12.2cmを測る。脚端部は内折し、外面に段を持つ。調整はヨコナデである。いずれも胎土は石英・長石粒子を少量含むが、99は黒色粒子も少量含む。

100～103は土師器。100・101は甕。100は2/3片で、口径は23.0cmを測る。胴部外面はハケ調整。口縁部外面はハケ後ナデ、内面はハケ調整。胴部外面はヘラケズリ調整である。外面には煤が付着する。101は甕底部1/3強片で、底部は平底気味である。外面は器表面が磨滅し調整は不明だが、内面には当て具痕が残る。102・103は甑。102は口縁部小片で、復元口径31.2cmを測る。口縁部は胴部からやや外折して開く形態で、口端部は平坦である。口縁部外面はハケ後ヨコナデ、内面はナデ調整。胴部外面はハケ、内面はヘラケズリ調整。胎土は石英・長石粒を多く含み、雲母も含む。103は両側に把手がつく胴底部片。破片から図上復元した。蒸気孔のある底部は復元径10cmを測る。器表面は荒れるが、調整は胴部外面がハケ、内面はヘラケズリ。把手部分は指オサエ調整である．胎土は石英・長石粗砂粒を多く含み、金雲母も含む。104は釣鐘形の土錘。上部を欠損する。断面は楕円形を呈し、直径は3.4×3.5cm、残存高5.8cmを測る。上下両側に直径0.6cmの紐通し用と思われる円孔がある。全面ケズリ後丁寧なナデ、胎土は精良、焼成は良好である。

95・97・100・101・103は竈前面出土である。

②　土坑（SK）

SK01（Fig.16、PL.8）　調査区中央、SC02を切る平面形が方形を呈す土坑である。長軸長1.25m、短軸長1.20m、深さ35cmを測る。断面は逆台形を呈すが、中央部はやや深くなる。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig.18・27、PL.10）　弥生土器、古墳時代土師器・須恵器、奈良時代の土師器、鉄滓が出土している。105は土師器の皿1/4片で、復元口径18.6cm、器高1.7cmを測る。全体に器表面の磨滅はひどいが、外底部はヘラケズリ、その他はナデである。胎土は精良で、焼成は良い。106・107は甕。106は甕か鉢の1/3片。復元口径は16.2cmを測る。口縁部内面はナデ、胴部外面は剥落がひどく調整は不明。内面はヘラケズリである。胎土は石英・長石粗砂を多く含み、焼成は不良。107は口縁から胴部1/2片。復元口径は29.3cmを測る。口縁部外面はハケ後ナデ、内面はナデ調整。胴部外面は粗いハケ、内面はやや磨滅するが、ヘラケズリ調整である。249は滑石製の紡錘車と思われる1/2弱片。中央に孔がある。直径は４cm位か。

SK02（Fig.17、PL.8）　SD02に切られる平面形が不整楕円形を呈する大型の土坑。規模は上面で長軸長3.32m、短軸長2.90mを測り、底面は北側に向かって階段状に深くなり、深さは最大で約90cmを測る。埋土は上部が黒褐色粘質土、下部が暗褐色粘質土で黄褐色地山ロームブロックを含む埋土が主体となるが、土層断面観察では、東側壁沿いに堆積の断絶する面が見られ、堆積状況の差が認められる。平面を見ると北側が一段落ち込んでおり、掘り直しなどがあった可能性がある。

出土遺物（Fig.18、PL.10）　弥生土器、古墳時代土師器・須恵器などが出土している。115は土製紡錘車である。平面円形、断面算盤形を呈する。直径4.9cm、器高2.5cmを測る。表面の磨滅はひどく、調整は不明。胎土は石英・長石を含む。

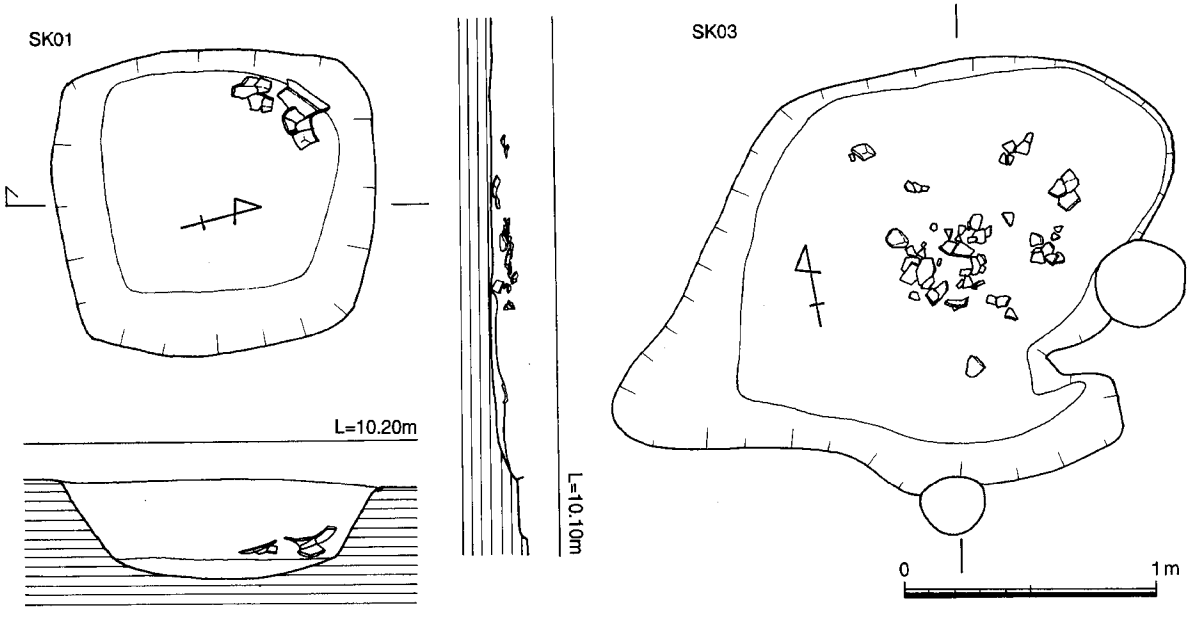


Fig.16　SK01・03（1/30）

SK03（Fig.16、PL.8）　調査区中央部、SK02の東側で検出した平面形態が不定形状の土坑。規模は長軸長2.47m、短軸長1.66m 、最大深さ12cmを測り、遺構の残りは悪い。底面はほぼ平坦で、中央部に土器片がまとまって検出された。７世紀前半の須恵器を含み、７世紀代の遺構である。

出土遺物（Fig.18）　弥生土器、古墳時代後期の土師器・須恵器などが出土している。108・109は須恵器。108はⅣｂ期の坏身。1/4片で、復元口径11.3cm、受け部径13.4cmを測る。調整はヨコナデで、外面は灰カブリする。109は高坏脚部1/6片。復元脚端径は14.8cmを測る。脚端部はケズリでその他はヨコナデ調整。いずれも胎土は精良。110は壷口縁部片か。1/4片で、復元口径は14.6cm位か。外面はハケ後ナデ、胴部内面はヘラケズリ、口縁部内面はナデ調整。111は甕の口縁部1/4片。復元口径は21.4cmを測る。口縁端部は短く外折し段が付く。器表面は磨滅がひどく調整は不明。

SK04（Fig.17、PL.8）　SC05内で検出した南北方向の溝状の土坑。規模は長軸長3.22m、短軸長0.70m、深さ32cmを測る。断面は船底形を呈し、埋土は暗褐色粘質土が主体となる。

出土遺物（Fig.18、PL.10）　弥生土器、土師器・須恵器、黒曜石片が出土している。112は土師器高坏脚部片。器表面の磨滅はひどく、調整は不明。焼成は不良。

SX01（Fig.18）　SE02の南側で検出した焼土・炭化物集中部分である。長軸長0.85m、幅0.35mの帯状の範囲で焼土ブロックが分布していた。弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器の高台付き埦などが出土している。

113・114は土師器。113は高台付き埦3/4片。復元口径11.9cm、底径7.0cm、器高4.5cmを測る。ナデ調整。底部に粘土巻き上げ痕が残る。胎土は精良、焼成はやや不良。114は皿1/6片で、復元口径16.6cm、器高2.0cmを測る。器表面は磨滅がひどく、調整は不明。116は管状の土錘。先端を欠損し、残存長は4.4cm、最大径1.8cm、孔径0.4cmを測る。磨滅がひどいが、ケズリ後ナデ調整か。

③　**井戸**（SE）

SE01（Fig.19、PL.8）　調査区南東隅で検出した素掘りの井戸。平面形はほぼ円形を呈し、規模は上面で長軸長2.16m、短軸長1.96mを測る。井戸は二段掘りで、深さ90cm迄傾斜は緩やかで、その下は傾斜が直に近くなる。全体の深さは1.90mを測り、八女粘土下まで掘り込んでいる。埋土は上部が褐灰色粘質土から黒褐色粘質土で黄色の地山ローム粘土を含み、下の方は黒色粘質土が主体となり、底

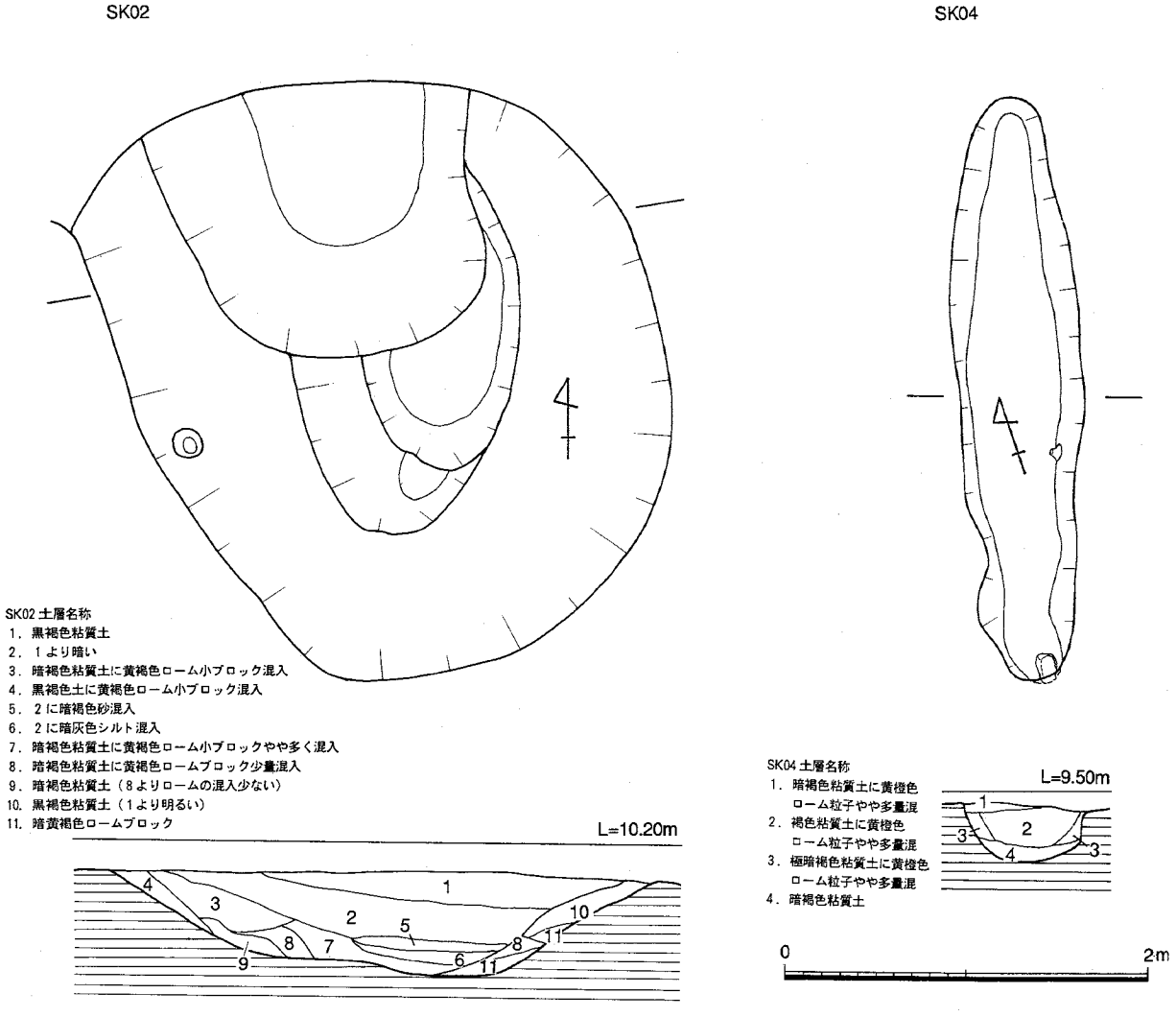


Fig.17　SK02・04（1/4）

に近づくにつれグライ化し、青灰色粘質土と白色の八女粘土の混合土となる。

出土遺物（Fig.20・35、PL.10）　弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の土師器、鉄製品などが出土している。117・118は高台付き埦底部片。117は2/3片で高台径9.0cmを測る。高台は外に開く形態。調整はナデ。上層出土。118は高台径7.2cmを測る。高台が117より直立する。調整はナデであるが、高台外面には雑な引っかき線が幾筋も入る。高台内面には墨書の痕跡があるが、内容は不明。最下層出土。119～124は坏。119は1/3片、120は1/5片、121は1/4片、122は1/6片、123は1/3片、124は4/5片で、復元口径・器高は119が 14.8cm・4.5cm、120が12.6cm・3.7cm、121が13.1cm・3.8cm、122が13.2cm・3.4cm、123が12.8cm・3.9cm、124が13.5cm・3.7cmを測る。119は器表面が磨滅するがナデで、外底部はヘラケズリ後ナデ調整か。色調は二次的加熱を受けピンク色を呈す。120は器表面の磨滅はひどく調整は不明。口縁部内面に煤が付く。121は外底部がヘラナデ、その他はヨコナデ調整。口縁部外面が一部焼ける。122は外底部が回転ヘラケズリ後ナデ調整。その他はやや磨滅するがナデ調整か。123は外底部が回転ヘラケズリ後ナデで、その他はヨコナデ調整。124は器表面は磨滅し、調整は不明であるが、外底部巻き上げ痕が残る。二次的加熱で白っぽくなっている。胎土は余り砂粒を含ま

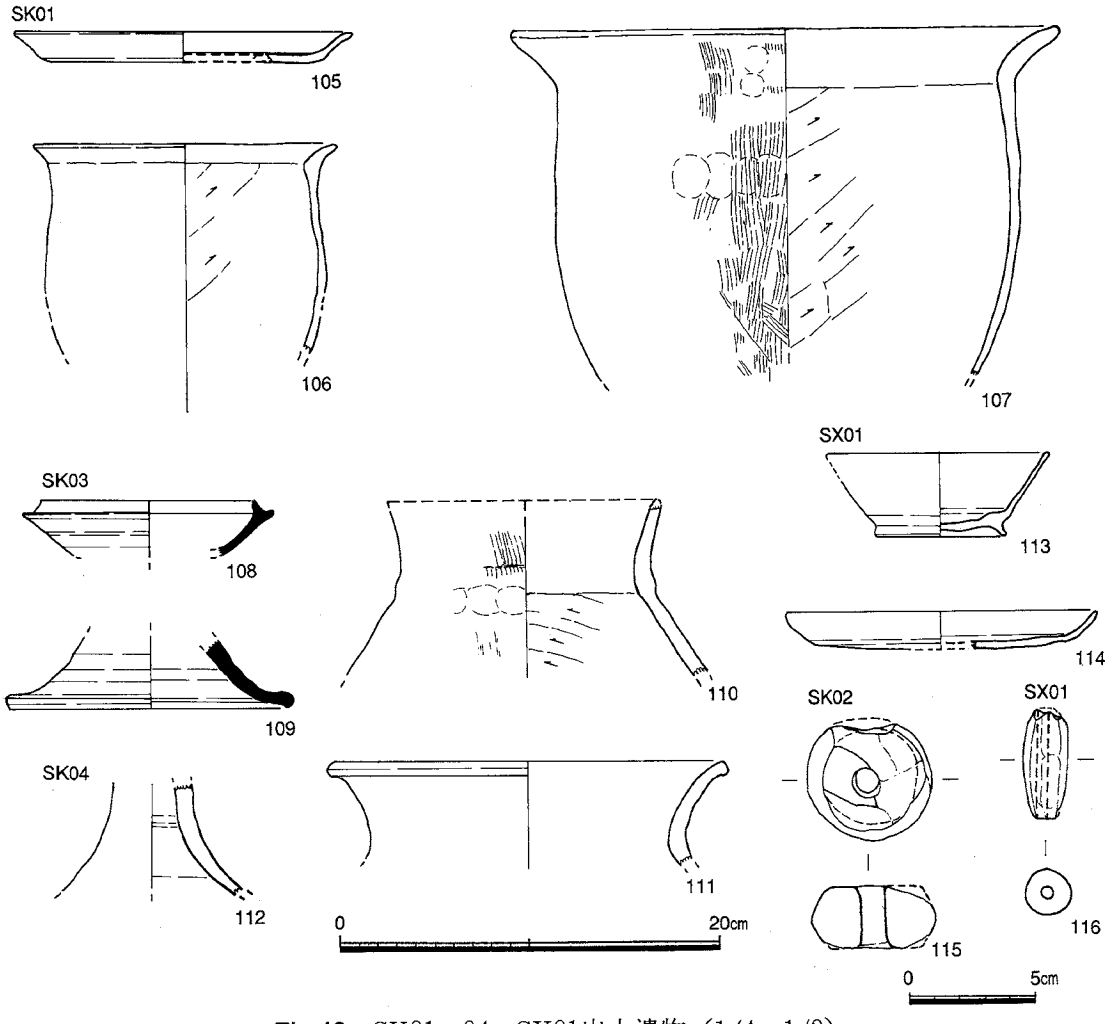


Fig.18　SK01～04・SX01出土遺物（1/4・1/3）

ず精良であるが、122・123は赤色粒子を含む。119は上層、120は中層、121は下層、122～124は最下層。125は皿1/3片。復元口径は15.8cm、器高は1.9cmを測る。全体に磨滅がひどいが、丁寧なヘラケズリかナデ調整。胎土は精良。上層出土。126～131は甕。126は口縁部細片。外面はタテハケ、内面はヘラケズリ。127は2/3片で、 復元口径は20.8cmを測る。口縁部は胴部に比して厚くなる。胴部外面は粗いハケ、内面はヘラケズリ調整。口縁部内面は粗いヨコハケ調整。127は上層。128は1/4片で鉢の可能性もある。復元口径は19.2cmを測る。胴部内面はヘラケズリ、その他はナデ調整。中層出土。129は1/5片で復元口径は25.4cmを測る。胴部外面は粗いタテハケ。内面はヘラケズリ調整である。外面部分的に黒斑がある。130は1/4片で、復元口径は27.6cmを測る。胴部外面は粗いタテハケ、内面は口縁部がヨコハケ、胴部がヘラケズリ調整である。129は上層出土、130は中層出土。131は移動式竈の底部1/6片。復元底径は27cmを測る。外面は粗いタテハケ後ナデ、 内面はヘラケズリ後ナデ調整である。胎土は石英・長石粒子・赤色粒子を含む。色調は浅黄橙色を呈す。上層出土。376・377は鉄製品。376は上層出土の大型の角釘か。残存長7.1cmを測る。頭部が残る。377は中層出土の不明鉄片。縦3.2cm、横3.6cm、厚さ0.7cmを測る。

SE02（Fig.19、PL.8）　調査区中央東側、 一部が境界にかかる素掘りの井戸。平面形はほぼ円形を呈し、規模は上面で南北長2.78m、東西長2.70m以上を測る。井戸は二段掘りで、深さ90cm位の所で直径1.7mの円形にすぼまり、 その下から壁は直に近くなる。全体の深さは2.1mで八女粘土の下まで掘

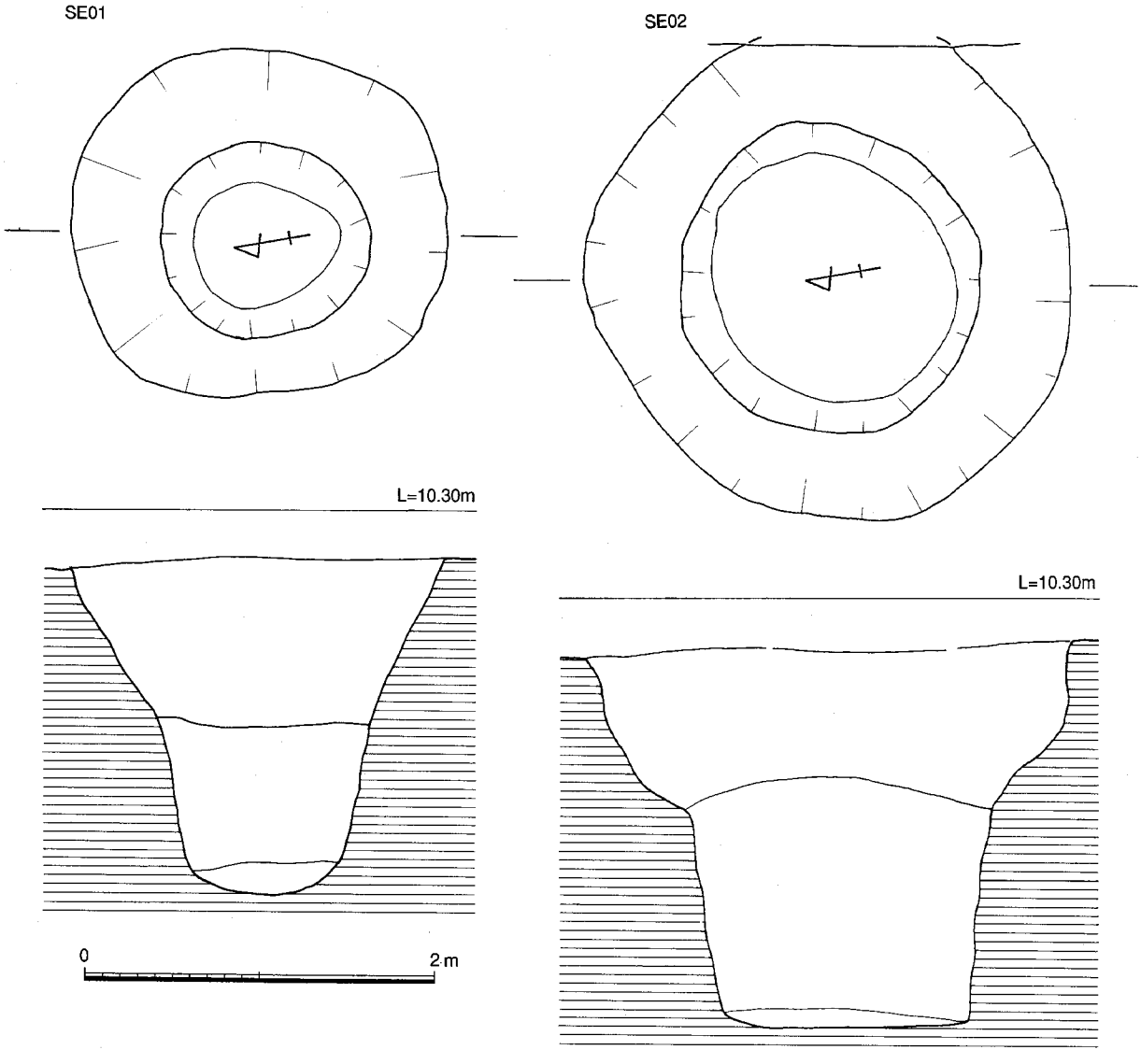


Fig.19　SE01・02（1/40）

り込んでいる。埋土は深さ90cmほどまでの上部は暗赤褐色粘質土に八女粘土の白色粘土を混入する土が主体、下層は黄白色の八女粘土や黒色粘土の混合、底は灰白色や黄白色のローム粘土が主体となる。底に堆積する粘土は壁が崩落したものであろう。

出土遺物（Fig.20、PL.10）　弥生土器や古代の土師器・須恵器が出土している。132は須恵器の壷の底部1/4片。復元底径9.0cmを測る。底部はケズリ後ナデ、胴部はヨコナデ。133は土師器の坏か皿の底部片。復元底径7.3cmを測る。器表面は磨滅するが、ナデ調整か。焼成はやや不良。134・135は土師器の甕口縁部片。134は1/8片で、復元口径17.8cmを測る。器表面の磨滅はひどく、調整は不明。外面指オサエ痕がかすかに残る。二次的加熱を受けたのか表面ピンク色を呈す。135は1/6片で、復元口径は28.6cmを測る。外面は口縁部まで粗いタテハケ、口縁内面はヨコハケ、胴部はヘラケズリ調整。口縁外面に黒斑がある。136は弥生時代終末期の壷の底部1/4片。復元底径は8.4cmを測る。外面平行叩き後ナデ調整、内面は磨滅がひどく、表面は部分的に剥落する。胎土に石英・長石粒子以外金雲母を含む。137は古墳時代前期土師器の高坏脚部。外面ヘラケズリ後ナデ、内面はケズリ調整。胎土は精良。138は弥生土器の高坏脚部片。器表面は磨滅するが、外面粗いハケで工具痕が残る。139は移動式竈の

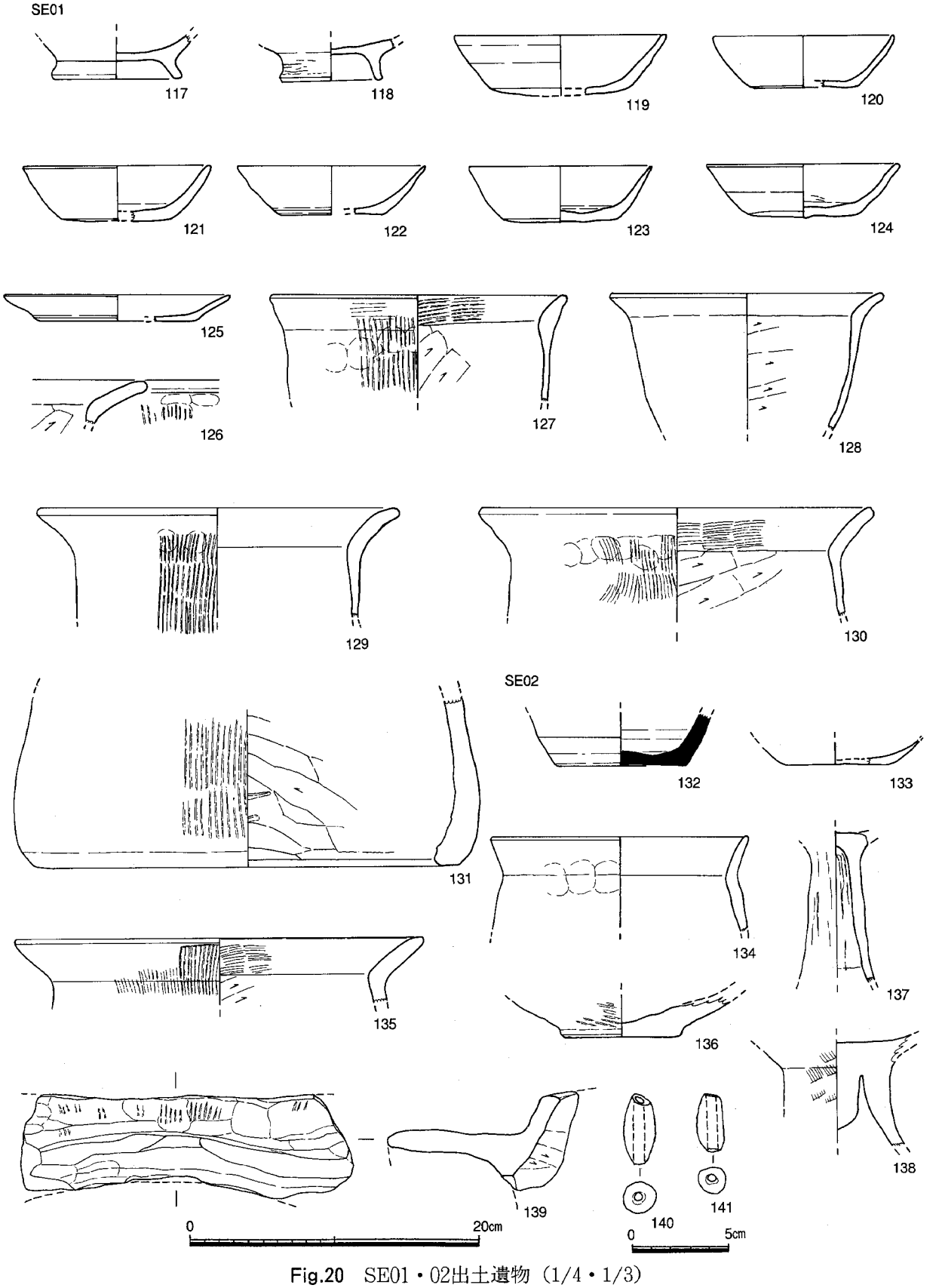


Fig.20　SE01・02出土遺物（1/4・1/3）

庇部分。竈内面はヘラケズリ調整で、庇部分はナデと指オサエ、口縁部分は粗いハケ後ナデ調整。140・141は管状の土錘。いずれも断面は円形を呈し、法量はそれぞれ長さ3.8cm以上・3.1cm、直径は

1.7㎝・1.4㎝、孔径は0.5㎝である。重量は８ｇ・５ｇを測る。

137が下層出土の他はいずれも上層から中層にかけて出土。

④　溝状遺構（SD）

９条の溝を検出した。SD01・02以外は中世以降の小溝である。

SD01（Fig.21・22、PL.3・6・7）　調査区西側を南北方向、真北よりN－11°－Wに取って延びる溝。この溝は古代早良郡に施行された条里制地割に合う溝であり、当地点南側で確認されている大型建物群を規制するものである。溝幅は1.3～1.7mで、深さは30～40㎝ほどで、断面形は逆台形を呈す。溝の埋土は橙色ロームを含む極暗赤褐色から赤黒色粘質土である。この溝上層で廃棄された須恵器片が集中して検出されている。ある程度溝が埋没した段階で廃棄されたものと考えられる。

出土遺物（Fig.23～25・27・35、PL.10・11）　弥生土器から古墳時代・古代の土師器・須恵器、羽口、玉などが出土している。６世紀代の須恵器を多く含むが、SC01の遺物が混入しているのであろう。

142～160・251は廃棄須恵器群出土中のもの。142～158は須恵器。142・143は皿。142は1/4片で、復元口径は18.2㎝、器高2.1㎝を測る。外底部に縦・横格子目状に櫛描きする。二次的加熱をうけ、赤変する。143は口縁部細片。胎土は精良。144は高台付き埦。８世紀のもの。底部1/2片で、高台径7.6㎝を測る。145は高台付き坏か壷の底部1/2片。復元高台径は9.0㎝を測る。調整は回転ナデ調整で、内外面底部まで部分的に自然釉がかかる。144・145の胎土は精良。146は扁平な釦状のつまみがつく蓋1/6片。天井部回転ヘラケズリ後回転ナデ。内面はナデ調整。147～149は坏蓋細片。Ⅳa期のものか。149は天井部は回転ヘラケズリで粘土塊が付着する。その他は回転ナデ、内面は不整ナデ調整。150は坏身細片。調整は回転ナデ調整。いずれも胎土は精良。151～158は甕。151～154は口縁部片。残存率はそれぞれ1/8・1/6・1/4・細片で、復元口径もそれぞれ19.8㎝・27.1㎝・18.4㎝を測る。155は大型の

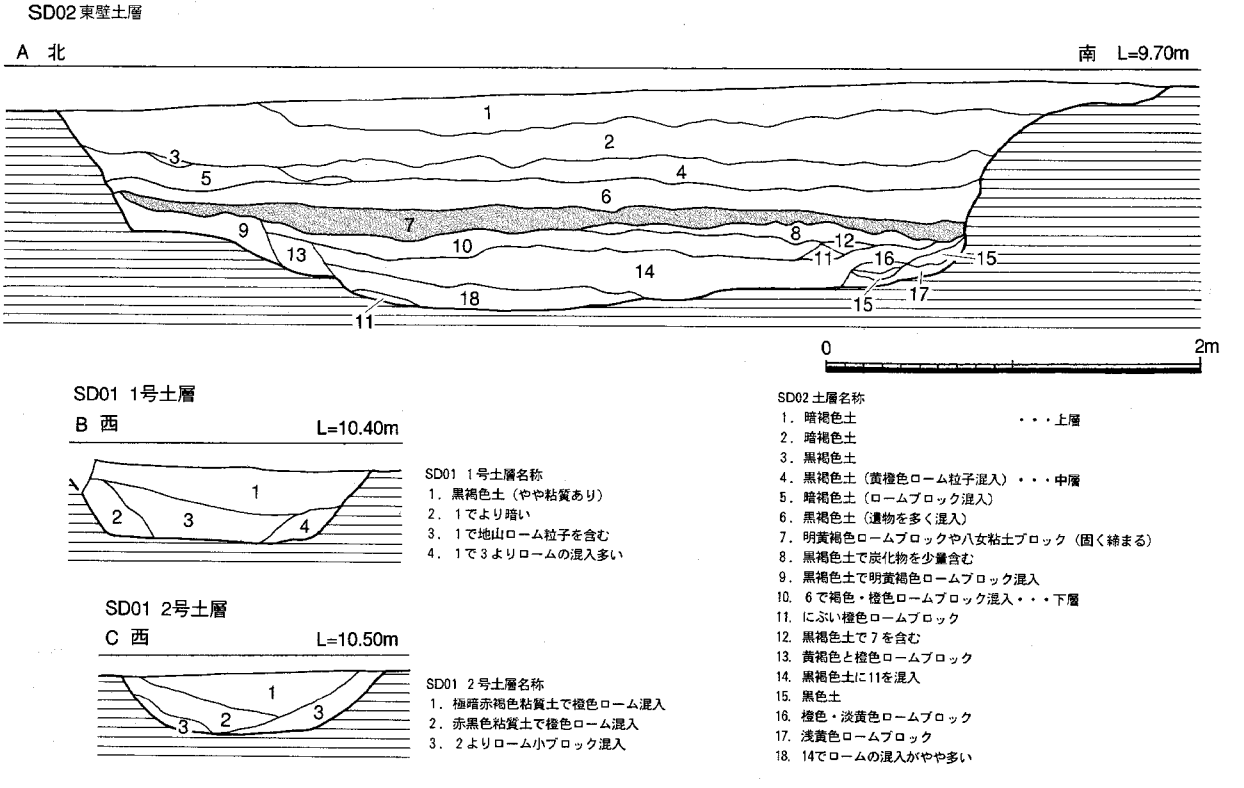


Fig.21　SD01・02土層（1/40）

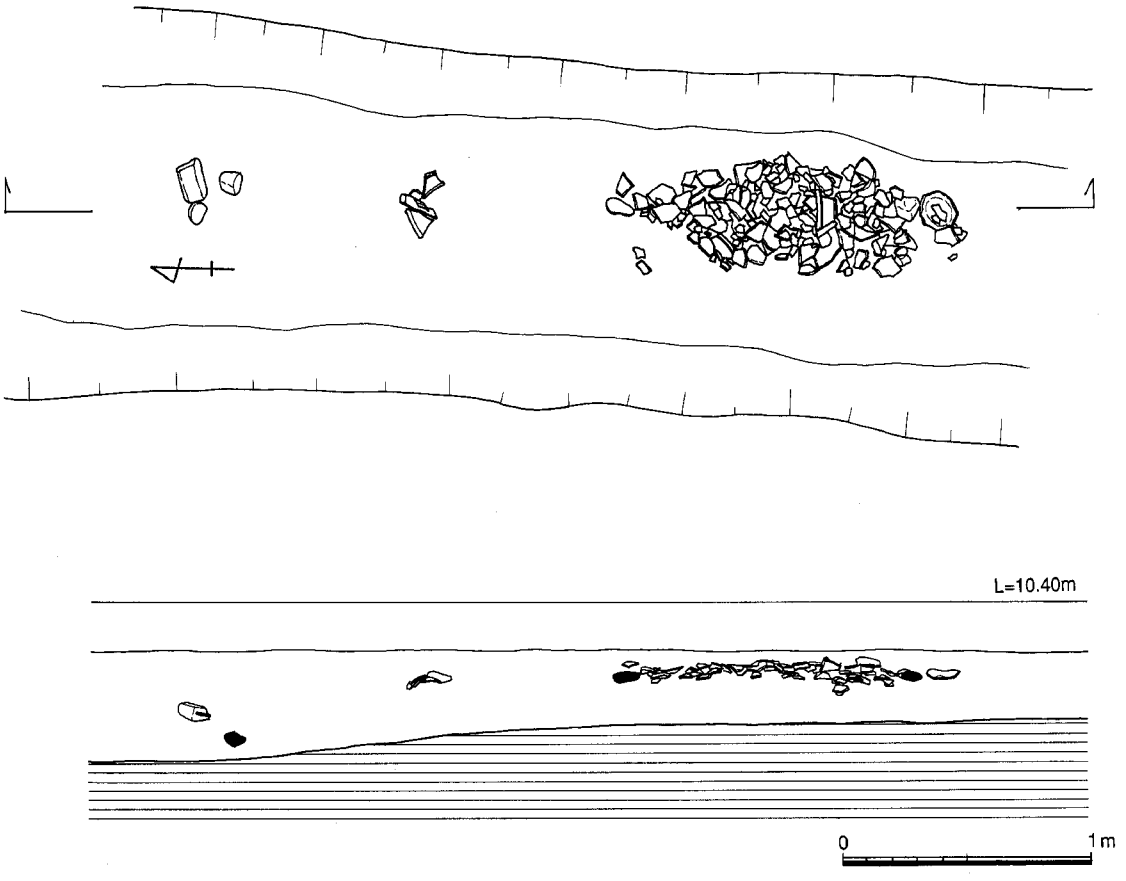


Fig.22　SD01須恵器群出土状況（1/30）

甕の口縁から胴部片で口径24cmを測る。胴部外面は木目直交の平行叩き後回転ナデ調整。内面にも平行叩き後回転ナデ。口縁部は回転ナデで自然釉がかかり、内外面にヘラ記号が付く。156・157は口縁から肩部片。156は3/5片で、復元口径は24.2cmを測る。口縁部内外面は回転ナデ調整、胴部外面は木目直交の平行叩き、内面は同心円状の当て具痕が残る。157は1/3片で復元口径は22.0cmを測る。胴部外面は平行叩き、内面は当て具痕をナデ消す。158は大型の甕1/2片。口縁部はひずみがあるが、復元口径は19.6cm、復元器高41.3cm、復元胴径35.8cmを測る。短い口縁部がすぼまった頸部から外へ開く形態である。胴部外面は部分的に表面がはじけるが、斜めの平行叩きを加える。胴部内面は同心円状の当て具痕が残り、上半肩部には平行叩き痕が残る。口縁部は回転ナデであるが、内面は熱により表面がはじけている。器表面は内外面灰カブリで黒色を呈す。胎土は精良。159は大型の高坏か器台の脚部1/4片。長方形のヘラ切りされた透かし窓が４箇所入る。外面はカキ目が入る。内面は回転ナデ調整。160は高台を持つ底部片。須恵器を真似た土師器で、鉢か壷の底部。磨滅がひどく調整は不明だが、高台部はケズリ出し。161は土師器の把手、調整は指オサエ仕上げ。全体に胎土は精良である。251は砥石片である。残存長15.6cm、幅10.1cm、厚み4.5cmを測る。砥面は上面と左側面で、上面には叩きの使用痕が残る。灰黄色を呈する目の粗い砂岩で、荒砥石である。

162～189は須恵器。162～164は坏。162は3/4片で、口径12.5cm、底径8.2cm、器高3.6cmを測る。外底部はケズリ後ナデ、その他は回転ナデ調整。口縁部外面は黒変する。焼成はやや不良。163は底部1/3片。復元底径は8.8cmを測る。外底部はケズリ後ナデ調整。164は底部1/3片。復元底径7.3cmを測る。外底部はケズリ、その他は回転ナデ。165・166は高台付き坏。165はほぼ完形。体部は直立気味である。口径12cm、高台径8.2cm、器高5.3cmを測る。外底部は丁寧なケズリ、その他は回転ナデで、内底部

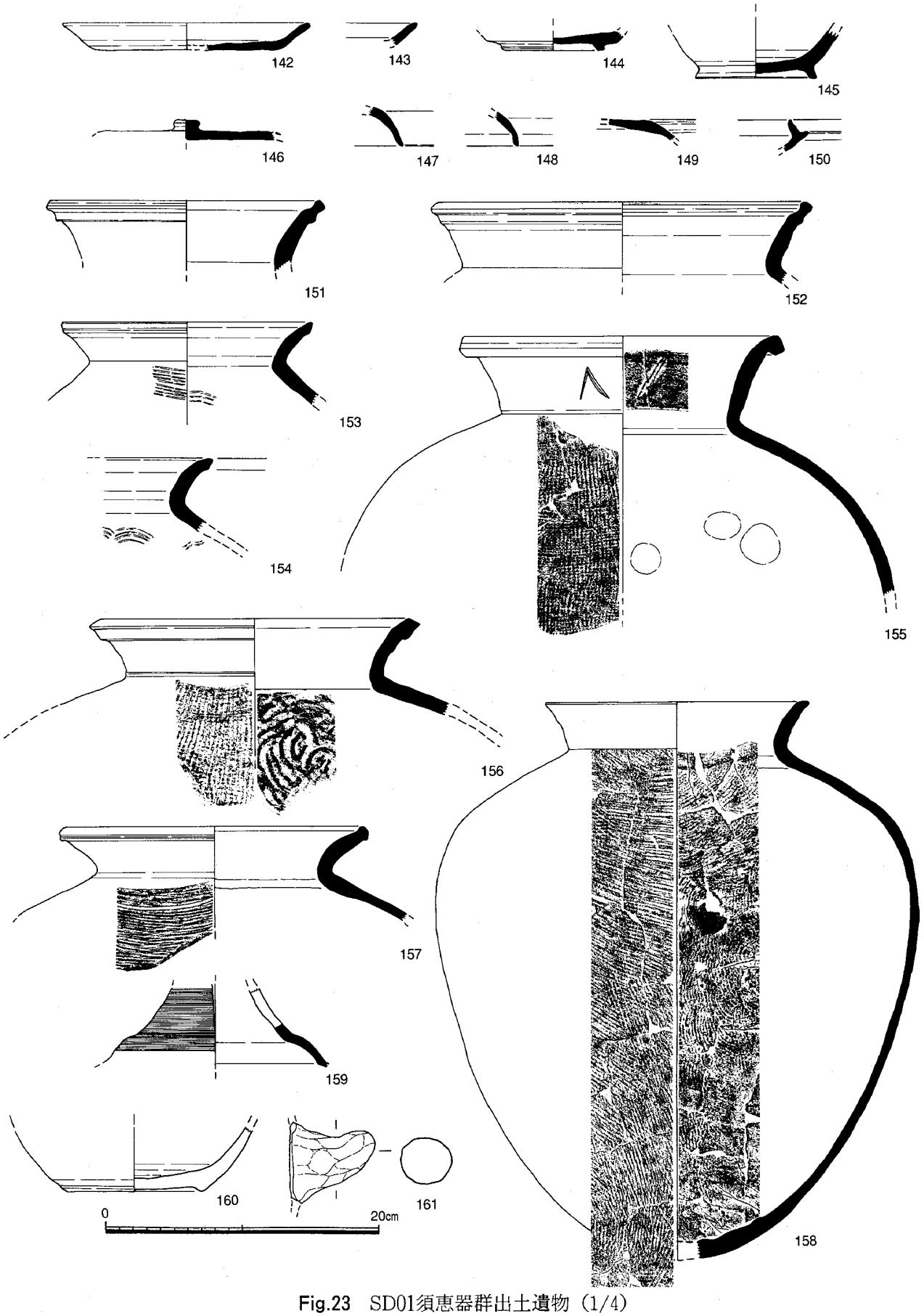


Fig.23　SD01須恵器群出土遺物（1/4）

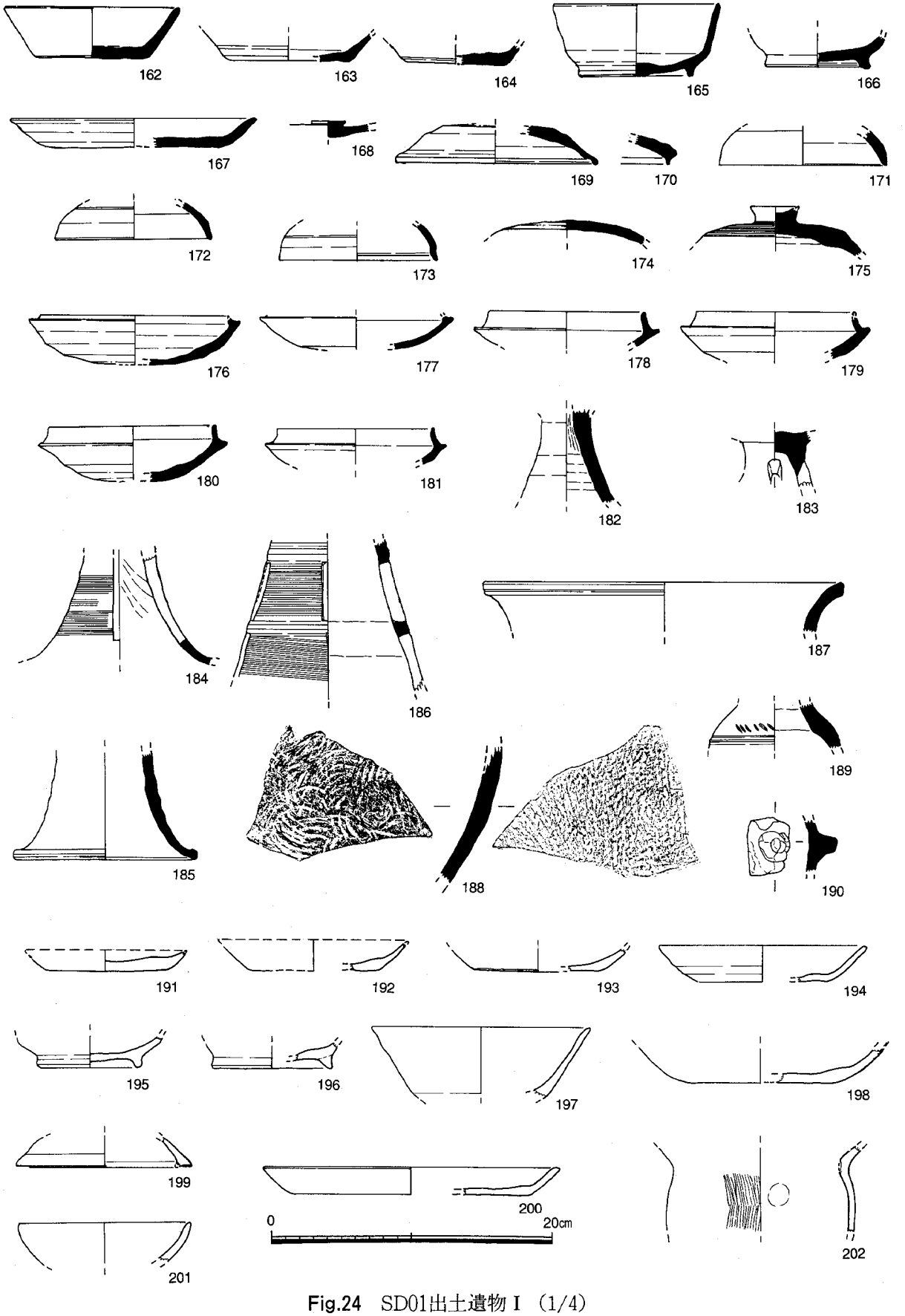


Fig.24　SD01出土遺物Ⅰ（1/4）

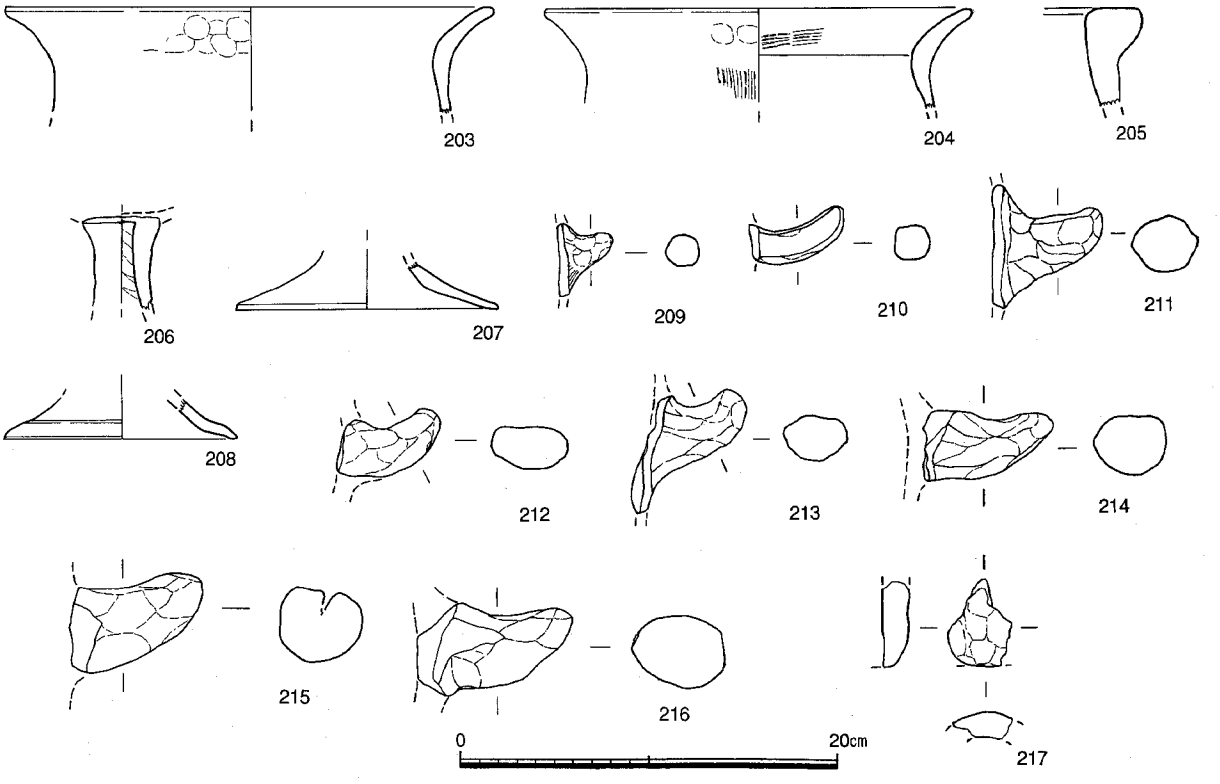


Fig.25　SD01出土遺物Ⅱ（1/4）

は不整方向ナデ調整。166は1/3片で復元高台径は7.5cmを測る。167はⅢ1/3片。復元口径17.6cm、復元底径11.8cm、器高2.1cmを測る。168は蓋のつまみ部分。169～175は坏蓋である。169は1/4片で、復元口径は14.4cmを測る。口縁部は短く内折し、端部を丸くおさめる。天井部は回転ケズリでつまみが付くと思われる。170は口縁部細片。口縁部内面に返りがつく形態。胎土には石英・長石の粗砂粒を多く含む。171～175は天井部が丸みを持つ形態。171はⅣa期のもので1/6片。復元口径13.0cmを測る。調整は回転ナデ調整で、外面に自然釉がかかる。172はⅢｂ期のもの。口縁部は1/6片で復元口径11.2cmを測る。口縁部と天井部の境に沈線状の段がつく。内外面回転ナデ。173はⅢb期のもの。1/6片で復元口径11.4cmを測る。天井部と口縁部の境に軽い稜が付き、口縁端部内面にも段が付く。174は天井部1/4片。回転ケズリでロクロ回転は時計回りである。175はつまみが付く有蓋高坏の蓋であろう。1/4片で、天井部はカキ目、内面にはナデ調整で工具痕が残る。176～181はⅢb期～Ⅳa期の坏身。176は1/4片で、復元口径13.2cm、器高は3.5cm、受け部径は15.2cmを測る。外底部2/3は回転ケズリ後回転ナデ、内面と底部1/3迄は回転ナデ調整。177は底部1/4片。外底部はケズリで、赤味を帯びる。その他は回転ナデ調整。178～181は口縁部の立ち上がりが直に近くなる。178は1/4片で、復元口径は11.2cm、受け部径は13.2cmを測る。調整はヨコナデ。179は1/6片で復元受け部径は13.5cmを測る。180は1/6片で、復元口径12.0cm、復元受け部径13.4cmを測る。外底部1/2が回転ケズリ、その他はヨコナデ調整。回転ケズリ部分は仕上げが粗い。181は1/8片で、復元口径11.2cm、復元受け部径13cmを測る。調整はヨコナデ調整。いずれも胎土は精良である。182～185は高坏脚片。182は1/3片。内外面回転ナデ。内面上部にはしぼり痕が残る。183は筒部で透かし窓が入る。部分的に自然釉がかかる。184は大きく外に開く形態で、外面回転ナデで、カキ目状の沈線が入る。内面にはしぼり痕が残り、所々空気が入り膨れる。長方形の透かし窓が入る。185は1/4片で、復元脚端径13.6cmを測る。内外面回転ナデ調整。186は

器台脚部1/4片。外面カキ目で、２条の沈線で区画された中に２段の長方形透かし窓が入る。外面には自然釉がかかる。187は甕口縁部1/8片。復元口径は25.8cmを測る。内外面は回転ナデ調整。外面には自然釉がかかる。188は胴部下半片。外面格子目状の叩き、内面同心円状の当て具痕が残る。189は甕肩部1/4片。内外面回転ナデで、外面の肩部と体部の境には２条の沈線が入り、沈線の上には工具による刻み目がつく。190は装飾化した釦状の把手である。外面調整はケズリ後ナデで、 内面には叩き痕が残る。外面には灰カブリする。

162～164・169・176・177・185・187・190は上層出土、167は中層、175・178～180・186・189は下層出土である。

191～216は土師器。191～194は坏。191は皿か坏で口縁端部を欠損する。復元口径は11.6cm、復元底径は9.0cm、器高は約1.5cmを測る。外底部は時計回りの回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整で、内底部には指オサエ痕が残る。192は1/8片で、復元口径は13.4cm、復元底径は9.4cm、復元器高は2.2cmを測る。器表面は磨滅するが、調整は回転ナデである。193は底部1/3片で復元底径９cmを測る。器表面はやや磨滅するが、外底部はケズリ、その他はナデ調整。194は皿の可能性もある1/5片で、復元口径は14.8cm、復元底径9.0cm、器高2.6cmを測る。195～197は須恵器を模倣した高台付き坏。195・196は底部片で、195は高台径7.4cm、196は1/4片で復元高台径8.6cmを測る。いずれも器表面の磨滅がひどく、調整は不明。197は1/6片で、復元口径は15.6cmを測る。器表面の磨滅がひどいが、回転ナデ調整か。198は盤か。1/3片、復元口径は17cm以上である。器表面は磨滅がひどいが、外底部はケズリ調整、内面はナデ調整か。199はＶ期の須恵器模倣の坏蓋1/4片。復元口径は12.6cmを測る。天井部にはつまみが付くと思われる。200は須恵器模倣の皿1/7片。復元口径は21.3cm、復元底径17.0cm、器高は2.0cmを測る。ナデ調整である。201は椀1/7片で、復元口径12.2cmを測る。器表面は磨滅するが、ナデ調整か。202は小型の甕胴部1/6片。胴部外面は粗いタテハケ調整、内面はナデ調整で指オサエ痕が残る。胎土に石英・長石粒を含む。203・204は甕口縁部片。203・204は1/6片で、復元口径は26.0cm・22.8cmを測る。203は磨滅がひどいが、口縁部外面に指オサエ痕が残る。204は外面ナデで胴部にナデでタテハケ、口縁部内面はナデでヨコハケ調整。204の胎土は石英・長石粒を多く含む。205は中世の鍋口縁部細片か。口縁部は厚く「コ」字状を呈し、 調整はナデ。206～208は高坏。206は脚部片で、 器表面は磨滅し調整は不明だが、内面しぼり痕がある。胎土は精良で、焼成はやや不良。207は脚裾部1/5片。脚端径14.0cmを測る。調整はナデで筒部内面はヘラケズリ。208は1/6片で、 復元脚端径12.4cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。焼成はやや不良。209～216は牛角状の把手。209は小型の把手。外面は指オサエ仕上。断面は不整円形。210は断面形が方形を呈すもので、 磨滅がひどいが調整はナデか。長さ4.7cm、断面径1.8cmを測る。211は磨滅はひどいが、調整は指オサエ後ナデか。胎土に石英・長石粗粒を多く含む。212は差し込式の把手で先端が一部欠損する。断面が扁平な形態で、 調整はケズリ後ナデか。213は斜め上方に突き出す形態で、指オサエ後ナデ調整か。胎土に石英・長石の粗砂粒を多く含む。214はほぼ直線に突き出す把手。215は上面にヘラによる切込みがある。表面は磨滅がひどく調整は明瞭でないが、指オサエ痕が残る。胎土に石英・長石粒を多く含む。216は差し込式の把手で、断面が楕円形を呈す。指オサエ仕上げであるが、表面の欠損はひどい。胎土は精良。

217は通風孔が残る羽口小片。長径4.7cm、短辺3.5cm、厚み1.4cmを測る。高温により先端にはガラス質が付着し灰色化する。孔面は黒灰色となる。250は扁平な円形の磨石か。直径9.1cm、厚さ3.4cmを測る。上下両面が擦られている。灰白色の玄武岩製である。378は丸く曲がった不明鉄製品。長さ3.7cm、幅3.5cmを測る。断面は長方形を呈す。394はガラス小玉。1/2片で直径7.5mm、厚み８mm、孔径1.5mmを測る。色調はコバルトブルーを呈す。

191・192～195・202・203・206・212・215は上層出土。200・207・210・216・378は中層出土。197・213は下層出土である。

SD02（Fig.21、PL.7）　調査区中央部で検出した東西方向の大溝で、西側の第169次調査区、東側の第３次調査区、第81次調査区の大溝に連続するものである。この溝は古代早良郡の条里方向に合うもので、本調査区のSD01ともほぼ直交する。溝幅は６ｍ、深さは1.2ｍを測る。溝断面は逆台形を呈すが、北側は一部テラスを持つ。埋土の堆積状態はほぼ水平である。上層部は暗褐色土で、その下（中層）に遺物や炭化物を含む黒色から黒褐色土となる。この層の下部には砂を薄く広く、面的に挟む。中間層上部に八女粘土ブロックの硬く締まった層があり、この下の下層は黒褐色土から黒色土と黄褐色ロームブロック・橙色ロームブロックを主体とする層になる。

出土遺物（Fig.26・27・35、PL.11）　遺物は上層が少なく、中層のものが多い。弥生土器から古墳時代・古代の土師器・須恵器を含む。

218～225は須恵器。218・219はⅢｂ期の坏身。218は1/4片で復元口径は11.8㎝、受け部径14.2㎝、器高4.0㎝を測る。外底部回転ヘラケズリ、体部内外面は回転ナデ、内底部は不整ナデ調整。外底部にはヘラ記号が入る。219は1/4片で、復元口径10.2㎝、復元受け部径12.4㎝、器高3.6㎝を測る。外底部は回転ヘラケズリ調整。体部内外面は回転ナデ、内底部は不整ナデ調整。いずれも胎土は精良。220は有蓋高坏の坏部1/3片。復元口径は15.0㎝、復元受け部径は16.8㎝を測る。底部は回転ヘラケズリでその他は回転ナデ調整。221は甕1/3片。復元口径は16.8㎝を測る。口縁端部外面には沈線が巡る。口縁部外面は櫛描きの波状文を施す。また全面に灰カブリし、色調はオリーブ黒色を呈する。胎土は精良。222は甕頸部胴部1/4片。外面タテの木目直交の平行叩き後回転ナデ、内面は火ぶくれするが同心円状の当て具痕が残る。外面には自然釉がかかる。223～225は高坏脚部片。223は脚部片。外面カキ目、内面は回転ナデ調整で、内外面には自然釉がかかる。224は1/2片で、復元脚端径は11.2㎝を測る。内外面回転ナデで、胎土は精良、色調は灰白色で焼成は不良。225は脚部1/4片で、復元口径は14.8㎝を測る。調整は回転ナデで、外面沈線が１条巡り、その上面に三角形の透かし窓が３ヶ所ある。

226は土師器の高坏脚部片。器表面は磨滅がひどく調整は不明だが、内外面しぼり痕が残る。胎土は精良だが、焼成は不良。227は底部が丸みを持つ盤の底部。全体に磨滅するが、外底部はケズリ、その他はナデ調整である。228は甕か鉢の底部1/5片。体部は逆時計回りの回転ヘラケズリで、内面はナデ。胎土は石英・長石粒を多く含む。229は中型甕の口縁部1/5片。復元口径は30.2㎝を測る。ロクロ成形によるもので、外面肩部にはカキ目、その他は回転ナデ調整である。色調は浅黄橙色を呈す。230は差込式の牛角把手。太めで、断面は長方形を呈す。調整は指オサエ仕上げで、上面から深さ1.7㎝の切り込みが入る。胎土に石英・長石粒を多く含む。231は器台か高坏の2/3片。復元口径は13.1㎝を測る。口縁部内外面はナデ、坏部から脚部外面はカキ目状の沈線を施す。内面はヘラ調整である。

252は石鹸形を呈す叩き石である。上下面と上下小口面に使用痕がある。全長7.4㎝、最大幅6.0㎝、最大厚4.4㎝を測る。灰白色を呈す玄武岩である。253は石鎌の先端片。全長7.7㎝、幅4.7㎝、厚み0.6㎝を測る。表面はケンマ仕上げで、刃部も研ぎ出している。粘板岩製である。379はSD02中層出土で尖り根の鏃片か。残存長6.2㎝。最大幅1.0㎝を測る。395は滑石製臼玉。直径6㎜、厚さ3㎜、孔径2.5㎝を測る。

219～223・225・226・229・230・379は中層出土、252は上層出土である。

SD03　(Fig.3) 北西境界地の包含層上面で検出したSC08とSD08を切る小溝。SD02とほぼ並行する。

出土遺物（Fig.26・27）　中世の土師質土器、須恵器、中国産白磁が出土している。232は白磁碗口縁部1/8片で、復元口径18.0㎝を測る。体部内外面薄い乳白色の釉がかかる。釉の表面にはピンホール

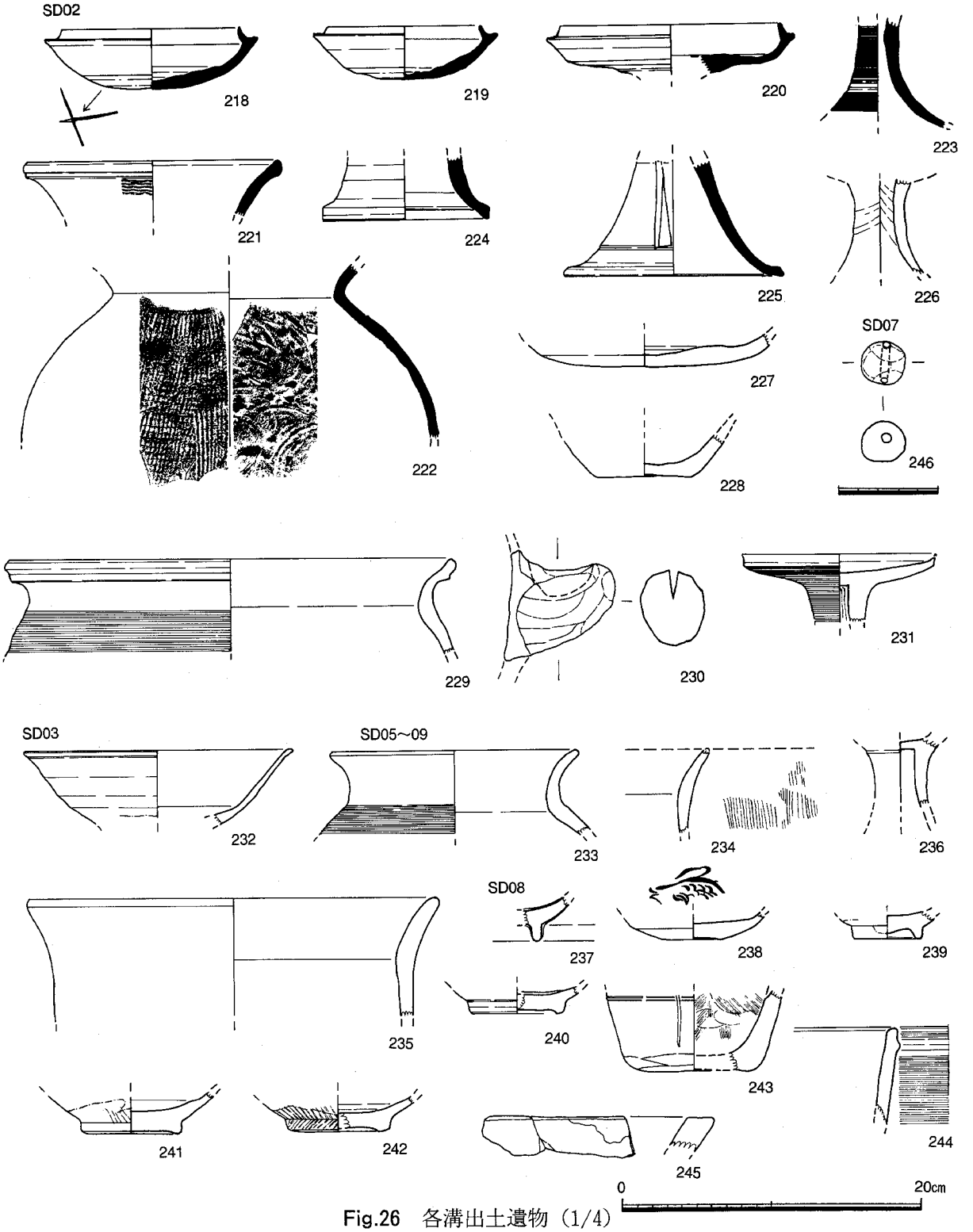


Fig.26　各溝出土遺物（1/4）

が入る。254は滑石製石鍋底部片。内外面ノミ状工具によるケズリ痕が残る。部分的に煤が付着する。

SD04（Fig.3）　SC02の南側で検出した東西方向の小溝。確認規模は４m、幅0.45～0.7m、深さ10cmを測る。埋土は赤褐色粘質土である。

出土遺物（Fig.35）　380・381は釘又は鏃片と思われる。残存長は3.4cmと3.1cmを測る。断面は長方形を呈す。同一個体と思われる。

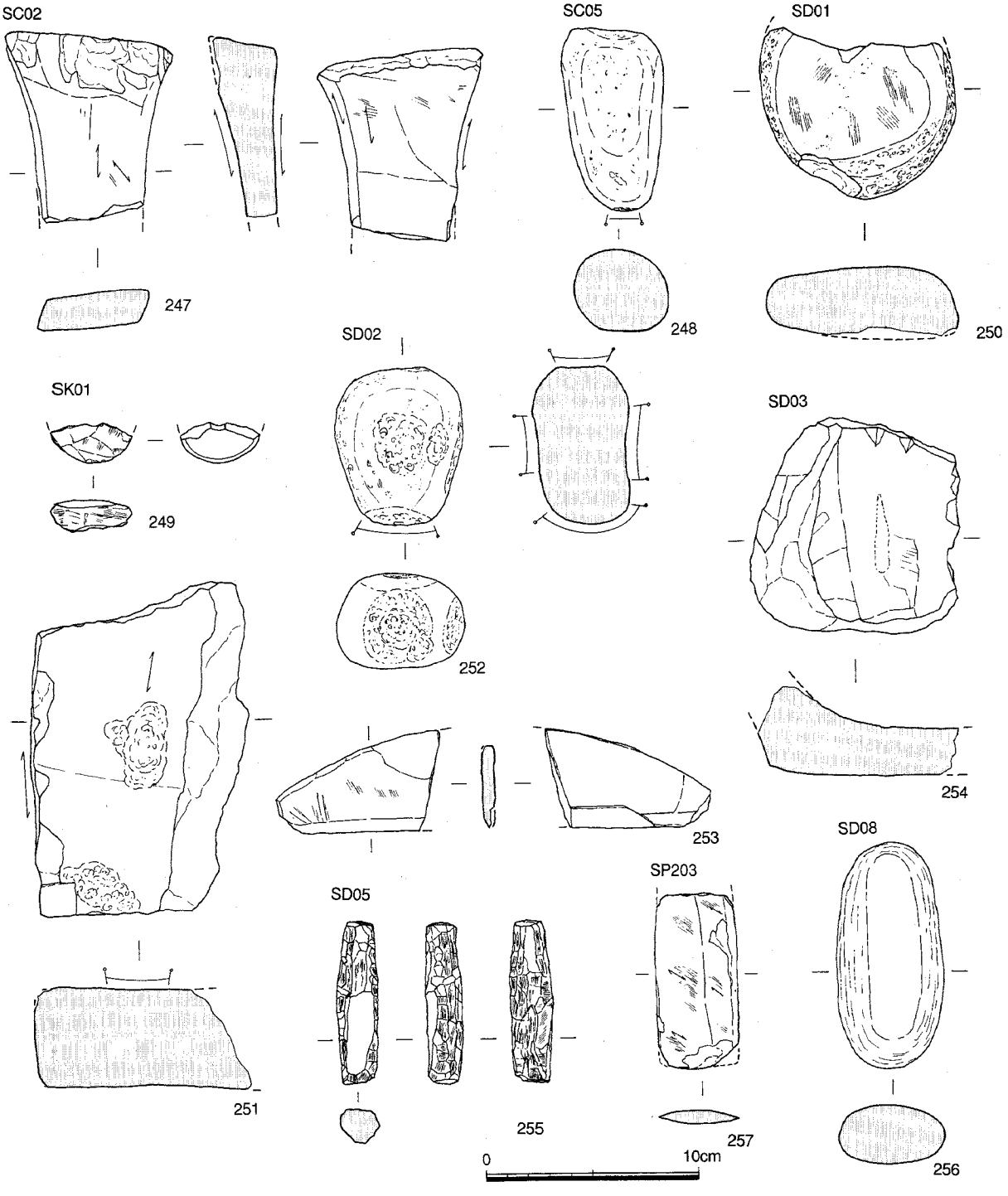


Fig.27　各遺構出土石器（1/3）

SD05～07・09（Fig.3）　調査区中央、SC01・02を切る東西方向の溝。全体に浅いがSD02に並行しながら蛇行して流れる。溝幅は0.7～1.0m、深さは10～15cmを測る。第154次調査区の南北溝と直交する可能性がある。埋土は暗赤褐色粘質土で、底には橙色ロームブロックを含む。

出土遺物（Fig.26・27、PL.11）　SD05から09まで合わせて報告する。各溝から弥生土器、土師器・須恵器、 鉄滓などが出土している。233～236は土師器。233は壷または甕の口縁部細片。復元口径は16.8cmを測る。肩部にはカキ目、口縁内外面はヨコナデ調整である。234・235は甕か甑の口縁部細片。外面はハケ調整。235は1/7片で、復元口径は27.8cmを測る。口縁部内外面はナデ調整。胎土に石英・

長石粒を多く含む。236は高坏脚部片。246はSD07出土の土製丸玉。直径2.0×2.2cm、孔径は0.4cmを測る。表面は磨滅し調整は不明。255は棒状の滑石製の錘か。ケズリ仕上げで、断面は多角形を呈す。全長7.5cm、最大径2.0cm、重量40ｇを測る。396・397は滑石製臼玉。396はSD05出土。直径７mm、厚さ５mm、孔径1.5cmを測る。SC02と切り合う場所で出土しており、本来はSC02のものと思われる。397はSD09出土。1/2片で直径は５mm、厚さ1.5mm、孔径２mmを測る。

SD08（Fig.3）　調査区北東隅の包含層上面で検出した南北溝。明確な規模は不明。

出土遺物（Fig.26・27、PL.11）　中世後半代の中国産青磁・白磁、李朝青磁片、鉄滓などが出土している。237・238は青磁器。237は碗底部細片で15世紀のもの。238は龍泉窯系の皿1/2片。復元底径3.8cmを測る。見込みにはヘラ片切りの魚文が描かれる。外底部は露胎、体部には灰オリーブ釉がかかる。239～242は白磁碗底部片。239は2/3片、240は1/4片、241は3/5片、242は2/3片で、復元底径は4.6cm・6.2cm・6.8cm・7.0cmを測る。高台部はケズリ出しである。239は乳白色釉がかかる。240が二次加熱を受けたのか釉の発色が悪く、内底部に茶褐色の付着物がある。高台はケズリ出しで露胎。241・242は高台部はケズリで露胎。畳付きは擦っている。243は陶器の瓶の底部1/4片か。体部外面沈線が２条巡る。内面はナデ調整。244は土師質土器の鍋口縁部細片。口縁部外面に１条の突帯が巡る。外面はヨコハケ調整。内面は調整不明。245は土師質土器の方形の火鉢の口縁部細片か。二次加熱で浅黄橙色を呈し、器表面は荒れる。256は楕円形状の扁平な磨石。全面擦られている。全長10.6cm、最大幅5.1cm、最大厚2.8cmを測る。石材は灰白色を呈す玄武岩。

⑤　ピット（SP）出土遺物（Fig.27・28・35、PL.11）

258は**SP08**出土の龍泉窯系青磁碗1/10片。復元口径17.4cmを測る。内面ヘラ片切りの花文が入る。内外面にオリーブ灰色釉がかかる。259・260は**SP58**出土。土師器甕口縁部細片。260の体部内面はケズリ、口縁部内面から外面はナデ調整で指オサエ痕が残る。259は器表面はやや磨滅するが260と同様の調整である。261は**SP96**出土。須恵器の高台付き鉢1/5片。復元口径は17.2cm、底径8.4cm、器高7.6cmを測る。体部は内外回転ナデ調整、底部はナデ調整である。胎土は精良。９世紀前半のもの。262～264は**SP118**出土の須恵器。262は扁平な蓋1/3片。復元口径は17.6cmを測る。口縁端部には沈線が巡る。上面は回転ヘラケズリ、内面はナデ調整。天井部にはつまみが付くと思われる。263は高台付き坏の口縁部1/3片。復元口径12.2cmを測る。内外面回転ナデ調整。264は甕口縁部1/6片。回転ナデ調整で、灰カブリする。262・263は胎土は精良、264の胎土は黒色粒子を含む。265・266は**SP124**出土。265は弥生土器甕口縁部細片である。266は甕底部1/4片。復元底径は８cm位か。弥生時代中期後半のもの。267は**SP149**出土の須恵器坏身1/6片。復元口径は11.5cm、受け部径13.6cmを測る。内外面は回転ナデ調整。Ⅲb期のものであろう。268は**SP156**出土の弥生土器の甕口縁部1/7片。復元口径は17.2cmを測る。器表面の磨滅はひどく調整は不明。269は**SP181**出土の弥生土器甕底部1/3片。復元底径8.2cmを測る。磨滅がひどく調整は不明だが、内面には指オサエ痕が残る。底部に黒斑がある。270は**SP190**出土の須恵器の坏1/5片である。復元口径は13.8cmを測る。調整は回転ナデである。高台が付き８世紀のものであろう。271は**SP192**出土。口縁が鋤先状を呈す弥生中期の甕口縁部1/5片。復元口径21.4cmを測る。調整はナデ。焼成はやや不良。272は**SP196**出土の弥生土器口縁部細片。257は**SP203**出土の石剣の基部片である。残存長8.2cm、幅3.8cm、最大厚0.7cmを測る。上面は中央にケンマによって鎬を作り出しているが、下面は未調整である。石材は目の密な砂岩か。273は**SP215**出土の注口土器の注口部片。直径0.5cmの孔が空く。274は**SP224**出土の土師器の高坏脚部片。磨滅がひどく調整は不明だが、内面はケズリか。275は**SP228**出土の弥生土器甕口縁部1/10片。復元口径24.8cmを測る。276は**SP236**出土の土師器高坏1/5片。復元口径は13.8cmを測る。ナデ調整である。277は**SP245**出土のイイダコ壷

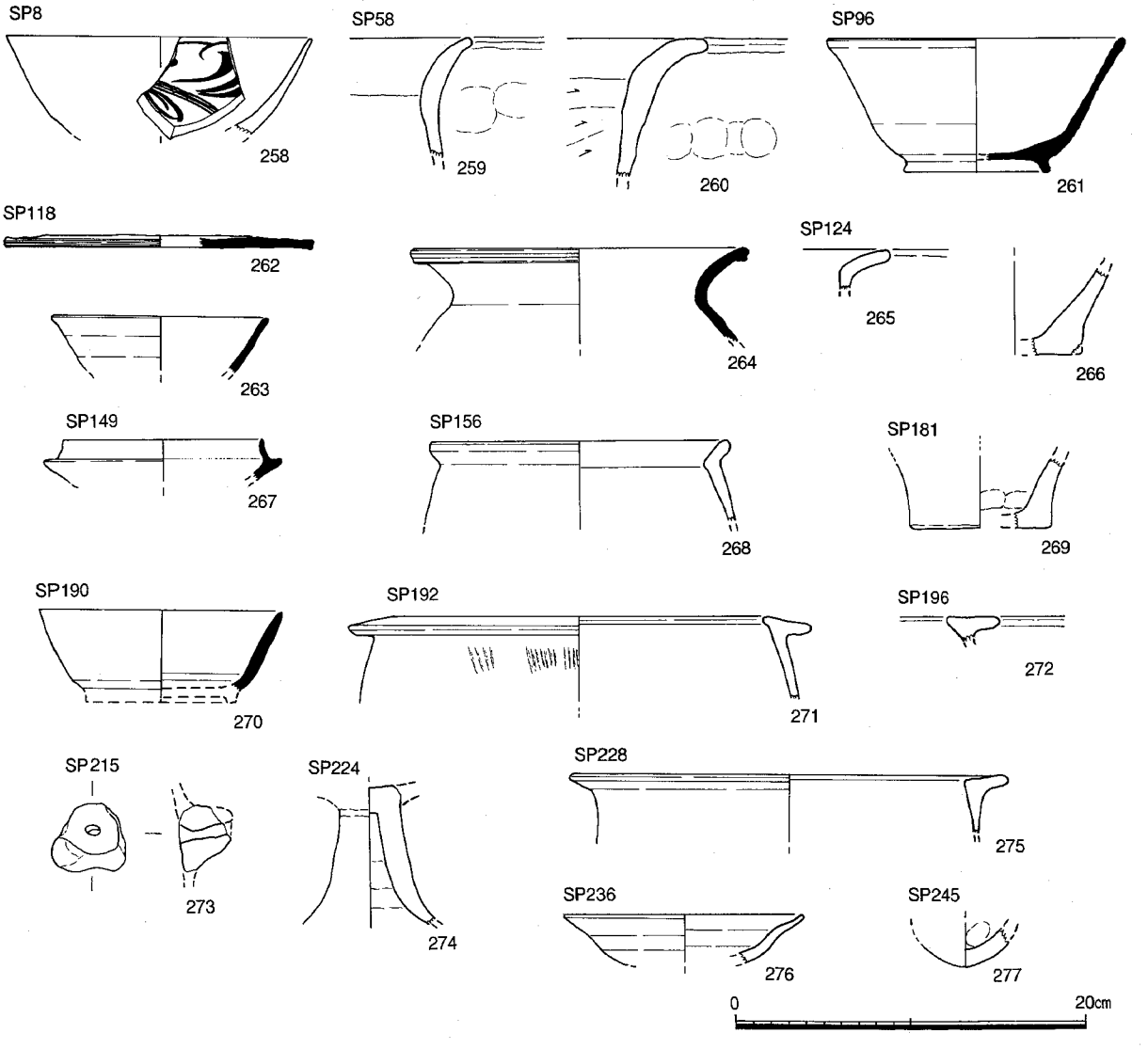


Fig.28　ピット出土遺物（1/4）

底部片。内面指オサエ痕が残る。382・383は**SP80**出土。いずれも馬具の金具と思われる。382は上端が鍵形に曲がる棒状の鉄製品。残存長9.2cmを測り、断面は長方形に近い。383は一端を折り曲げて輪状にしたもの。輪の直径は2.3cmを測る。384は**SP134**出土。鉄滓で鉄分を含む。縦5.2cm、横5.0cm、厚み1.4cmを測る。398・399は滑石製臼玉。398は**SP01**出土。直径４㎜、厚さ1.5㎜、孔径１㎜を測る。399・400は**SP115**出土。399は直径５㎜、厚さ1.5㎜を測る。400はガラス小玉で、直径4.3㎜、厚さ3.5㎜、孔径１㎜を測る。淡青色を呈す。401は**SP217**出土。直径8.5㎜、厚さ５㎜、孔径３㎜を測る。

⑥　**包含層出土遺物**（Fig.30～33・35、PL.11）

調査区北東側を中心に包含層を確認した。包含層は南から北東側へ傾斜に沿って次第に厚くなり、検出面も深くなる。北側では表土下１～1.2mで検出した。包含層は期間の都合上、上面を一部機械掘削している。包含層の厚さは最大で60cm程である。土壌は黒色粘質土または黒褐色粘質土である。包含層上層では中世の青磁などの陶磁器や奈良時代頃の土師器・須恵器が出土するが、全体として弥生時代中期頃の弥生土器から古墳時代の後期の土師器・須恵器などが多数出土している。遺物の層毎の分離があまり明確に出来ないので、上下一括して報告するが、上層からの出土が多い。

278は龍泉窯青磁碗1/2片。高台径6.0cmを測る。内面ヘラ片切りの花文があり、オリーブ釉がかかる

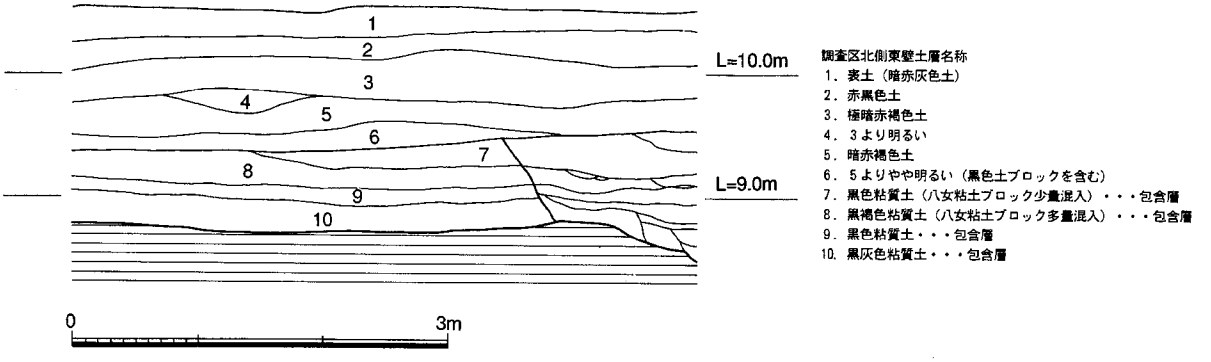


Fig.29　調査区北側東壁土層（1/60）

が発色は悪い。外底部は露胎である。279・280は陶器。279は外面灰褐色を呈する甕底部細片。280は底部片で、外底部に粗砂が付着する。体部内外面には褐色から緑褐色の釉がかかる。

281～290・292～314は須恵器。281～286は８世紀代から９世紀前半にかかる高台の付く坏。いずれも調整は回転ナデ調整である。281は1/4片で、 復元高台径10cmを測る。高台は低くつぶれている。282は1/3片。復元高台径は7.8cmを測る。283は底部小片で、 復元高台径は約９cm弱である。284は1/4片で、復元高台径6.4cmを測る。285は底部1/2片で、復元高台径9.4cmを測る。高台は雑な削り出しで、内面は未調整である。286は1/3片で、復元高台径は9.3cmを測る。外底高台内にヘラ状工具の刻目が時計回りに円を描くように付けられる。287・288は平底の坏底部片。287は1/3片で、復元底径7.8cmを測る。外底部は雑なナデ、その他はヨコナデである。288は底部は厚みがあり、坏以外の可能性もある。内面には巻き上げ痕が残る。ナデ調整で、外底部は雑なナデ。289～294は坏蓋。289・290は７世紀代前半～中頃のもの。289は小片で返りが欠損するが、 復元口径は約10cmを測る。天井部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整。290は小片でほぼ同様の形態と調整。天井部にヘラ記号が入る。291～293は６世紀のⅢ期のもの。口縁部は直立し、天井部との境に段を有す。291は須恵器を模倣した土師器で復元口径約13cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。292は1/6片で復元口径は14.6cmを測る。大型化しておりⅢｂ期のものか。磨滅がひどく調整は不明。焼成は悪い。293は1/3片で復元口径15.8cmを測る。口縁端部内面に段を有すなど古手の形態を残す。天井部の大半は回転ヘラケズリ調整。その他は回転ナデ。294は有蓋高坏の蓋1/4片で焼けひずんでいる。復元口径12.7cm、器高5.8cmを測る。扁平なつまみが付き、天井部と口縁部の境には明瞭な稜線と段を有す。口縁部は直立する。天井部の大半は回転ヘラケズリ後ナデ、口縁部内外面は丁寧な回転ナデ、天井部内面はナデ調整である。295～302は坏身。298以外はⅣ期のもの。いずれも調整は外底部は回転ヘラケズリ、 その他は回転ナデ調整である。295は1/4片で、復元受け部径は14.6cmを測る。296は1/3片で、復元受け部径13.8cmを測る。底部はロクロ回転が時計回りの回転ヘラケズリである。297は1/6片で、 復元口径12.4cm、 復元受け部径14.4cmを測る。298は1/7片で、復元口径12.0cm、受け部径14.4cmを測る。口縁部は直立し、口縁端部内面に段を有す。299は1/5片で、復元口径11.1cm、受け部径13.2cmを測る。表面は灰カブリするが、やや瓦質な焼成である。300は1/6片で、復元口径10.8cm、受け部径12.6cmを測る。301は1/4片で、復元口径は11.4cm、受け部径13.8cm、器高3.4cmを測る。302は口端部を欠損する1/4片。復元口径11.7cm、受け部径14.6cmを測る。301・302いずれも胎土に石英・長石粒を多く含む。303～307は高坏。307以外は脚部1/3片である。復元脚端径は11.4cm・11.2cm・11.4cm・15.2cmを測る。いずれもロクロ成形による回転

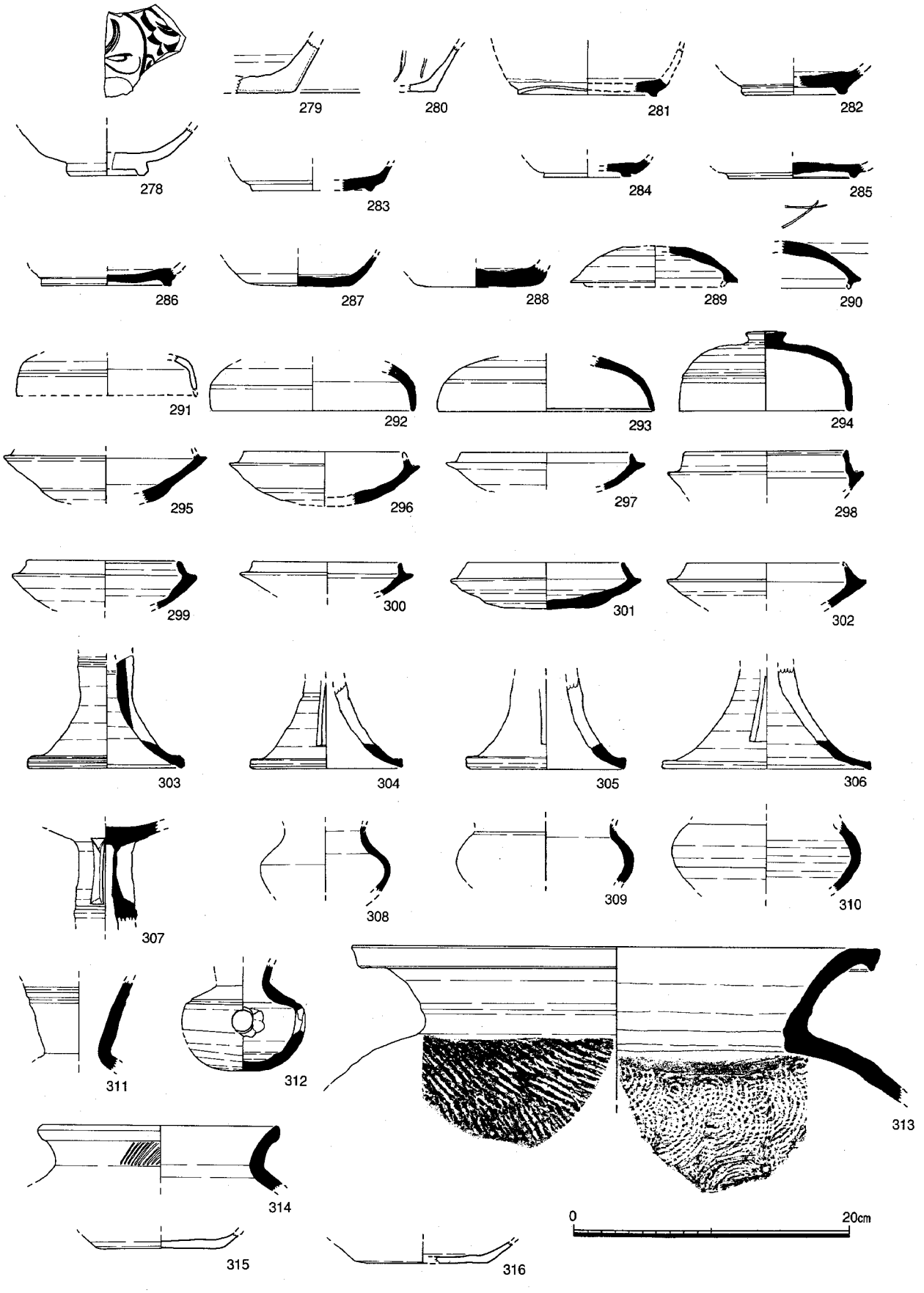


Fig.30　包含層出土遺物Ⅰ（1/4）

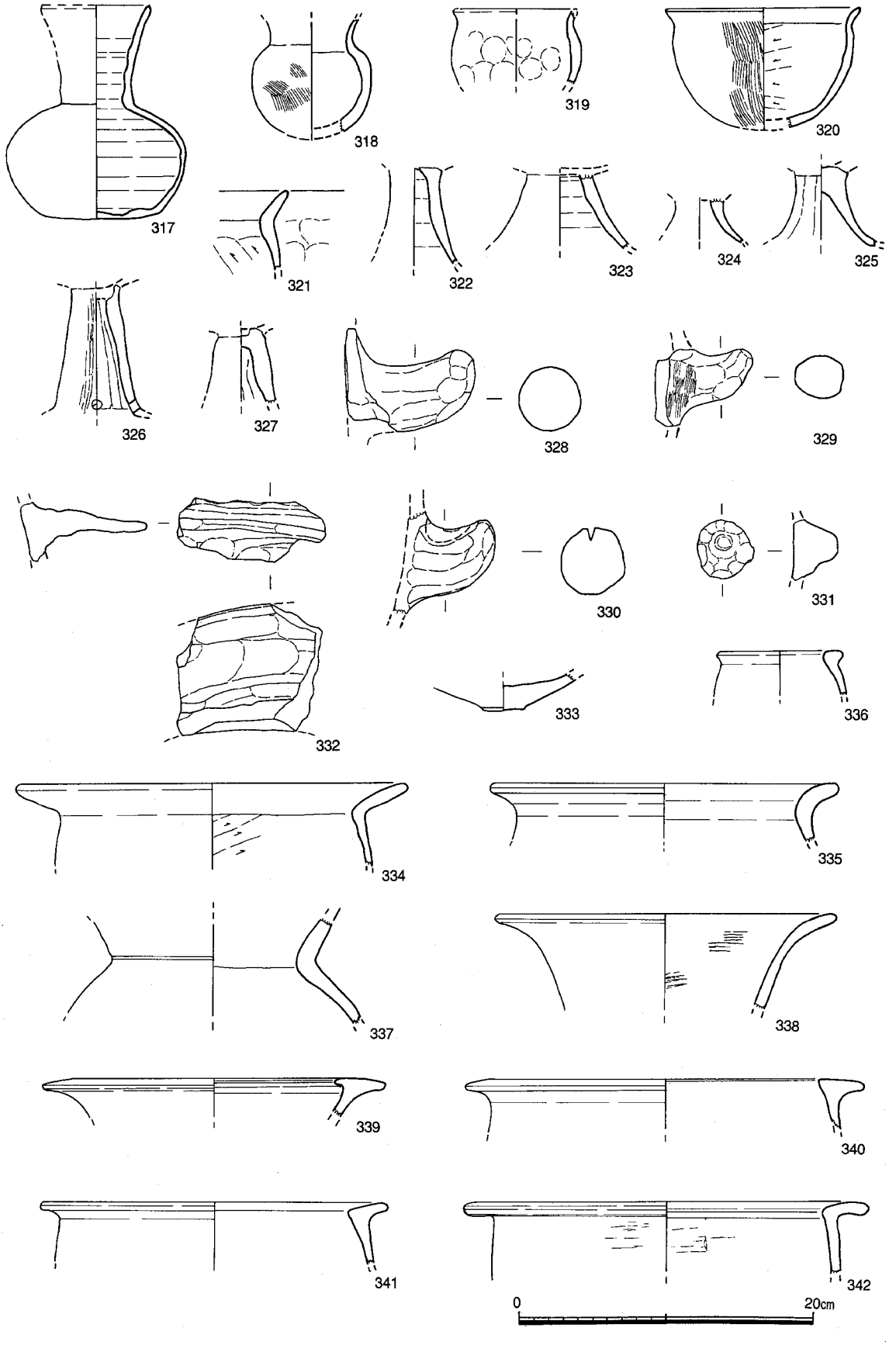


Fig.31　包含層出土遺物Ⅱ（1/4）

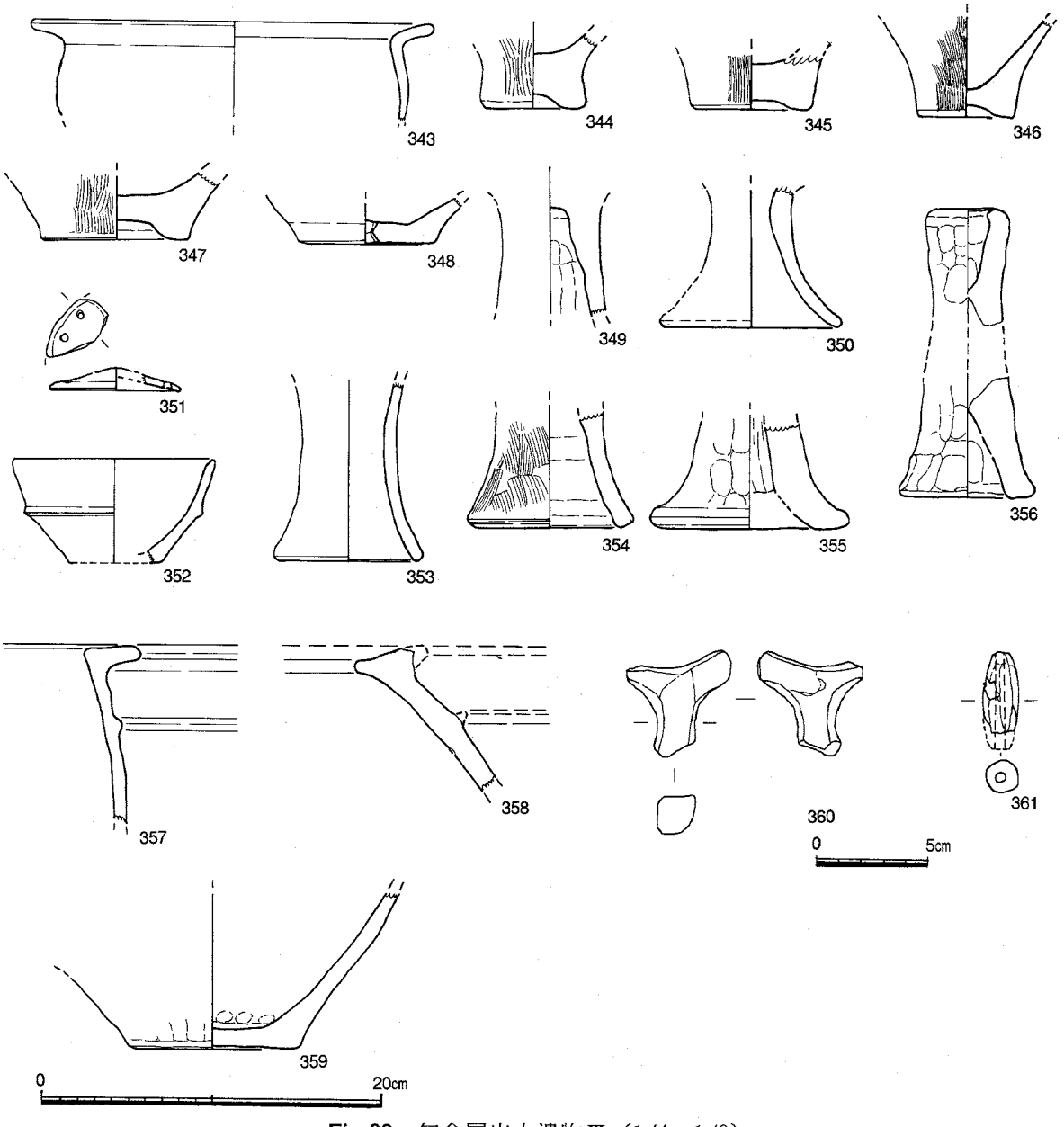


Fig.32　包含層出土遺物Ⅲ（1/4・1/3）

ナデ調整である。303は上部に２条の沈線が巡り、また外面から透かし窓が入るが貫通していない。304は脚部中央に１条の沈線が巡り、また３ヶ所の長方形透かし窓が入る。305は脚端部は上方へ折り返す。長方形の透かし窓が３ヶ所入る。表面には自然釉がかかる。306は表面灰カブリする。長方形の透かし窓は３ヶ所入る。307は脚部片。２条の沈線と突帯を挟んでヘラ切りの長方形の透かし窓が入るが、貫通していない。308は小型の壷の胴部1/3片。復元胴部径9.4cmを測る。回転ナデ調整である。309・310は有蓋の坩胴部片。いずれも1/6片で、胴部は回転ナデ調整である。310の胴部下半は回転ヘラケズリである。311は長頸壷の頸部1/3片。回転ナデ調整である。胎土は石英・長石粒を多く含む。312は瓏体部片。肩部に１条の沈線があり、その下に焼成前穿孔された直径1.5cmの円孔が空く。周囲は焼成後打ちかかれている。外底部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整。胎土は精良。313・314は甕。313は口縁部1/4片。復元口径38.4cmを測る。口縁端部は折り返して断面三角形を呈す。口縁部は回転ナデ調整で、体部外面は斜めに交差して打ち込んだ平行叩き、内面は同心円状の当て具痕

が残る。314は口縁部1/6片で、 復元口径は17.2cmを測る。口縁部外面斜めの櫛描き後回転ナデ調整。焼成はやや不良。

315～332は土師器。315・316は坏底部片。1/4片と1/2片で復元底径は9.4cm、9.6cmを測る。外底部は回転ヘラケズリ、その他はナデ調整である。胎土は315が精良。317はロクロ成形の長頸壷。口縁部と胴部の一部を欠損する。最大胴径12.3cm。器高14.8cmを測る。器表面の磨滅はひどいが、 回転ナデ調整である。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は精良、焼成はやや不良。318は小型丸底壷1/4片。復元胴部最大径8.2cmを測る。ナデ調整で胴部外面にはハケを加える。内面は指オサエ痕が残る。祭祀土器であろう。319・320は小型の鉢。いずれも1/6片で、復元口径8.6cm・13.4cmで、320の器高は8.5cmを測る。319はナデ調整で指オサエ痕が残り、320は外面ハケ、内面ヘラケズリ調整である。319は祭祀土器か。321は甕の口縁部細片である。322～327は高坏脚部片。322は磨滅がひどく、焼成はやや不良。323は1/2片で、裾部がラッパ状に大きく開く形態。二次的加熱を受け桃色を呈す。324は低脚で、脚台と思われる。器表面は磨滅し調整不明。胎土は精良。325は裾部が外折して水平に開く形態。外面やや磨滅するがヘラナデ調整。326は細身の形態で裾の屈折部に円形透かしが２ヶ所入る。外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ調整。327は外面ナデ、内面ヘラケズリ調整。324は胎土精良、その他は石英・長石粒を含む。328～330は牛角状を呈す把手。いずれも指オサエ仕上げで、断面は丸い。胴部に差し込む形態。329はハケを周囲に加える。330は上面から１cm程ヘラで切り込んでいる。いづれも胎

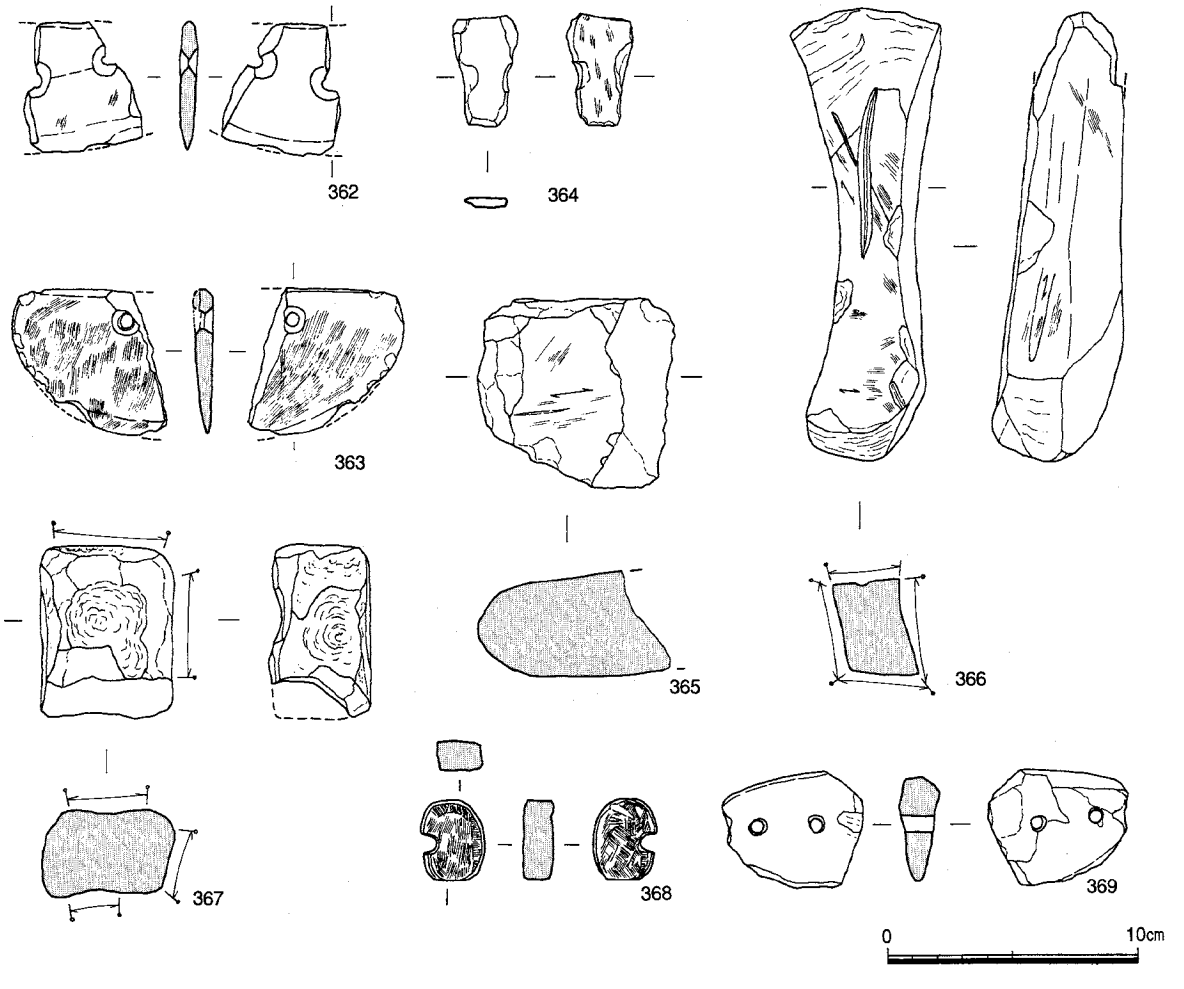


Fig.33　包含層出土石器（1/3）

土に石英・長石粒を多く含む。331は3.5×４㎝、高さ2.5㎝程のボタン状の把手で、装飾的なものであろう。磨滅するが、ナデで指オサエ痕が残る。332は移動式竈の庇の部分。指ナデ仕上で、外面ヨコハケが残る。胎土に石英・長石粒を多く含む。333は弥生時代終末から古墳時代前期初頭の壷底部片。底部を直径2.8㎝の小さな平底をケズリ出す。内面丁寧なナデ、外底部は雑なナデ調整。334・335は甕口縁部片。1/8片と1/9片で、復元口径は27.0㎝・23.5㎝を測る。334は口縁部が外折して大きく開く形態。335は口縁部が外湾して開く形態。全体に器表面は磨滅するが、 胴部内面はヘラケズリ調整である。

336～359は弥生土器。336～339は壷。336は小型の無頸壷1/6片。復元口径8.8㎝を測る。器表面の磨滅はひどく、調整は不明。337は口頸部 1/2片。頸部に段を有す。器表面の磨滅はひどいがナデか。338は大きく開く口縁部1/3片。復元口径23.4㎝を測る。器表面の磨滅はひどいが、口縁内面は粗いヨコハケが残る。339は鋤先状口縁の壷1/6片。復元口径は23.6㎝を測る。ナデ調整で丹塗りである。胎土は精良。340～ 343は甕口縁部片。中期後半から後期初め頃のもの。340～342は逆L字形を口縁部1/4片・1/6片・1/8片で、復元口径は27.4㎝・24.0㎝・27.8㎝を測る。調整はナデで、342は口縁端部に煤が付着、 胴部内面には工具痕が残る。343は「く」字状を呈す口縁部1/6片。復元口径は24.0㎝を測る。器表面の磨滅はひどく調整は不明。焼成はやや不良。いずれも胎土に石英・長石粗粒を多く含む。344～347は甕の底部片。いずれも上げ底で中期頃のもの。外面はハケメ調整である。復元底径はいずれも6.2㎝・7.5㎝・5.8㎝・8.8㎝を測る。胎土は345が精良で、 その他は石英・長石粒を多く含む。348は甑の底部1/2片。復元底径は8.1㎝を測る。底部に焼成前に穿孔された径2.2㎝の蒸気孔がある。外底部は二次加熱を受けている。内面には指オサエ痕が残る。349・350は高坏脚部片。349は大型で、筒部内面はケズリ調整である。350は脚端径11.0㎝を測る。磨滅し調整は不明。351は小型の蓋1/6片。復元口径7.8㎝、器高1.4㎝を測る。直径４㎜の円孔が２個１対で両側に対応して付く。丹塗りである。352は体部中央に１条の三角突帯を巡らす鉢1/5片。復元口径11.6㎝、器高6.2㎝を測る。器表面の磨滅はひどく調整は不明。353～355は中空の筒型の器台底部片。353は1/4片で、復元底径は11.0㎝を測る。磨滅がひどく調整は不明。354は1/3片で、復元底径10.0㎝を測る。外面粗いハケメ、内面はナデ調整である。355は1/4片で、復元底径は約12㎝。ナデ調整で、外面指オサエ痕が残る。356は器台で、中実の頂部と底部片から復元した。復元頂部径４㎝、復元底径8.2㎝を測る。手捏ね仕上でかなり歪みがあるが、内外面ナデ調整で、指オサエ痕が全面に残る。357～359は甕棺片。357は小児棺の口縁部細片か。

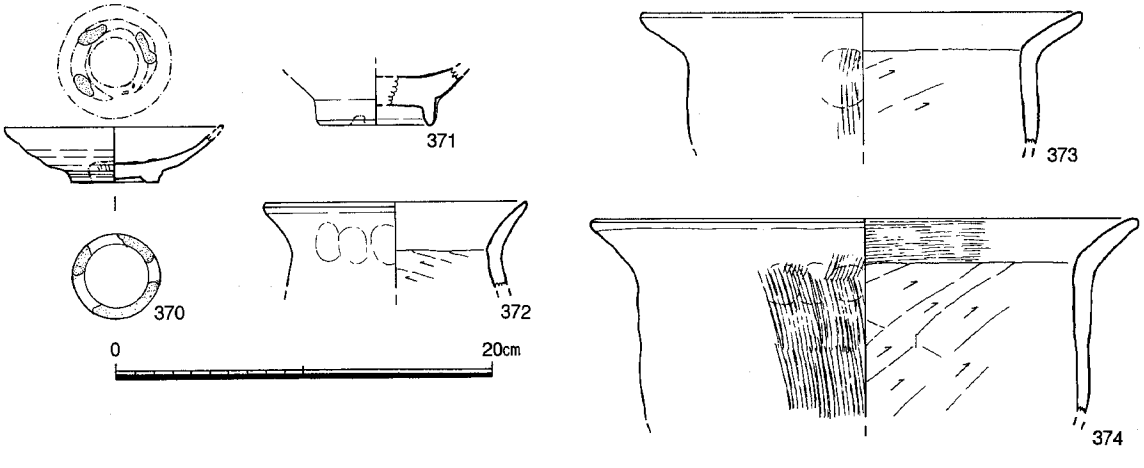


Fig.34　遺構面出土遺物（1/4）

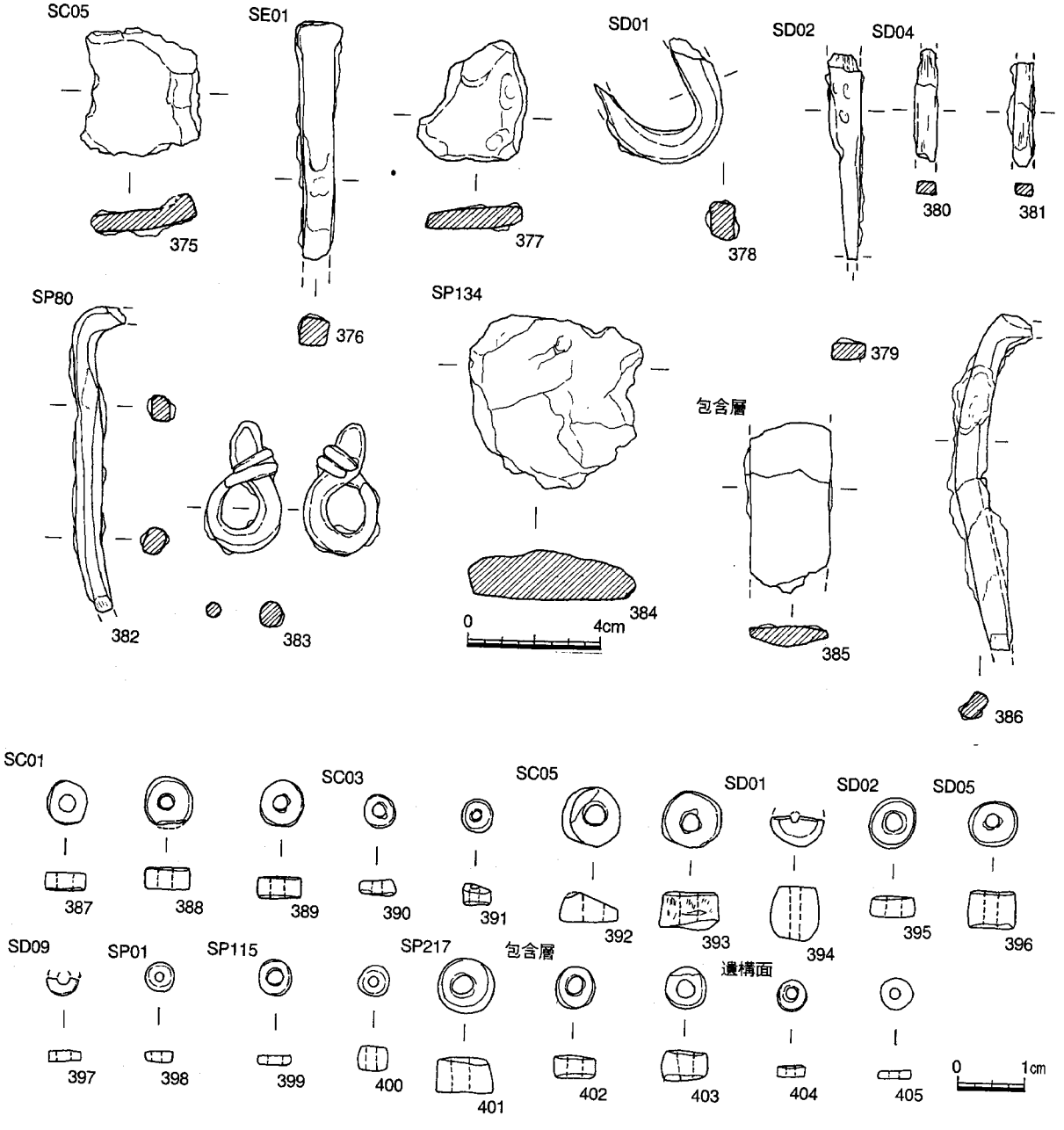


Fig.35　各遺構出土鉄器・玉類（1/2・1/1）

358は口縁部が内傾し鋤先状を呈す須玖Ⅱ式の形態。外面黒斑がある。359は底部10.3cmを測る。外面丁寧なナデで、内面指オサエ痕が残る。360はY状を呈す不明土製品。縦長4.6cm、横長4.7cmを測る。断面は方形で、一辺は1.7cmを測る。上層出土。甑の底部片か。361は土錘1/4片で、残存長3.6cm、最大径は1.4cm、孔径4.5mmを測る。ナデ調整である。

362～364は石庖丁小片。362は粘板岩製で使用によりかなり欠損がひどい。363は立岩産の輝緑凝灰岩製で、 ケンマにより刃部を研ぎ出している。364は粘板岩の石庖丁片を再利用したもの。365・366は砥石である。365は縦長7.6cm、横長7.6cm、厚さ4.2cmを測る小片。上下両面が砥面。目の細かい砂岩製の中砥石である。366はほぼ完形で、全長18.0cm、最大幅6.0cm、最大厚さ4.7cmを測る。上下面・左右両側面が砥面である。灰白色を呈す頁岩製の仕上砥石か。367は砥石転用の叩き石片。残存長6.9cm、幅5.2cm、最大厚4.1cmを測る。上下面と上小口・右側面に使用打痕、左測面が砥面のケンマ面が残る。

石材は目の粗い砂岩である。368は楕円形を呈す滑石製品。縦長3.2cm、横長2.6cm、厚み1.2cmを測る。左側に幅７mmの穿孔がある。丁寧なケンマ仕上げで装飾品か。369は２ヶ所に直径６～７mmの円孔がある滑石製品の破片。縦長4.7cm、横長5.6cm、最大厚さ1.5cmを測る。ケンマ調整で、左側面に打ち欠きがあり、漁撈具の錘の可能性がある。

385・386は鉄製品。385はヤリガンナ片か。残存長5.2cm、幅2.5cmを測る。断面が菱形で両側が刃部か。386は上端が曲がる角釘か。２片に分割するが、全長10cmを測る。断面は長方形を呈す。402・403は包含層出土の滑石製臼玉。402は上層出土。直径６mm、厚さ３mm、孔径３mmを測る。403は包含層北側出土。直径6.5mm、厚さ５mm、孔径２mmを測る。

⑦　**遺構面出土遺物**（Fig.34・35）

370は肥前陶器の皿底部片。復元口径11.6cm、 復元底径4.6cmを測る。体外面から内底部に黄緑色釉がかかる。見込みは蛇の目状に釉を掻き取り、高台部は露胎でケズリ。見込みと畳み付きに３ヶ所の砂目積み痕が残る。371は青磁碗底部1/3片。復元底径は6.4cmを測る。オリーブ灰色釉が厚めにかかるが、高台内は露胎。15世紀の明代。372～374は土師器の甕。372は1/5片、373・374は1/6片である。復元口径は14.2cm・23.8cm・29.5cmを測る。372は外面ナデ調整で指オサエ痕が残る。内面はヘラケズリ調整。373の胴部外面は粗いハケ、内面はヘラケズリ。口縁部外面はナデで、内面はヨコハケ調整。374は全体にやや磨滅するが、外面ハケメが残り、内面はヘラケズリである。371は北側撹乱出土、その他は遺構検出面出土である。

404・405は滑石製臼玉。404は直径4.5mm、厚さ１mm、孔径1.5mmを測る。405は直径5.1mm、厚さ１mm、孔径1.5mmを測る。

３）小　結

前節では調査の概要について述べたが、ここではそれらについて整理を行い、簡単なまとめとしたい。

当調査区で検出された遺構の時期は古墳時代後期から中世後期迄である。ただ包含層や遺構からは、混入品ではあるが、弥生時代中期前半頃の遺物が出土している。当地点西側の第169次地点や第164次地点では該期の遺構が確認されていないが、当地点東側の第３次地点や第51次地点では中期から後期初めの集落が検出されているので、それらの遺物は東側集落から流れ込んだ可能性が強い（註１）。

遺構の中心をなす時期は古墳時代後期から平安時代初め頃迄である。竪穴住居跡は建て替えも含めて８棟検出されたが、時期は６世紀後半から７世紀初頭迄のもので、新旧関係はSC08→SC07→SC06→SC05・01～03となろう。概して大溝北側の住居がやや古いようである。当地点周辺では竪穴住居跡は６世紀代で造られなくなり、それと入れ替わるように整然と配置された大型掘立建物群が出現し、８世紀代の建物群は早良郡衙と推定されている(註２)。庶民の住居である竪穴住居が周辺一帯で無くなるということと関連があるのであろうか。包含層の時期については、上面に中世の遺構があることや、古代の大溝SD02が上面から切り込むことから、それ以前に既に堆積していたものと思われる。

古代の遺構は溝SD01・02と２基の井戸や土坑である。SD01は南側の第108次・75次・47次・187次・134次調査区にかけて延びるものである。時期的には須恵器群などの遺物から７世紀から８世紀代に収まるものであろう。SD02の時期を決めうる遺物は当調査区では少ないが、 東側延長部分の第３次調査の１号溝が平安時代前半頃までの時期であり、当地点でもほぼ同時期であろう。また北側第164次調査区の並行する大溝もほぼ同時期と考えられている。この溝は早良平野の条里地割に合うもので、有田遺跡群の東側に所在する原遺跡群第10次調査（註３）や第14次調査（註４）の大溝との関連して、山本信栄氏らによって、官道の存在が推定されている（註５)。SD02から北側は谷部の斜面で、包含層が厚く堆積している。この包含層上面には中世の遺構が存在する。道路跡を示すような硬化面などは確認できなかったが、路面が既に削平されている可能性はある。又、調査区境界で中世の遺物を含むが、SD02にほぼ並行する小溝があり、ここに道路があるとすれば側溝になるかも知れない。その場合道路の中心は現在の道路下であろう。早良郡においては『延喜式』に肥前北部ルートの西海道の駅家の額田駅が設置されている。推定地は遺称地の野方、あるいは室見川沿いの橋本あたりとされている（註６)。有田台地の南端から橋本・野方に通じる条里方向を取る旧道があり、その旧道とこの溝が官道に関連があるとすれば550m程北にずれる。今回の調査では溝は確認したが、 道路跡を裏付ける積極的な証拠は確認出来なかった。

註

註１　周辺調査区については福岡市教育委員会『有田・小田部』の各集で報告しているので参照のこと。

註２　福岡市教育委員会『有田・小田部33』福岡市埋蔵文化財調査報告書第649集　2000

註３　福岡市教育委員会『原遺跡３』福岡市埋蔵文化財調査報告書第215集　1990

註４　福岡市教育委員会『原遺跡６』福岡市埋蔵文化財調査報告書第295集　1992

註５　山村信栄「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学第68号』 1993

註６　藤岡謙二郎編『古代の交通路Ⅳ』 昭和54年

第４章　第150次調査の記録（調査番号8912）

１）　調査の概要

本調査区は早良区小田部３丁目163に所在する。北に向かって八手状に広がる有田・小田部台地中程の西側支群の北端に位置し、北側に谷を望む緩斜面上に立地する。調査区南側は第59次調査、第60次調査、第180次調査が行われている。第59次調査では弥生時代前期末の甕棺墓や中期の住居址などが出土し、第180次調査では縄文時代晩期末の夜臼式期の住居址が確認されている。

発掘調査は平成元年５月10日から７月７日迄行った。調査面積は1087㎡である。調査区の地形は西から東に傾斜し、遺構面の標高は西側で7.8m、東側で6.3mを測り、比高差は1.5mを測る。西側では表土下が鳥栖ロームの遺構面であるが、削平を受けており遺構の残りは不良であった。東側斜面は遺構の残りは良好で、地山の鳥栖ローム上には黒褐色粘質土の包含層が存在していた。遺構は主に東側斜面上で検出しているが、包含層上と地山ローム上の２面で検出された。主な遺構は竪穴住居跡６棟、掘立柱建物５棟、土坑36基、溝６条である。出土遺物は遺構を中心に弥生土器から古墳時代土師器・須恵器、中世から近世の土師器・陶磁器などが出土している。

２）　遺構と遺物

①　掘立柱建物　（SB）

５棟検出した。他にも建物の柱と思われる柱穴があるが、建物としてまとめ得なかった。

SB57（Fig.38、PL.13）　調査区中央でSD01と重複し、主軸をＮ－32°－Ｗに取る２×２間の建物。桁行き全長4.3m～4.45m、梁行き全長3.8～3.9mを測る。柱間距離は桁側が2.1～2.30m、梁側が1.95mで、床面積は16.84㎡を測る。柱穴形状は円形又は楕円形で、直径25～35㎝、深さは10～30㎝で小さく浅い。柱穴埋土は黒褐色土である。**出土遺物**は柱穴から弥生土器や古墳時代土師器や黒曜石の細片が少量出土している。

SB60（Fig.38、PL.13）　調査区中央北側で検出した１×２間の主軸をＮ－33°－Ｗに取る建物である。桁行き全長4.24m・4.40m、梁行き全長2.94m・3.06mを測る。柱間距離は桁側が1.84m～2.40mで、梁間の間隔は約３ｍ（10尺）と大きい。床面積は12.96㎡を測る。柱穴は円形または楕円形で、直径20～54㎝、深さは５～20㎝で径にばらつきがあり、全体的に浅く、残りは悪い。柱穴埋土は暗褐色土である。**出土遺物**は柱穴から弥生土器の細片が２点出土している。

SB61（Fig.38、PL.13）　調査区中央で検出した１×２間の主軸をＮ－35°－Ｅに取る建物。桁行き全長4.60m、梁間全長は2.06m・2.26mを測る。柱間距離は桁側が2.24m～2.36mを測る。床面積は9.94㎡を測る。柱穴形状は円形または方形で、直径は60～70㎝、深さは35～50㎝を測り、大きく深い。柱穴埋土は黒褐色土で地山ローム土を含む。柱径は痕跡から20㎝ほどか。

出土遺物は柱穴から弥生土器、古墳時代土師器・須恵器の細片、黒曜石片が少量出土している。

SB62（Fig.38、PL.13）　調査区中央部で検出した１×２間の主軸をＮ－61°30′－Ｗに取る建物。SC55に切られる。桁行き全長5.0m、梁間全長は2.60mを測る。柱間距離は桁側が2.50m等間で、柱筋もきちっと通る。床面積は13.0㎡を測る。柱穴形状は方形又は円形で、直径は50～75㎝、深さは15～30㎝を測り、柱穴径は大きいが、残りは悪い。柱穴埋土は黒褐色土で地山ローム土を含む。柱径は痕跡から20㎝ほどか。**出土遺物**は弥生土器片や黒曜石片が少量出土している。

SB63（Fig.38、PL.13）　調査区南東側で検出した２×２間の主軸をＮ－42°－Ｅに取る総柱の建物。

Fig.36　遺構全体図（1/200）

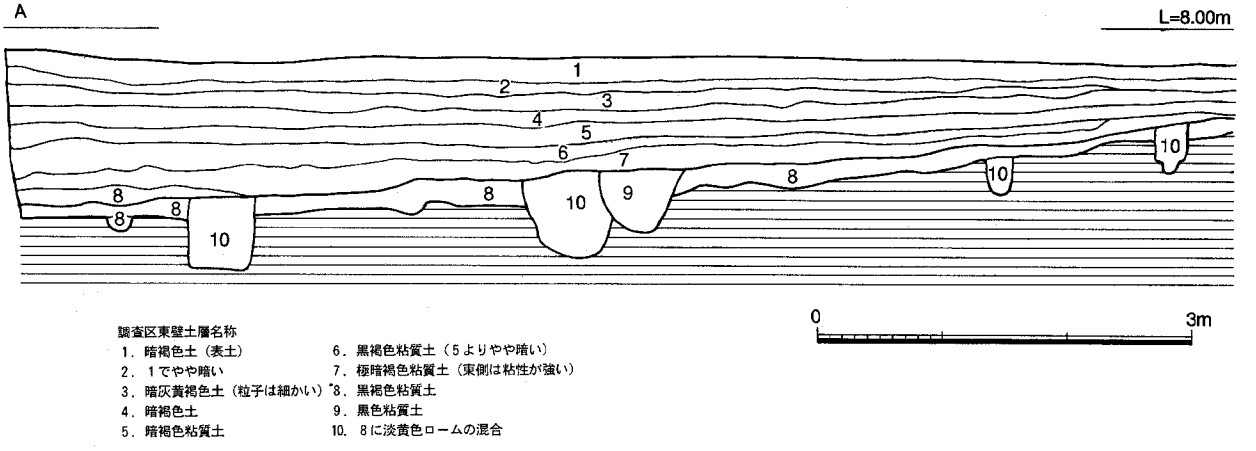


Fig.37　調査区南東壁土層（1/60）

桁行き全長4.5m・4.6m、梁間全長は2.86mを測る。柱間距離は桁側が2.0m～2.5mで、梁間が1.36m・1.5mを測るが、柱筋はやや歪む。床面積は12.73㎡を測る。柱穴形状は方形・円形・楕円形で、直径は50～80㎝、深さは15～50㎝を測る。柱穴は隅柱が深く、間柱の柱穴は深さが浅い。柱穴埋土は黒色土から黒褐色土で地山ローム土を含む。柱径は痕跡から15～20㎝ほどか。**出土遺物**は柱穴から弥生土器片、黒曜石片が少量出土している。

②　竪穴住居跡（SC）

東側で６棟検出したが、全体に遺存状況は余り良くない。他にも焼土面や一部壁や溝が残るところもあり、６棟以外に住居が存在した可能性がある。

SC45（Fig.39、PL.14）　調査区東側北壁にかかり、東側のSC48を切る。隅丸のコーナー部を一部検出したのみで、全容は不明。一辺3.2m以上、壁高は40㎝を測る。埋土は橙色地山ローム土と黒褐色粘質土の混合土である。壁周溝はなく、柱穴や炉跡、ベッド状遺構などは不明。

出土遺物（Fig,41、PL.19）　埋土中から弥生土器片、黒曜石片などが出土している。図示出来るものは少ない。１～３は弥生時代中期の須玖式の甕。上層出土で時期を示すものでない。１は逆Ｌ字形口縁の甕の口縁部片。２も口縁部細片である。３は底部片で底径7.3㎝を測る。器表面は磨滅するが、外面は粗いタテハケ調整。胎土は１・３は石英・長石粒を多く含む。２は精良。１の焼成は不良。

SC46（Fig.39、PL.14・18）　調査区東側、SD44に切られる北東から南西方向に主軸を取る住居。長軸長4.26m、短軸長3.0m、壁高は40㎝を測る。各壁長は均等でなく、平面形状はやや台形を呈す。壁下には幅20㎝、深さ10㎝の溝が全周する。住居の柱穴は不明だが、南壁中央に95×90㎝、深さ30㎝の２段掘りの円形土坑（SK56）がある。埋土は黒褐色粘質土に地山ローム土を多く混入する。

出土遺物（Fig.41・56、PL.20）　埋土中から弥生時代中期の土器片や黒曜石片などが出土している。４・５は逆Ｌ字形の甕か壷の口縁部細片。器表面は磨滅し、調整は不明。７は無頸の小型壷口縁部細片。器表面は磨滅がひどいが、外面丹塗り痕が残る。７の胎土は精良。131は黒曜石の石鏃で先端と基部が欠損する。残存鏃長2.3㎝、厚さ0.4㎝を測る。

SC48（Fig.39、PL.14）　SC45の東側で検出した住居。住居の大半は調査区外で、調査では住居のコーナー部分を検出したのみである。残りは悪く壁溝を検出しただけであるが、壁溝からベッド状遺構を持つ平面形が長方形を呈すと思われる。住居の柱穴、炉跡は不明。時期的には弥生時代後期から古墳時代前期迄の時期が考えられる。**出土遺物**は周壁溝から土器細片が３点出土したのみである。

SC49（Fig.40、PL.14）　調査区中央北側で検出した住居。非常に残りは悪く、南西斜面高所部に高さ５㎝程の壁と床面に焼土面を残すのみである。規模は南西壁長3.72mを測る。焼土面の範囲は50×

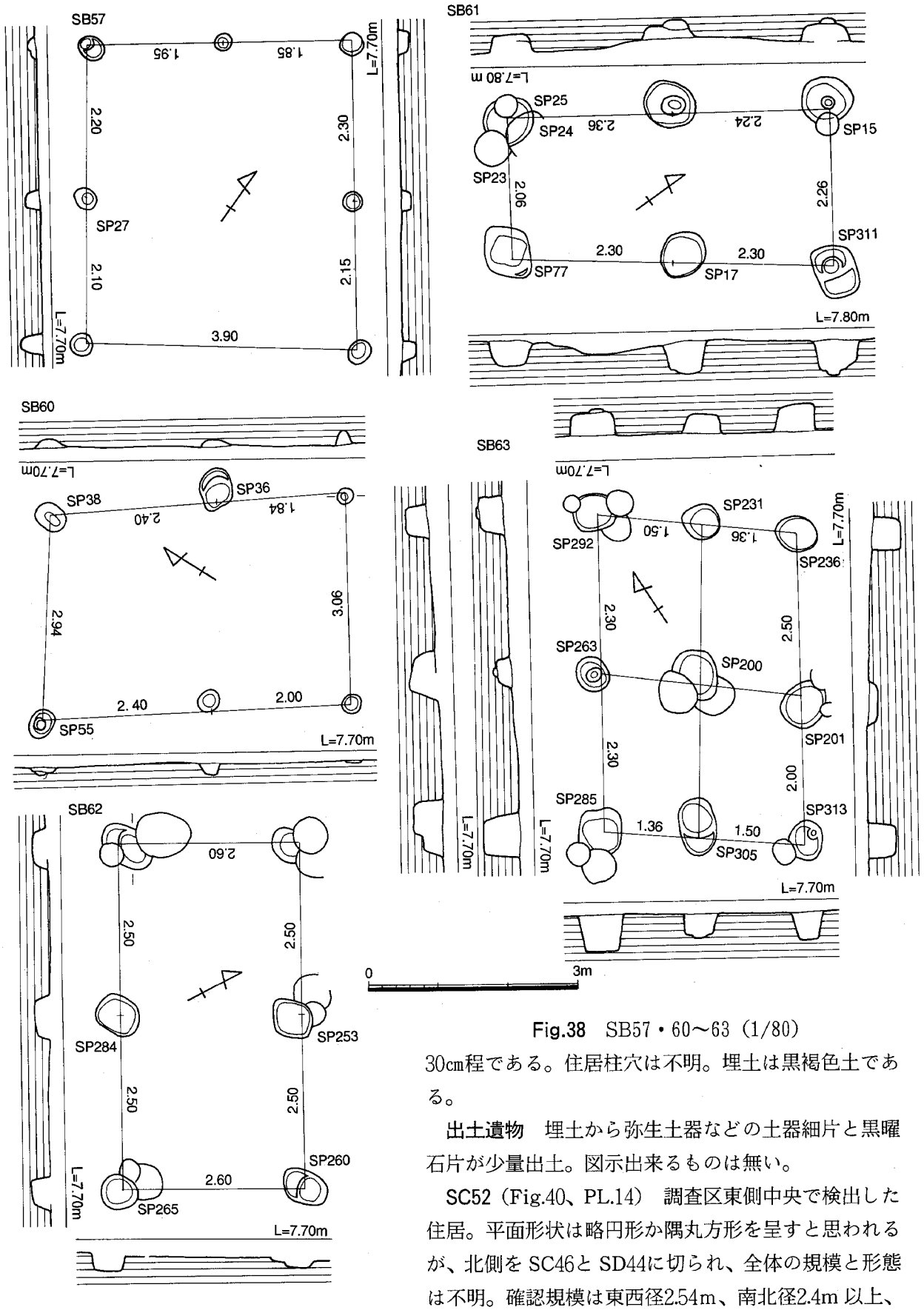


Fig.38　SB57・60～63（1/80）

30cm程である。住居柱穴は不明。埋土は黒褐色土である。

出土遺物　埋土から弥生土器などの土器細片と黒曜石片が少量出土。図示出来るものは無い。

SC52（Fig.40、PL.14）　調査区東側中央で検出した住居。平面形状は略円形か隅丸方形を呈すと思われるが、北側をSC46とSD44に切られ、全体の規模と形態は不明。確認規模は東西径2.54m、南北径2.4m以上、

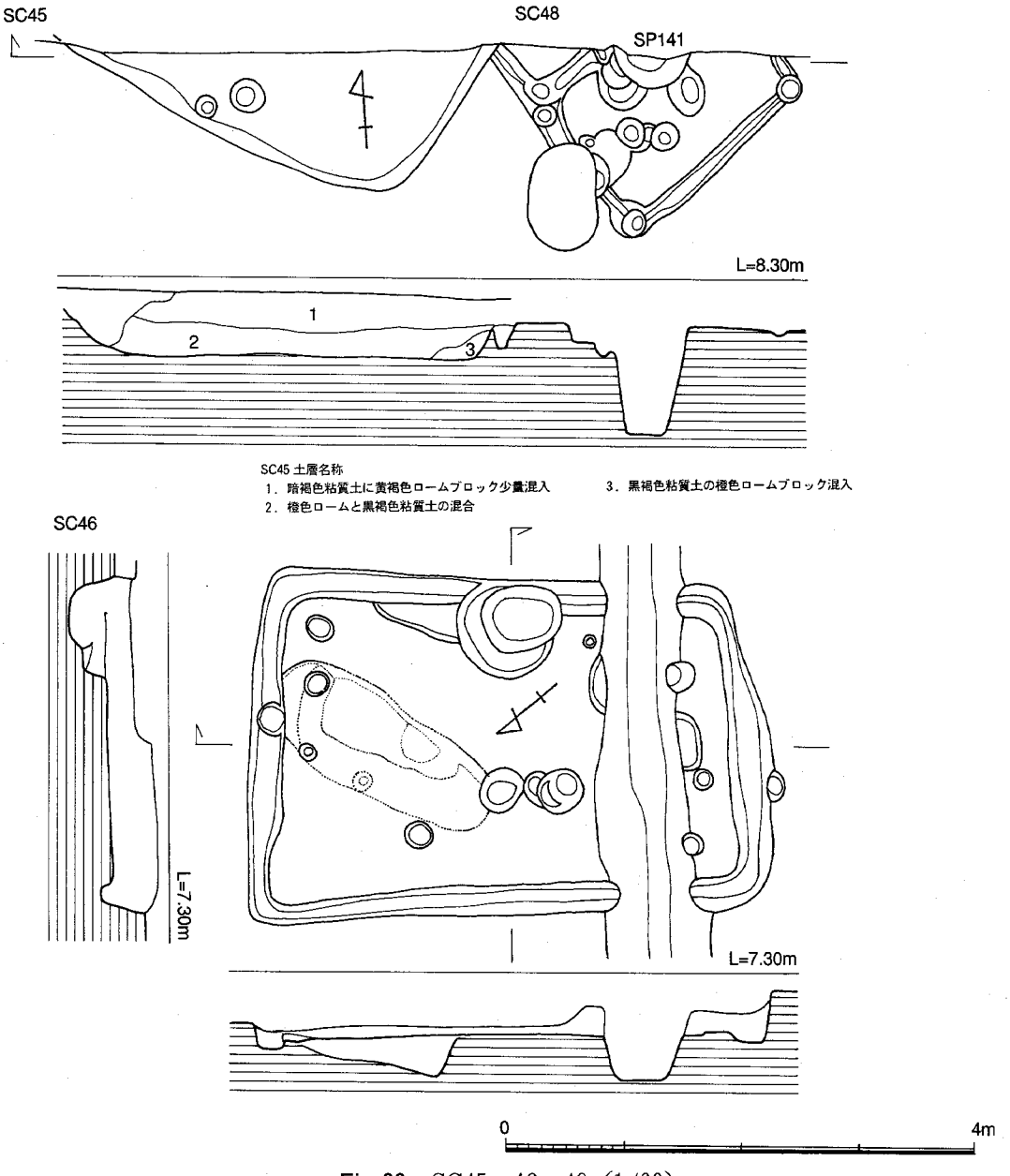


Fig.39　SC45・46・48（1/60）

最大壁高約50cmを測る。住居の残りは他に比べ良い。床面はほぼ平坦で、中央に径30×40cmの炉と思われる焼土面がある。住居柱穴は床面には無く、住居の周囲にもない。埋土は黒褐色粘質土で黄褐色の地山ローム土を混入するが、下層ほどロームの混入が多くなる。

出土遺物（Fig.41）　埋土から弥生土器の細片が少量出土している。図示出来るものは少ない。７は壷の胴部上半細片。突帯が１条巡る。８は壷か鉢の底部1/2片。復元底径7.0cmを測る。底部は上げ底である。中期前半頃のものか。底部には焼成後空けられた孔がある。いずれも器表面は磨滅がひどく調整は不明。胎土には石英・長石粒を多く含む。

SC55（Fig.40、PL.14）　SD01東側で斜面上で検出した、SB62を切る平面形状が方形を呈す住居。残りは悪く、床面と一部西壁と溝が残るのみである。住居の規模は北壁長4.3m、東壁長4.1mを測る。南壁やや東寄りに70×50cm程の不定形の焼土面があり竈の痕跡と思われる。主柱穴は４本でその間隔は2.0m～2.1mを測る。柱穴は円形で、径は50～60cm、深さは40～50cmを測る。住居や柱穴埋土は黒褐色

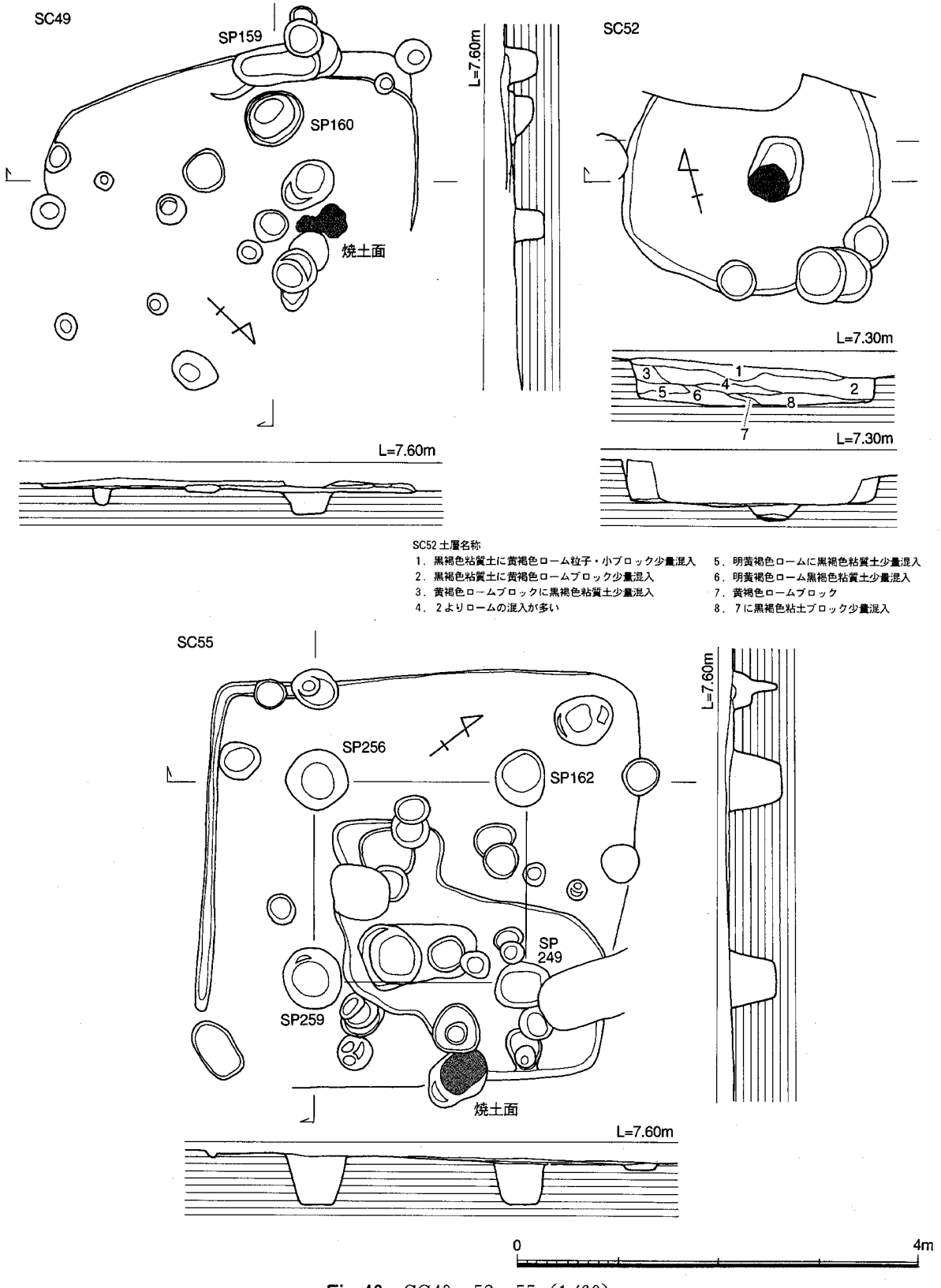


Fig.40　SC49・52・55（1/60）

粘質土である。古墳時代後期の住居である。

出土遺物（Fig.41）　住居埋土や柱穴から弥生土器から古墳時代土師器・須恵器、黒曜石片が少量出

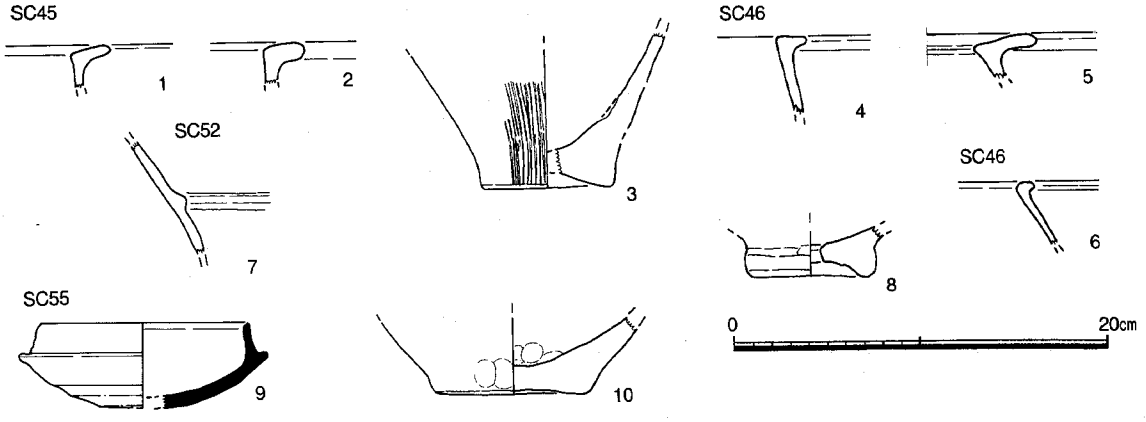


Fig.41　各住居跡出土遺物（1/4）

土している。９・10は柱穴出土。９は須恵器坏身1/8片で、口縁の立ち上がりが直に近い形態でⅢｂ期頃のものか。復元口径11.2cm、受け部径13.6cm、器高4.5cmを測る。外底部2/3は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整である。胎土は精良で、焼成はやや不良。10は弥生土器壷底部1/2片で、復元底径8.0cmを測る。底部はわずかに上げ底である。器表面はやや磨滅するがナデ調整で、内底や外面に指オサエ痕が残る。外面には黒斑がある。

③　土坑・貯蔵穴（SK）

検出総数は36基であるが、主なものについて報告する。

SK07（Fig.42、PL.16）　調査区北西側で検出した主軸を東西に取る楕円形状を呈する土坑。規模は長軸長1.56m、短軸長0.95m、最大深さ20cmを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は褐色土とにぶい橙色ローム土の混合土である。**出土遺物**は弥生土器から古墳時代須恵器細片、黒曜石片が少量出土している。

SK08（Fig.42、PL.16）　調査区中央で検出したSK30を切る不整楕円形状の土坑。規模は長軸長1.45m、短軸長0.76mを測る。底面両側がピット状に深くなり、85cm、105cmを測る。２基の遺構の重複の可能性がある。埋土は黒褐色粘質土で褐色ロームブロックを混入する。

出土遺物（Fig.46）　弥生中期土器片や黒曜石片が少量出土している。11は弥生中期の甕口縁部細片。器表面はナデ調整。

SK09（Fig.42）　調査区中央で検出した不整楕円形状の土坑。規模は長軸長1.36m、短軸長1.0m、最大深さは80cmを測る。底面は階段状に深くなる。埋土は黒褐色粘質土で明褐色ローム粘土を混入する。下層程粘性が強くなる。

出土遺物（Fig.46）　弥生中期の甕口縁部片から土師器細片などが少量出土している。12は古墳時代後期の土師器の甕口縁部細片。胴部内面はヘラケズリ、外面はハケ調整である。

SK10（Fig.42、PL.16）　調査区西側中央で検出した主軸を東西に取る楕円形状の土坑。規模は長軸長1.2m、短軸長1.0m、最大深さ20cmを測る。両側には幅10cm程のテラスを持つ。短軸断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色粘質土で橙色ローム土を混入するが、底層はロームが主体となる。

出土遺物（Fig.46）　弥生土器片や焼土塊、黒曜石片などが少量出土している。13・14は弥生時代中期前半の甕口縁部小片。13は逆Ｌ字形を呈し頸部には細い三角突帯が付く。器壁は薄い。いずれも磨滅がひどく調整は不明。胎土には石英・長石粗粒を多く含む。

SK11（Fig.44、PL.16）　調査区中央で検出した楕円形状を呈す土坑。SK12・38を切る。規模は長軸長1.02m、短軸長0.8m、最大深さ27cmを測る。底面は東側が一段深くなる。埋土は暗褐色土で明黄褐

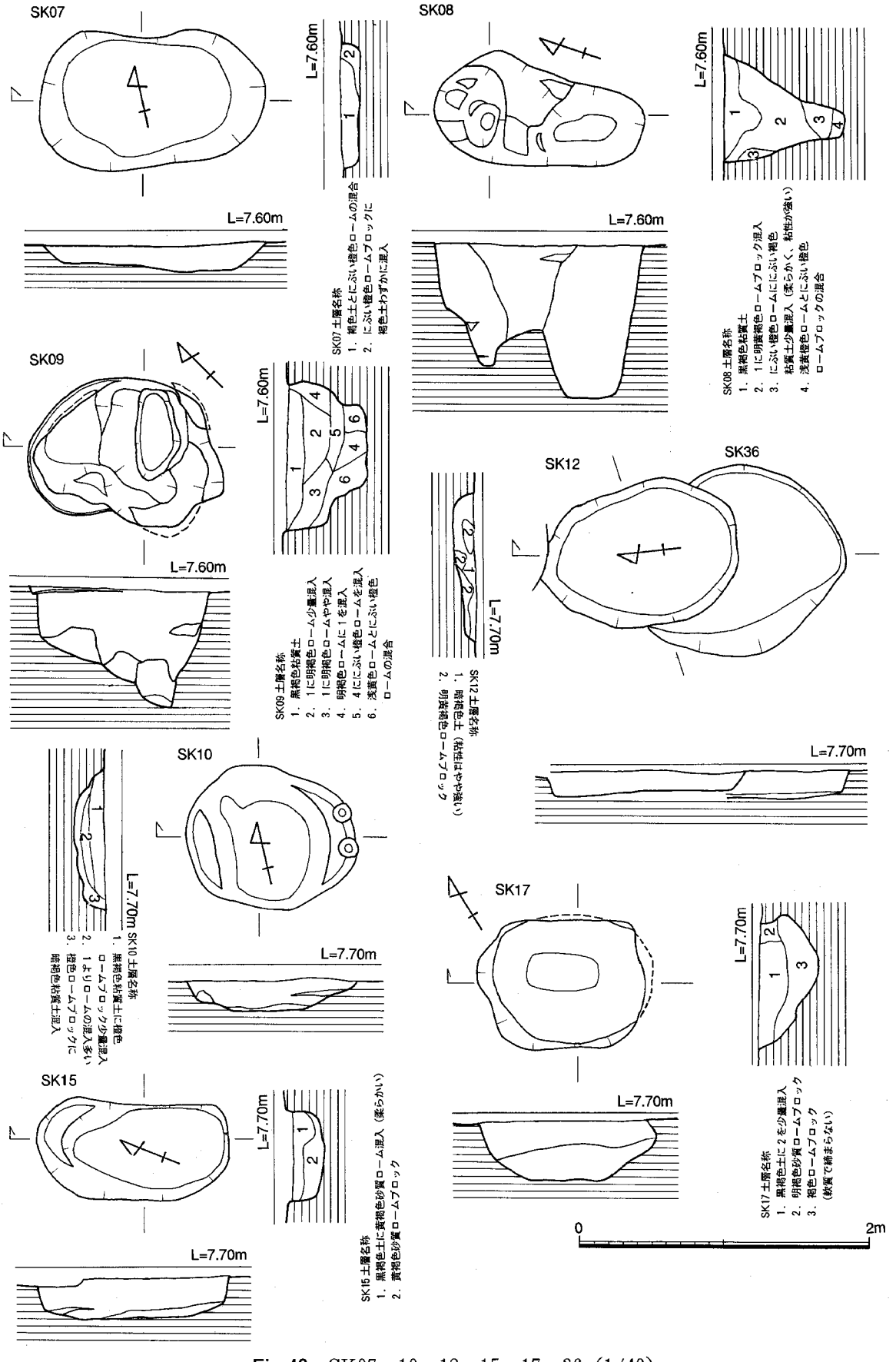


Fig.42　SK07～10・12・15・17・36 (1/40)

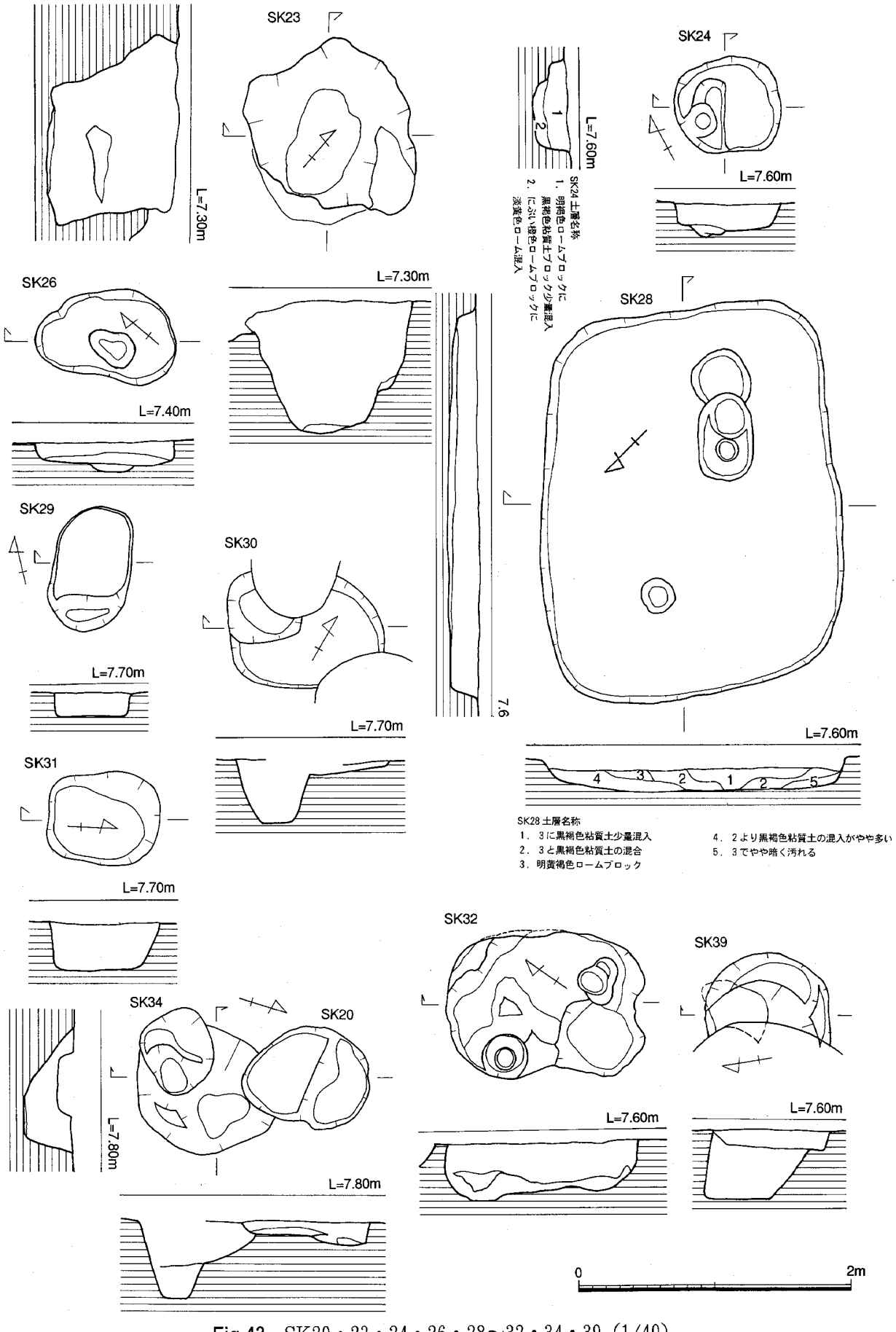


Fig.43　SK20・23・24・26・28～32・34・39（1/40）

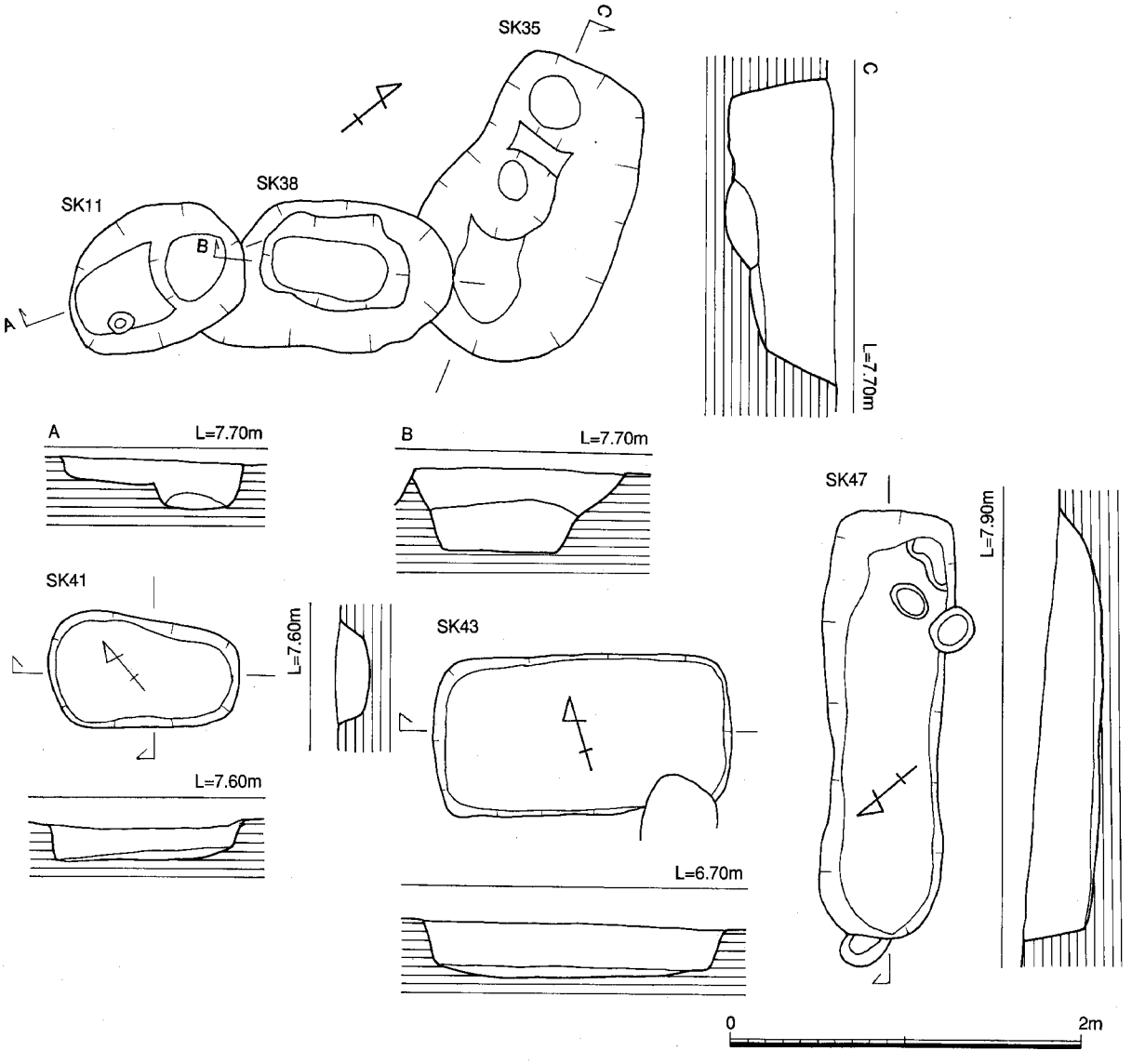


Fig.44　SK11・35・38・41・43・47（1/40）

色ローム土を混入する。

出土遺物（Fig.46）　古墳時代土師器・須恵器片、黒曜石片などが少量出土している。15は須恵器の坏蓋天井部1/6片。外面天井部と口縁部との境に段を有す。天井部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整である。胎土は精良。

SK12（Fig.42、PL.16）　SK11の南西側で検出した楕円形を呈す土坑。規模は長軸長1.40m、短軸長1.0m、最大深さ14cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面は逆台形を呈す。埋土は粘性がある暗褐色土で明黄褐色ロームブロックを混入する。

出土遺物（Fig.46）　弥生土器から土師器・須恵器片が少量出土している。16は須恵器坏身1/8片。復元口径12.4cm、受け部径14.6cmを測る。Ⅲｂ期のもの。胎土は精良。

SK14（Fig.45、PL.16）　調査区南側で検出した主軸を北東から南西方向に取る、平面形状が隅丸長方形を呈す土坑。規模は長軸長1.17m、短軸長0.65m、最大深さ15cmを測る。底面は中央が深くなり、断面は船底形を呈す。埋土は明褐色ローム土が主体で黒褐色粘質土を含む。形態から土坑墓か。

出土遺物は古墳時代の土師器細片と黒曜石片が少量出土している。

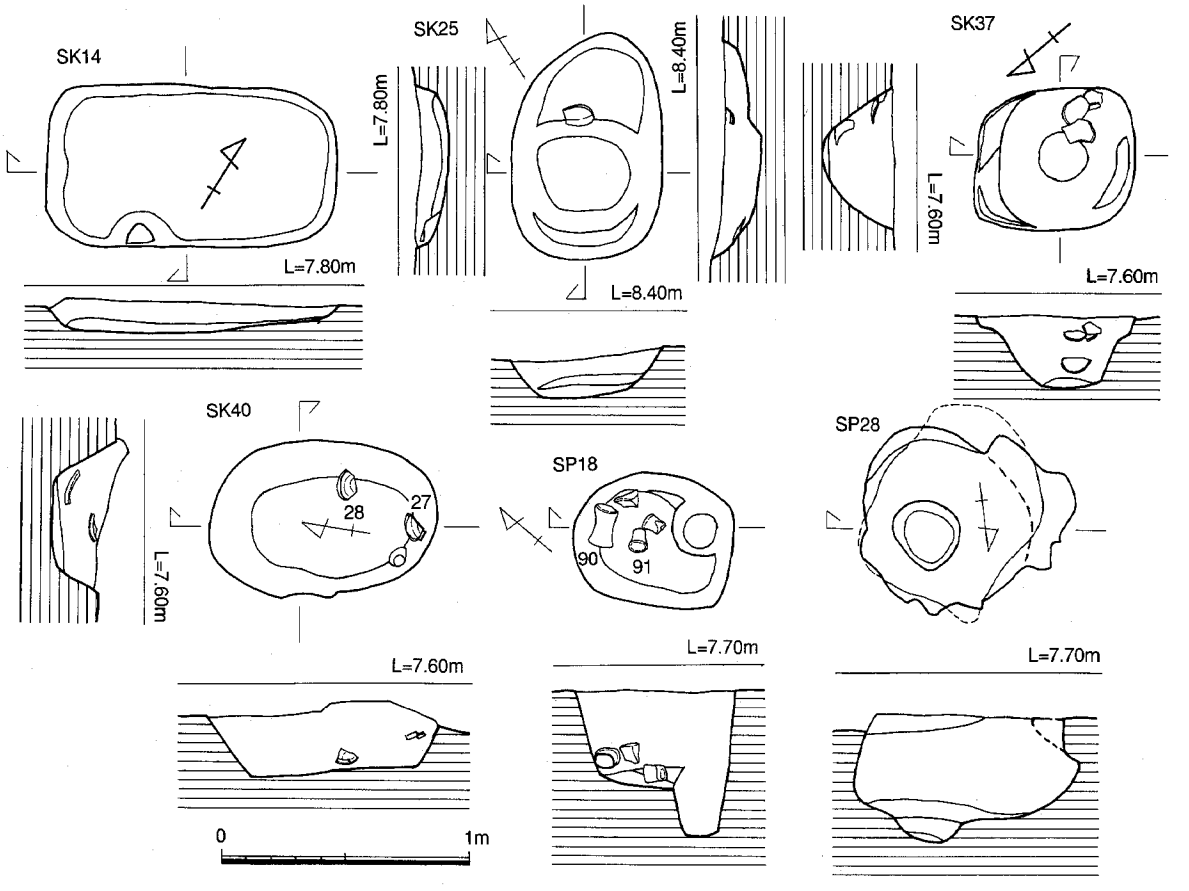


Fig.45　SK14・25・37・40・SP18・28（1/30）

SK15（Fig.42、PL.16）　調査区中央南側で検出した土坑。長楕円形状を呈し、規模は長軸長1.33m、短軸長0.66m、最大深さ30cmを測る。底面は北側に狭いテラスを持つ。断面は船底形を呈す。埋土は上層が黒褐色粘質土、下層が黄褐色ローム土である。**出土遺物**は古墳時代土師器・須恵器細片、黒曜石片が少量出土している。

SK17（Fig.42、PL.16）　SK15の南側で検出した平面形状が隅丸長方形を呈す土坑。規模は長軸長1.15m、短軸長0.9m、最大深さは42cmを測る。底面は中央に向かって深くなり、東から北壁は抉れる。埋土は上層が軟質な黒褐色土、下層が褐色ローム土で締まらない。**出土遺物**は古墳時代土師器・須恵器細片、黒曜石片が少量出土している。

SK20（Fig.43、PL.17）　SK34を切る平面形状が不整楕円形を呈する土坑。規模は長軸長0.94m、短軸長0.74m、最大深さ16cmを測る。南側がテラス状になる。埋土は黒褐色粘質土で底には地山ローム土を混入するが、余り締まらない。**出土遺物**は古墳時代土師器、黒曜石細片が少量出土している。

SK23（Fig.43、PL.17）　SD01底面で検出した平面形状が不定形を呈す土坑。規模は長軸長1.47m、短軸長1.16m、最大深さは95cmを測る。埋土は粘性が強い黒褐色粘質土や明黄褐色地山ロームブロックで、人為的に埋めた感じである。西壁と東壁は抉れており、貯蔵穴かも知れない。

出土遺物（Fig.46・55、PL.19）　弥生時代中期の土器と黒曜石片、石庖丁片などが出土している。17・18は弥生土器。17は甕口縁部細片。中期中頃のもの。表面は磨滅するが、外面はタテハケが残る。18は外反する口縁部細片。調整は不明。17の焼成はやや不良。115は大形の石庖丁片。残存刃部長10.2cm、残存幅4.2cm、厚さ0.3cmを測る。表面の磨滅は著しいがケンマで刃部を研ぎ出す。石材は明灰

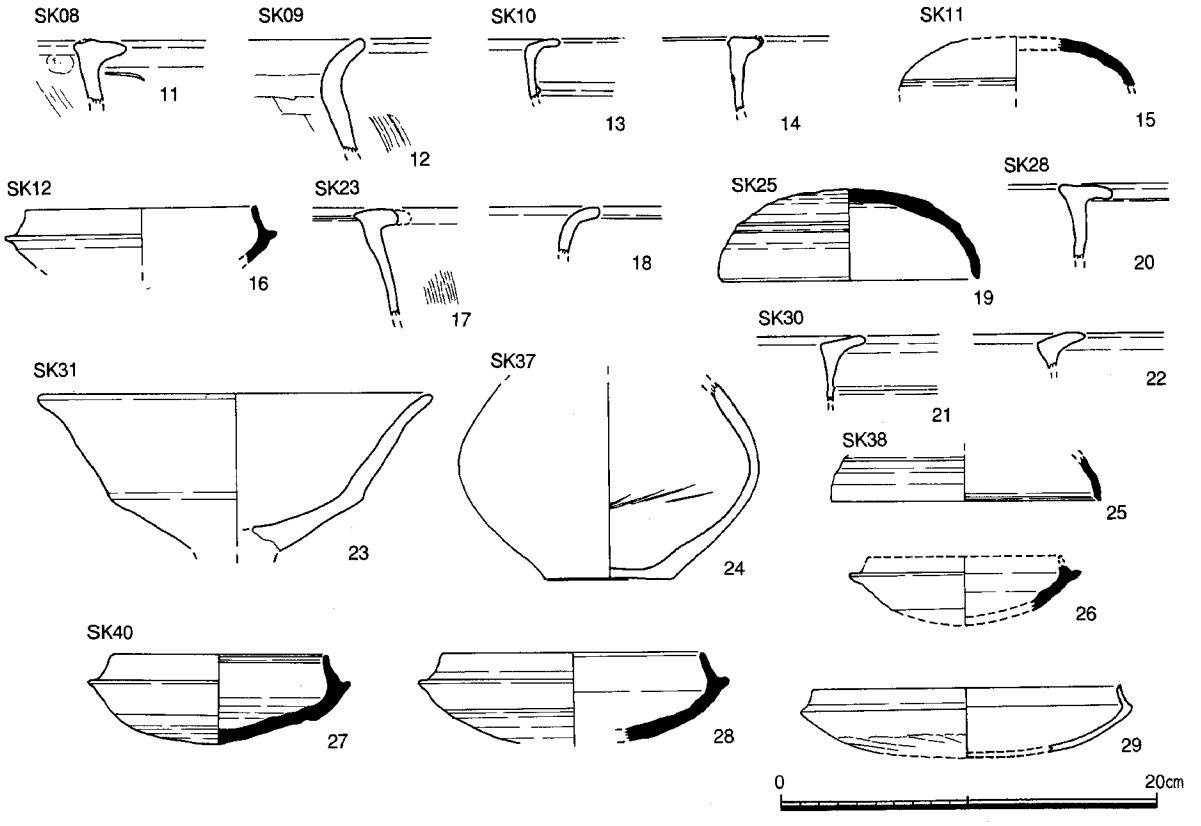


Fig.46　各土坑出土遺物（1/4）

褐色を呈す粘板岩である。

SK24（Fig.43）　調査区西側で検出した平面形状が略円形の土坑。規模は長軸長0.8m、短軸長0.7m、最大深さ20cmを測る。底面東側は浅いピットがある。埋土は明褐色ロームブロックを主体とする。

出土遺物は古墳時代土師器片などが少量出土している。

SK25（Fig.45、PL.17）　調査区北西隅で検出した主軸を略南北方向に取る平面形状が楕円形を呈す土坑。規模は長軸長0.9m、短軸長0.6m、最大深さ20cmを測る。底面北側は浅くテラスとなる。埋土は黄褐色ロームに黒褐色土が混入する。

出土遺物（Fig.46、PL.19）　古墳時代土師器・須恵器片が少量出土している。19は須恵器の坏蓋1/2弱片。復元口径14.0cm、器高は4.9cmを測る。天井部はロクロ回転が時計回りの回転ヘラケズリで、その他は回転ナデ調整。内面には叩き痕が残る。Ⅲｂ期のもの。

SK26（Fig.43、PL.17）　調査区西側SD01の北で検出した平面形状が不定形を呈す土坑。規模は長軸長1.02m、短軸長0.64m、最大深さ22cmを測る。底面中央に浅いピットがある。埋土は黒褐色粘質土である。**出土遺物**は弥生土器や土師器の小片、黒曜石片などが少量出土している。

SK28（Fig.43、PL.17）　調査区中央で検出した平面形状が隅丸長方形を呈する土坑。規模は長軸長2.84m、短軸長2.24m、最大深さ22cmを測る。底面はほぼ平坦で、上面からと思われるピットを検出している。埋土は暗黄褐色ロームブロックと黒褐色粘質土の混合土が主体となる。有田遺跡第48次調査地点で同形態、同規模の住居が検出されており、これも住居の可能性がある。

出土遺物（Fig.46）　弥生土器片や瓦片、黒曜石片が少量出土している。瓦は混入か。20は弥生土器甕口縁部細片。逆Ｌ字形の形態で中期中頃のもの。

SK29（Fig.43）　調査区中央で検出した平面形状が小判形を呈す土坑。規模は長軸長が0.92m、短軸長0.64m、最大深さは18cmを測る。南側が深くなる。断面は箱形を呈す。埋土は黒褐色土を主体とす

る。**出土遺物**は弥生土器から土師器の小片が少量出土している。

SK30（Fig.43）　SK08と09に切られる土坑。規模は長軸長1.16m、短軸長0.82m、最大深さ６㎝を測る。底面は平坦で西隅には径56×54㎝の方形ピットが切り込む。埋土は黒褐色土である。

出土遺物（Fig.46）　弥生時代中期土器片が少量出土している。21・22は弥生時代中期須玖Ⅱ式の鋤先状を呈す甕口縁部小片。いずれも器表面は磨滅し調整は不明。

SK31（Fig.43、PL.17）　調査区中央で検出した平面形状が隅丸長方形を呈す土坑。規模は長軸長0.9m、短軸長0.7m、最大深さは35㎝を測る。底面は平坦で、断面は逆台形を呈する。埋土は上層が黒褐色土、下層は橙色ロームブロックが主体となる。

出土遺物（Fig.46）　弥生土器、古墳時代の土師器、黒曜石片が出土している。23は土師器の高坏坏部1/3片である。復元口径は21.2㎝を測る。底部と体部の境に段が付く。磨滅がひどいが調整はナデか。胎土に石英・長石以外に赤色粒を含む。焼成はやや不良。

SK32（Fig.43、PL.17）　SK31に切られる土坑。平面形状は楕円形状を呈すが、西と南側にピットが切り込み、壁線はややいびつである。規模は長軸長1.45m、短軸長1.02m、最大深さ42㎝を測る。底面は平坦でなく、東側が深くなる。壁面は抉れ湾曲する。埋土は黒褐色粘質土が主体で地山ロームブロックを混入する。**出土遺物**は弥生時代土器から古墳時代土師器・須恵器、黒曜石片が少量出土している。

SK34（Fig.43、PL.17）　SK20とSP52に切られる平面形状が不整円形の土坑。規模は長軸長1.14m、短軸長0.92m、最大深さ30㎝を測る。埋土は褐色土が主体である。**出土遺物**は古墳時代の土師器小片が少量出土している。

SK35（Fig.44、PL.17）　SK38に切られる平面形状が長楕円形を呈す土坑。規模は長軸長1.78m、短軸長1.14m、最大深さ64㎝を測る。底面は中央と北側がピット状に一段深くなる。また北壁は一部抉れる。埋土は暗褐色土が主体で、明黄褐色ロームを間層でブロック状に挟む。**出土遺物**は弥生土器から古墳時代土師器小片、黒曜石片が少量出土している。

SK36（Fig.42、PL.17）　SK12に切られる平面形状が略円形の土坑。規模は長軸長1.40m 以上、短軸長1.32m、最大深さ20㎝を測る。底面はほぼ平坦である。埋土は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土である。

出土遺物は黒曜石片が少量出土している。

SK37（Fig.45）　調査区中央で検出した平面形状が隅丸方形を呈す土坑。規模は長軸長0.73m、短軸長0.56m、最大深さ29㎝を測る。底面は狭く、断面は船底形を呈す。埋土は黒褐色粘質土で橙色ロームブロックを混入する。

出土遺物（Fig.46、PL.19）　24は弥生時代中期の壷の胴底部2/3片。底径6.7㎝、復元胴径16.1㎝を測る。器表面の剥落がひどいがナデか。外面丹塗りで、内面には赤色顔料が部分的に残り、工具痕がかすかに残る。胎土に石英・長石粒を多く含むが、焼成はやや不良。

SK38（Fig.44、PL.17）　SK11に切られる平面形状が楕円形を呈す土坑。規模は長軸長1.46m 以上、短軸長0.86m、最大深さ50㎝を測る。壁面は二段掘りである。埋土は黒褐色土が主体である。

出土遺物（Fig.46）古墳時代土師器・須恵器小片、黒曜石片が少量出土している。25・26は須恵器。25は坏蓋1/8片。復元口径は14.6㎝を測る。口縁端部内面に段を持つⅢａ期のものか。回転ナデ調整である。26はⅣｂ期の須恵器坏身1/8片。復元受け部径12.4㎝を測る。調整は回転ナデ。胎土は精良。

SK39（Fig.43）　SK09に切られる平面形状が円形を呈す土坑。規模は長軸長0.94m、最大深さ52㎝を測る。南側にはテラスがあり、東壁は抉れている。埋土は黒褐色土である。**出土遺物**は古墳時代土師器小片が少量出土している。

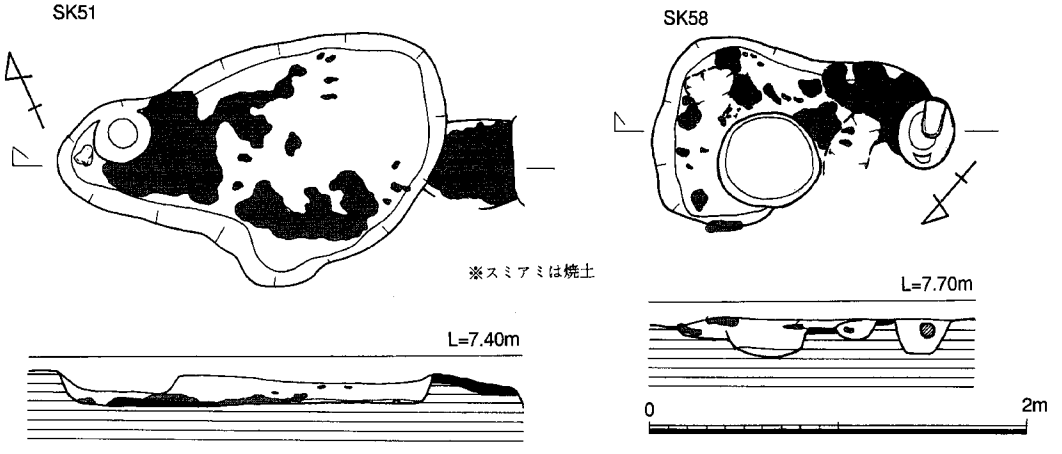


Fig.47　SK51・58（1/40）

SK40（Fig.45、PL.18）　SD01に切られる主軸を南北方向に取る平面形状が楕円形を呈す土坑。長軸長0.92m、短軸長0.64m、最大深さ30cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面は逆台形を呈す。埋土は黒褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.46、PL.19）　古墳時代土師器・須恵器小片、黒曜石片が少量出土している。27・28はⅢｂ期の須恵器坏身。4/5片と1/3片で、口径11.6cm・（復元）14.0cm、受け部径16.0cm・（復元）16.6cm、器高4.8cm・（復元）4.8cmを測る。法量に差はあるが、ほぼ同形態と調整で外底部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデで、27の内底部は不整ナデである。ロクロ回転は時計回りである。28の胎土は精良で、27は外面灰カブリで粘土塊が付着している。29は土師器の坏身1/5片で、復元口径16.6cm、受け部径17.8cm、器高3.7cm を測る。器壁は薄く磨滅するが、外底部は丁寧なヘラケズリ、その他はナデで丹塗り痕が残る。胎土は精良で、焼成はやや不良。

SK41（Fig.44、PL.18）　SD01西側で検出した平面形状が隅丸長方形を呈す土坑。規模は長軸長1.08m、短軸長0.66m、最大深さ20cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面は船底形を呈す。**出土遺物**は弥生時代後期土器片、黒曜石片が少量出土している。

SK43（Fig.44、PL.18）　調査区東隅で検出した平面形状が長方形を呈す土坑。規模は長軸長1.62m、短軸長0.9m、最大深さ32cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面は箱形を呈す。埋土は黒色土と地山ローム土の混合土である。**出土遺物**は弥生土器などの小片、黒曜石片が少量出土している。

SK47（Fig.44、PL.18）　SC46の北側で検出した平面形状が長方形を呈す土坑。規模は長軸長2.55m、短軸長0.7m、最大深さ40cmを測る。底面は南側がやや深くなり、断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色粘質土である。**出土遺物**は弥生時代前期板付式土器を含む土器片と黒曜石片、炭化物が出土している。

④　焼土坑（SK）

SK51（Fig.47、PL.15）　調査区東側で検出した焼土坑。上面での検出時は1.37m ×0.92m の楕円形状であったが、精査した結果、不整な三角形状の平面形となった。規模は長軸長2.08m、短軸長1.30m、最大深さ17cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、北東側を除いてほぼ全面に焼土塊や焼土面が分布し、炭化物も少量含む。この土坑の東側は50×45cmの範囲で地山が厚さ５cm程焼けていた。埋土は暗褐色粘質土であるが、下層には黄褐色ロームブロックと焼土・炭化物を含む。

出土遺物は弥生土器小片が少量と焼土ブロック、炭化物、黒曜石片が少量出土している。

SK58（Fig.47、PL.15）　調査区南東側で検出し、平面形状は丸みを持つ長方形を呈す。規模は長軸長1.48m、短軸長1.03m、最大深さは10cmを測る。所々ピットや撹乱が入り、残りは悪い。南側を中心に炭化物を交えた焼土面がある。焼土面は厚さ３cmほど焼けている。**出土遺物**はない。

⑤　溝状遺構（SD）

SD01（Fig.48、PL.12）　調査区北側、東西方向から東南側へ「く」字状に曲がって延びる溝である。この溝は南側の第59次調査区のSD05に繋がるものと思われる。この溝は南端でSD53に切られる。規模は幅1.1～2.7m、深さ20～60cmを測る。北西端は削平によるのか幅は0.5m と狭く、溝底は北側が深くなる。溝内は東南方向では西側、東西方向では北側にテラスを持つ。北側土層断面ではＶ字状の掘り直しが認めらる。溝埋土は暗褐色粘質土から褐色粘質土が主体で、橙色から灰白色ロームブロックを混入するが、全体に粘性は強いが軟弱である。

出土遺物（Fig.49・55、PL.19）　溝の規模の割には出土量は少ないが、弥生土器から古墳時代土師器・須恵器、中世土師器・土師質土器・瓦質土器・中国産白磁・青磁・国産陶器、焼土ブロック、鉄滓、黒曜石片などが出土している。

30～32は土師器。30・31は皿片。30・31は1/6片。30は復元口径は9.2cm、復元底径7.4cm、器高1.1cmを測る。31は復元口径10.0cm、底径9.0cm、器高1.4cmを測る。いずれも磨滅がひどいが、回転糸切りか。32は坏口縁部1/12片。復元口径12.2cm、器高3.2cmを測る。底部は磨滅がひどいが回転糸切り痕が残る。33・34は白磁。33は碗底部片で、復元底径6.1cmを測る。高台部は削り出しで露胎、畳付きは擦ってい

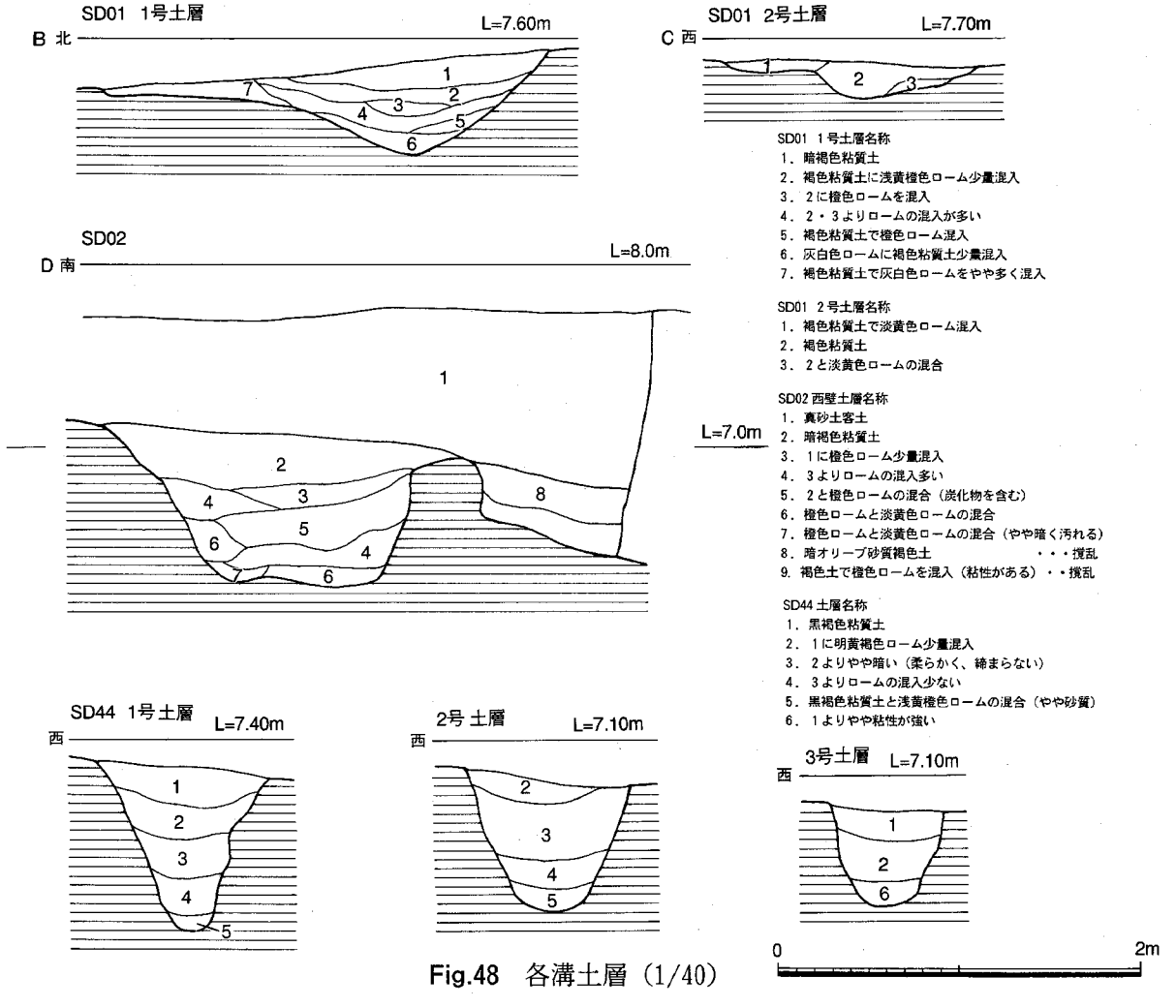


Fig.48　各溝土層（1/40）

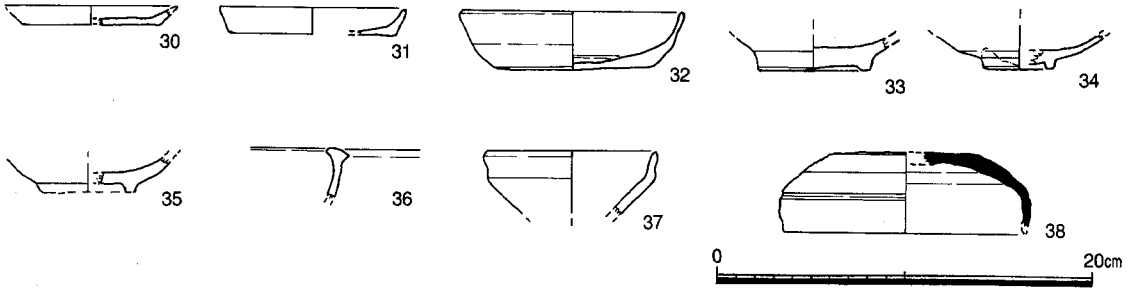


Fig.49　SD01出土遺物（1/4）

る。内底見込みは乳白色釉がかかり、体部との境に段を有す。粘土塊が付着し、重ね焼きの痕跡と思われる。34は皿底部1/4片で、復元底径3.8cmを測る。底部はケズリで露胎。内面にかけて乳白色釉がかかる。35～37陶器。35は碗底部1/4片で、復元底径5.2cmを測る。高台部を欠損するが、全面に厚めの乳白色釉がかかる。胎土は黒灰色で精良である。36は黒色の天目釉が厚めかかる口縁部細片。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁断面は三角形を呈す。37は瀬戸天目の口縁部1/10片。復元口径9.0cmを測る。胎土は黄白色で精良である。38は須恵器の坏蓋1/3片である。復元口径13.0cmを測る。天井部は平坦で回転ヘラケズリ、その他は回転ナデで口縁部との境に段を有す。天井内面には同心円状の当て具痕が残る。６世紀前半代のものか。116は砂岩製の石庖丁の破片か。表面は風化が著しい。117・118は滑石製石鍋の口縁部片。118は口縁部下に鍔が付く。調整は工具によるケズリ。117は転用されている。119は砂岩製の扁平な砥石。残存長13.2cm、厚さ1.3cmを測る。目が細かく、中砥石又は仕上げ砥石か。

SD02（Fig.48、PL.15）　調査区北西端で検出した断面が逆台形を呈する溝。長さ３m分を検出しただけである。規模は幅1.5m、深さ80cmを測る。埋土は暗褐色粘質土が主体で、地山ロームブロックを混入する。

出土遺物（Fig.56、PL.20）　弥生土器から古墳時代土師器・須恵器、中世の土師器・瓦質土器片などが出土している。132は黒曜石石鏃で、残存鏃長2.2cm、厚さ0.3cmを測る。

SD04～06（Fig.37）　調査区北西側で検出した浅い小溝。埋土は暗褐色土などで、中世の土師器などの細片が少量出土している。

SD44（Fig,48、PL.15）　調査区東側北西から南東方向に台地の周縁に沿って延びる溝である。溝の規模は幅0.6m～１m、深さ55～95cmを測り、幅の割に深く、断面形態としては逆台形を呈す。埋土はほぼ水平堆積で、黒褐色粘質土を主体とし、黄褐色の地山ロームブロックを混入する。埋土の粘性は下層に近い程強くなる。溝の時期は出土遺物から古墳時代後期と思われるが、この時期の溝は本遺跡では余り検出されていない。

出土遺物（Fig.50～52・55・56、PL.19・20）　弥生土器から古墳時代土師器・須恵器、黒曜石片などが出土している。出土量は多い。須恵器はⅡｂ期～Ⅲｂ期の６世紀代のものである。

39～58は須恵器。39～46は坏蓋。39はⅢｂ期の坏蓋1/3片で、復元口径は12.8cm、器高3.1cmを測る。天井部は回転ヘラケズリである。40～44はⅢａ期の形態。ほぼ同形態でいずれも天井部と口縁部の境に沈線と段を有し、口縁端部内面に軽い段を有す。40・41は1/2片。復元口径は13.3cm・13.6cm、器高は4.5cm・4.9cmを測る。天井部は回転ヘラケズリで、その他は回転ナデ調整である。ロクロ回転は時計回りである。焼成は40がやや不良である。41の天井部にはヘラ記号がある。42は1/2弱片で、復元口径15.8cm、器高は4.0cmを測る。天井部外面は回転ヘラケズリで、その他はナデ調整。外面自然釉が

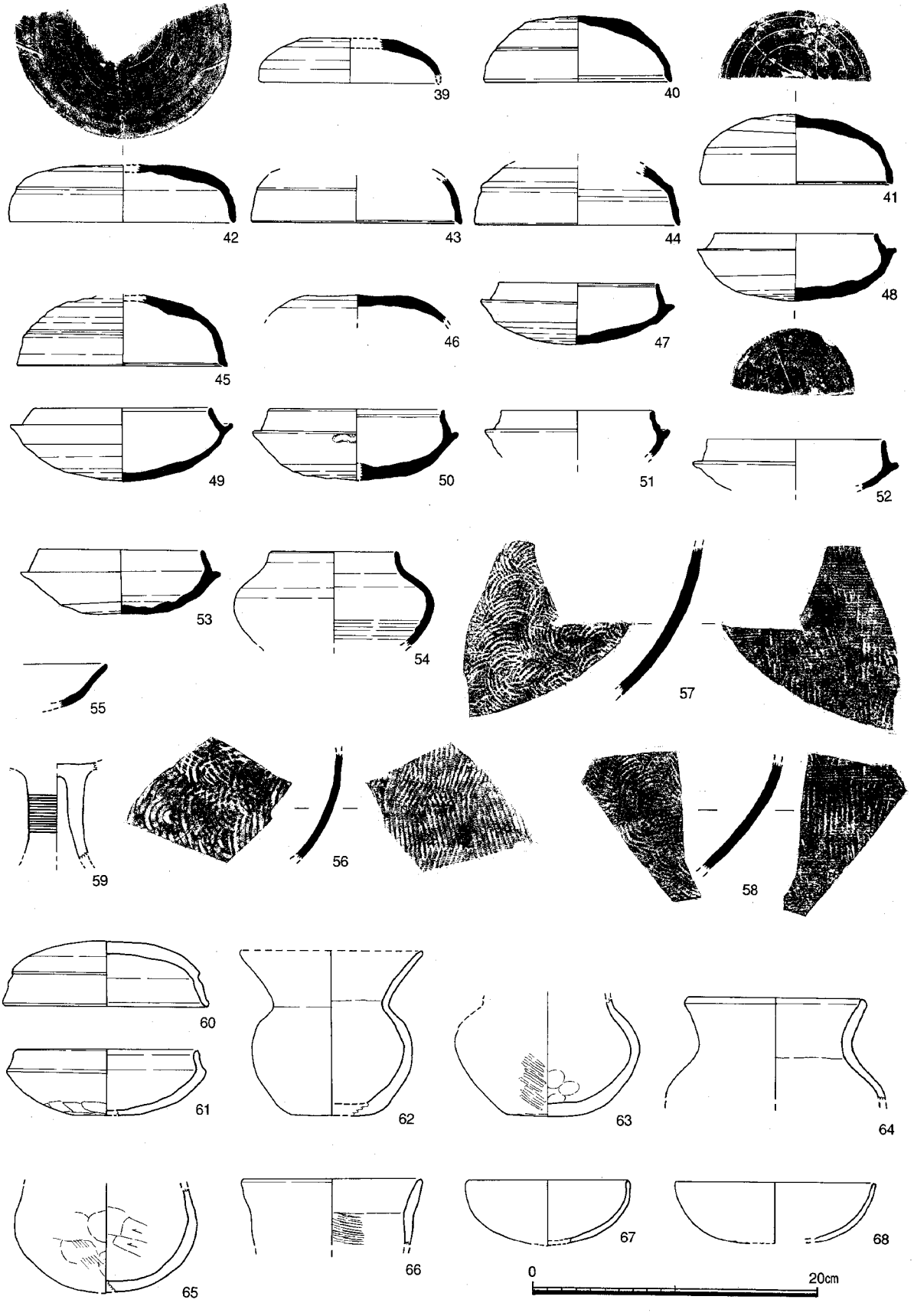


Fig.50　SD44出土遺物Ⅰ（1/4）

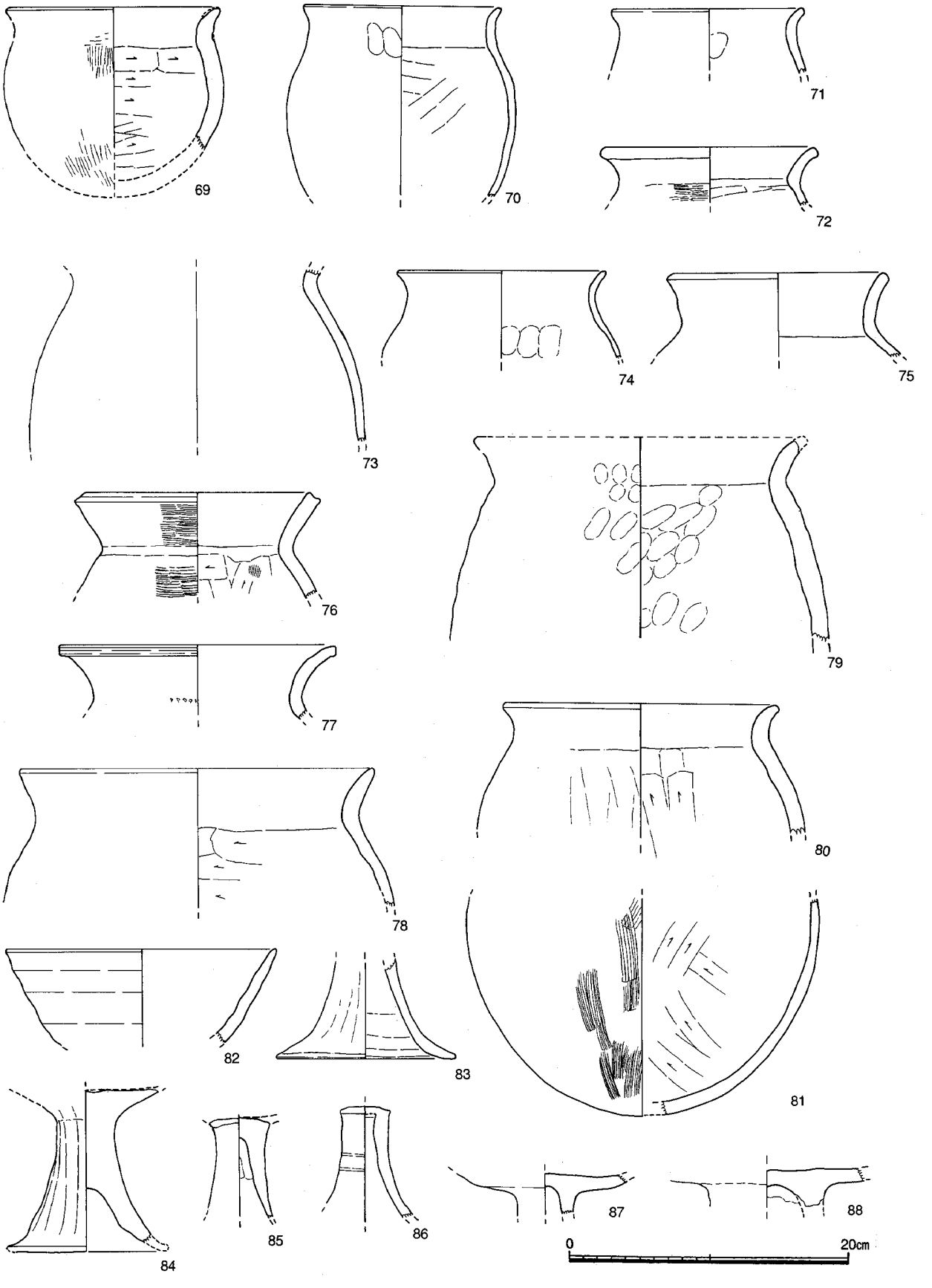


Fig.51　SD44出土遺物Ⅱ（1/4）

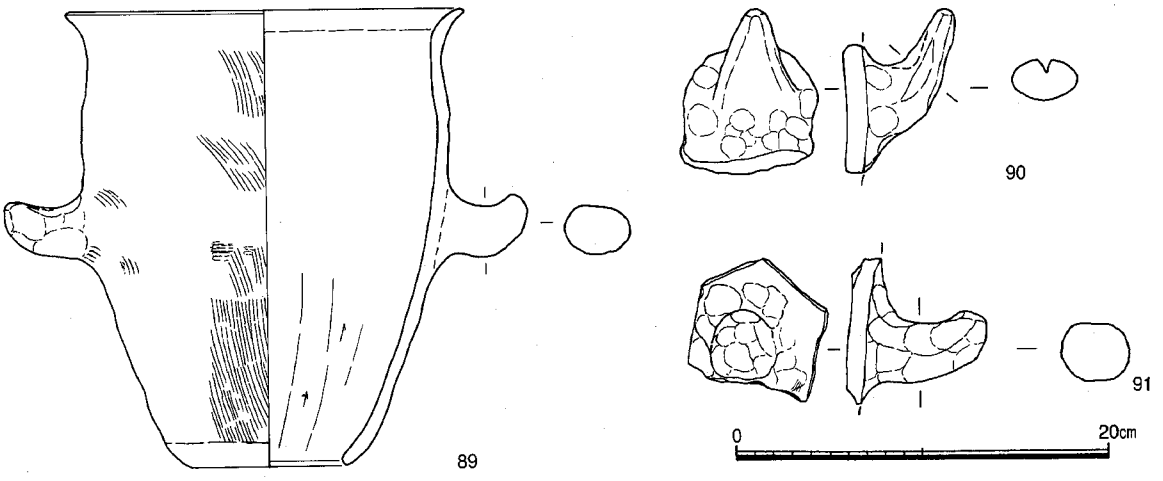


Fig.52　SD44出土遺物Ⅲ（1/4）

かかり、ヘラ記号が入る。43は1/6片で、復元口径15.0cmを測る。回転ナデ調整である。44は1/6片で、復元口径14.4cmを測る。45はやや古相でⅡｂ期頃か。1/2片で、復元口径は14.8cm、器高4.9cmを測る。天井部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ、内底部は不整ナデ調整。46は天井部1/2片。全体に自然釉がかかるが、作りは雑である。47～53は坏身。いずれも外底部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整である。47は3/4片でややいびつ。口径11.1cm、受け部径13.7cm、器高4.4cmを測る。内底部は同心円状の当て具痕が残る。外面自然釉がかかり、ロクロ回転は時計回り。48は1/2片でややいびつ。復元口径11.4cm、受け部径14.0cm、器高4.9cmを測る。器壁は一部剥落し、受け部に蓋をかぶせて焼いた痕跡が残る。底部にヘラ記号が入る。ロクロ回転は逆時計回り。49は1/3片で、復元口径12.5cm、受け部径15.6cm、器高5.2cmを測る。外面自然釉がかかる。50は1/4片で、復元口径12.4cm、受け部径14.6cm、器高5.0cmを測る。口縁端部内面はやや段を残す。外面磨滅がひどいが、焼き膨れがある。内底部には同心円状の叩き痕が残る。受け部下に重ね焼き痕がある。51は1/6片で、復元口径10.7cm、受け部径13.2cmを測る。52は1/3片。復元口径12.5cm、受け部径14.6cmを測る。53は2/3片で、復元口径11.4cm、受け部径13.9cm、器高4.6cmを測る。胎土に黒色粒子を含み、焼成はやや不良。ロクロ回転は逆時計回りである。54は坩口縁部1/3片。復元口径9.0cmを測る。外面回転ナデ調整で自然釉がかかり、内面は工具によるナデか凹凸が激しい。55は高坏口縁部細片。焼成は不良で、色調は灰白色を呈す。56～58は甕体部片。いずれも外面は木目直交の平行叩き調整、内面は同心円状の当て具痕が残る。57・58は同一個体か。

59～89は土師器。59～61は須恵器の形態を模倣したもの。59は高坏脚部片。外面カキ目である。60・61は坏蓋と身のセット関係にある。60は2/3片、61は1/2片。復元口径は14.4cm・12.8cm、受け部径は14.0cm、器高はいずれも4.6cmを測る。60の天井部内外はヘラ磨き、61はナデ調整で外底部は静止ヘラケズリ。62～64は小型壷。62は1/2片。復元口径は約13cm、器高は11.6cmを測る。器表面は磨滅し調整は不明。体部下半はケズリか。胎土は精良、焼成はやや不良。63は胴底部片。最大胴径12.9cmを測る。外面磨滅するが叩きのような痕跡と内面指オサエ痕が残る。64は1/4片で、復元口径は13.0cmを測る。口縁部端部は内面に屈折する。磨滅がひどく調整は不明。焼成はやや不良。65は丸底の坩か鉢の胴底部片。復元最大胴径12.8cmを測る。外面指オサエ痕とハケが残る。内面ヘラケズリ調整。66は鉢か坩で口縁部が僅かに開く1/4片。復元口径は12.8cmを測る。ナデ調整で、体部内面には粗いヨコハケ。色調はにぶい橙色で、二次加熱を受け器表は剥落する。67・68は埦形の鉢。いずれも1/4片で、復元

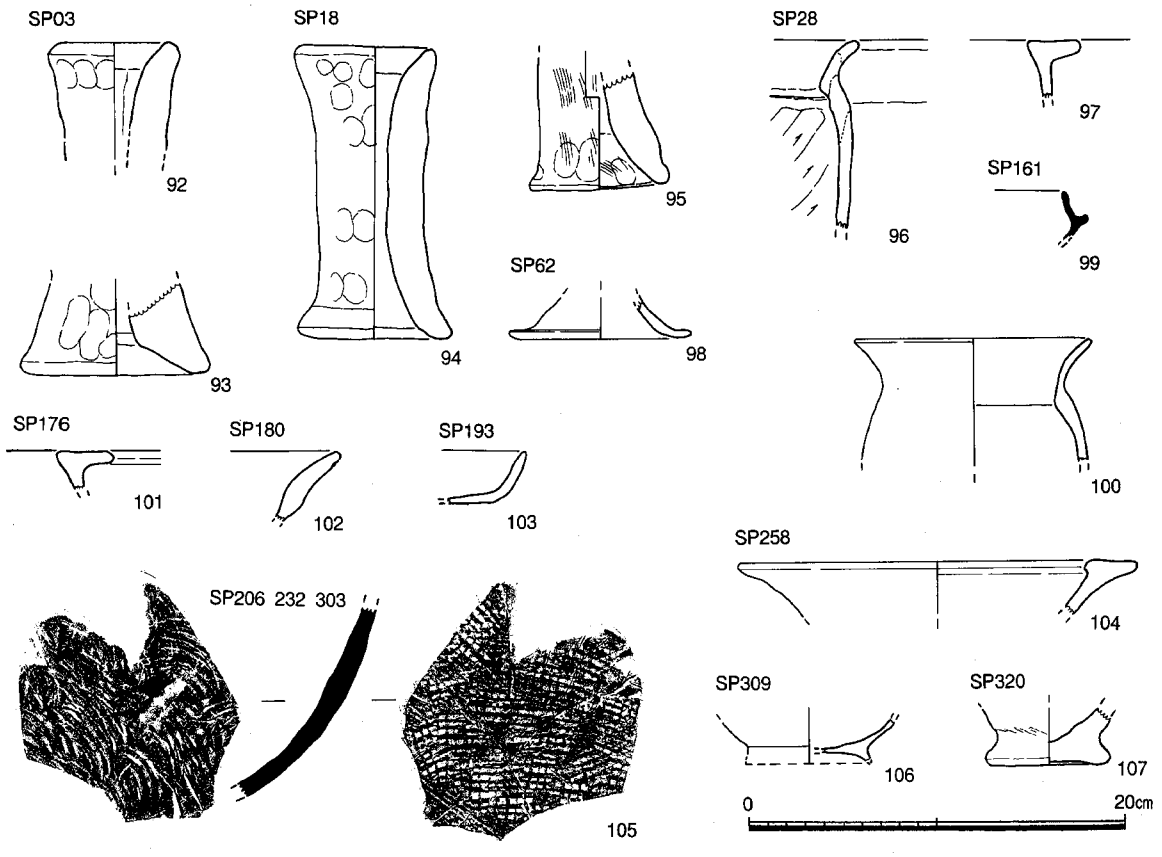


Fig.53　ピット出土遺物（1/4）

口径は11.6cm・14.2cm、器高は4.6cm・4.3cmを測る。器表面は磨滅がひどいが、68は丹塗り痕が残り、胎土は精良。69～81は甕。69～71は口縁が短く外反する甕。69は1/4片で復元口径15.6cmを測る。器壁は厚手で、外面ハケとナデ、内面ヘラケズリとナデ調整。焼成はやや不良。70は1/2片で復元口径14.4cmを測る。外面ナデ、内面ナデとヘラケズリ調整。頸部に指オサエ痕が残る。外面は二次加熱を受け赤褐色を呈す。71は1/6片で復元口径14.0cmを測る。内面にかすかに指オサエ痕が残るが、磨滅がひどく調整は不明。72は口縁部は「く」字状に外折する。外面ナデとハケ、内面はナデとヘラケズリ調整。73は胴部1/6片。外面縦方向の木目直交の叩き、内面はナデ調整。74は1/3片で復元口径15.2cmを測る。表面は磨滅するが、ナデで内面指オサエ痕が残る。外面は二次加熱を受け赤褐色を呈す。75は1/2弱片で復元口径16.0cmを測る。表面は磨滅するが、外面はナデ、胴部内面はケズリか。胎土は精良、金雲母を含む。76は1/6片で復元口径は17.8cmを測る。口縁端部は平坦でやや窪む。外面の口縁部はハケで胴部は平行叩き、内面胴部はヘラケズリ後ナデ。77は1/3片で復元口径20.0cmを測る。表面の磨滅はひどく調整は不明だが、外面頸部に工具痕が残る。78は1/6片で復元口径は25.7cmを測る。外面から口縁部内面はナデ、胴部内面はナデヘラケズリである。79・80は口縁が短く外反する胴頸部片で器壁は厚手。79は復元口径は約24cm。内外面ナデ調整で指オサエ痕が残る。頸部内面には煤が付着する。80は1/6片で復元口径は20.0cmを測る。胴部外面は板ナデ、内面はヘラケズリ。81は丸底の胴底部片。外面ハケ後ナデ、内面ヘラケズリ調整。外面には煤が付着する。79～81の胎土は粗砂を多く含む。82は高坏坏部1/4片。復元口径19.5cmを測る。内外面はナデ調整。須恵器を模倣した形態か。83～86は高坏脚部。83は1/2片で裾が外に開く形態。復元脚端径13.0cmを測る。外面ヘラナデで所々丹塗り痕がある。内面ケズリ後ナデ調整。84は復元脚端径11.6cmを測る。器壁が厚手で重く締まる。脚部外面

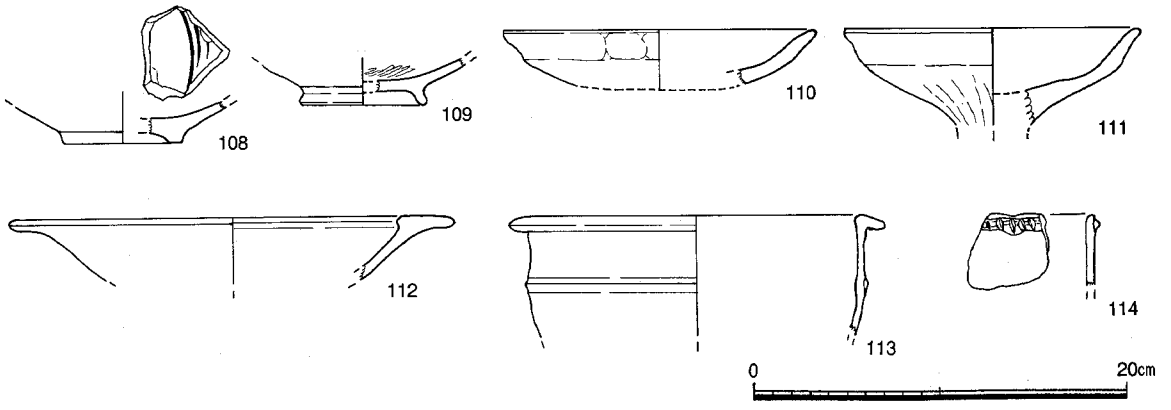


Fig.54　包含層・その他の出土遺物（1/4）

はヘラケズリ、内面はナデ調整。85・86は細身の脚筒部片。85の表面は磨滅し調整は不明。86は外面２条の沈線が巡る。内外面ナデ調整。須恵器形態を模倣したものか。87・88は高坏脚部片。87は内面はナデ、外面はケズリ。88は大型の脚部片で、坏内面はヘラ磨き後ナデ、外面はナデで、筒部内面は雑なナデで粘土接合痕が残る。83～86の胎土は精良、86には赤色粒子を含む。89は甑1/2片。復元口径21.4cm、器高24.7cm、底径7.8cmを測る。両側に一対の把手が付く。外面ハケ後ナデ、かすかに叩き痕が残る。内面はヘラケズリ後ナデ調整。把手は指オサエ仕上げ。90・91は把手。90は牛角状を呈し、断面は楕円形を呈し、上面には切り込みがある。いずれも指オサエ仕上げである。

120は花崗岩の叩き石。全長8.7cm、最大幅6.7cm、厚さ3.3cmを測る。各側面は雑な叩き調整で、上面に使用痕が残る。121は全面が擦られた玄武岩製の楕円形の丸石。4.5×3.4cm、厚さ1.5cmを測る。146は黒曜石で二次調整がある剥片である。縦長1.6cm、横長2.1cm、厚さ0.2cmを測る。

42・47・55・56・61・65・66・70・71・84・87・91・120は 上 層、39・40・41・43・44・48～50・57・60・64・67～69・72・73・88～90・121・146は 中 層、45・46・51・62・63・74～76・78～80・82・91は下層出土である。

SD53（Fig.56、PL.15）　調査区南東壁で検出した浅い溝。幅1.4m以上、深さ15cmを測る。埋土は褐色土である。137は SD53出土。菱形を呈する石鏃。扁平な剥片を利用して上下両面をケンマ、側縁を二次調整している。残存鏃長4.0cm、厚さ0.3cmを測る。

⑥　ピット（SP）出土遺物（Fig.45・53・55・56、PL.18・20）

東側斜面上を中心に多数のピットを検出した。番号を付したもので341基を数える。埋土が灰褐色・褐色・暗褐色・黒褐色・黒色土と地山ロームブロックを主体にする６種類に分類出来る。

92・93は **SP03**出土。弥生時代後期の器台である。92は口縁部1/3片で、復元口径は7.0cmを測る。93は底部1/3片で、復元底径10.2cmを測る。いずれも器表面はナデ調整で、指オサエ痕が外面に残る。胎土に赤色粒子や石英粗粒を多く含む。

SP18（Fig.45・53・55・56、PL.18・20）　不整円形の大型ピットで規模は長軸長64cm、短軸長53cm、深さ38cmを測り、底面の東隅には径20cm、深さ20cmの円形ピットがある。底面には根石代わりに使われたと思われる器台があった。埋土は黒褐色土である。94は中空の復元完形の器台である。口径は7.6cm、底径は8.4cm、器高は15.7cmを測る。外面はナデ調整で指オサエ痕が残る。内面はナデでシボリ痕が残る。95は鳶口の支脚底部片。復元底径7.5cmを測る。外面粗いハケ後ナデで、指オサエ痕が残る。内面もハケ後ナデで、シボリ痕が残る。

SP28（Fig.45・53、PL.18）　調査区中央 SD01に切られる平面形が不整円形を呈す大型ピット。壁上

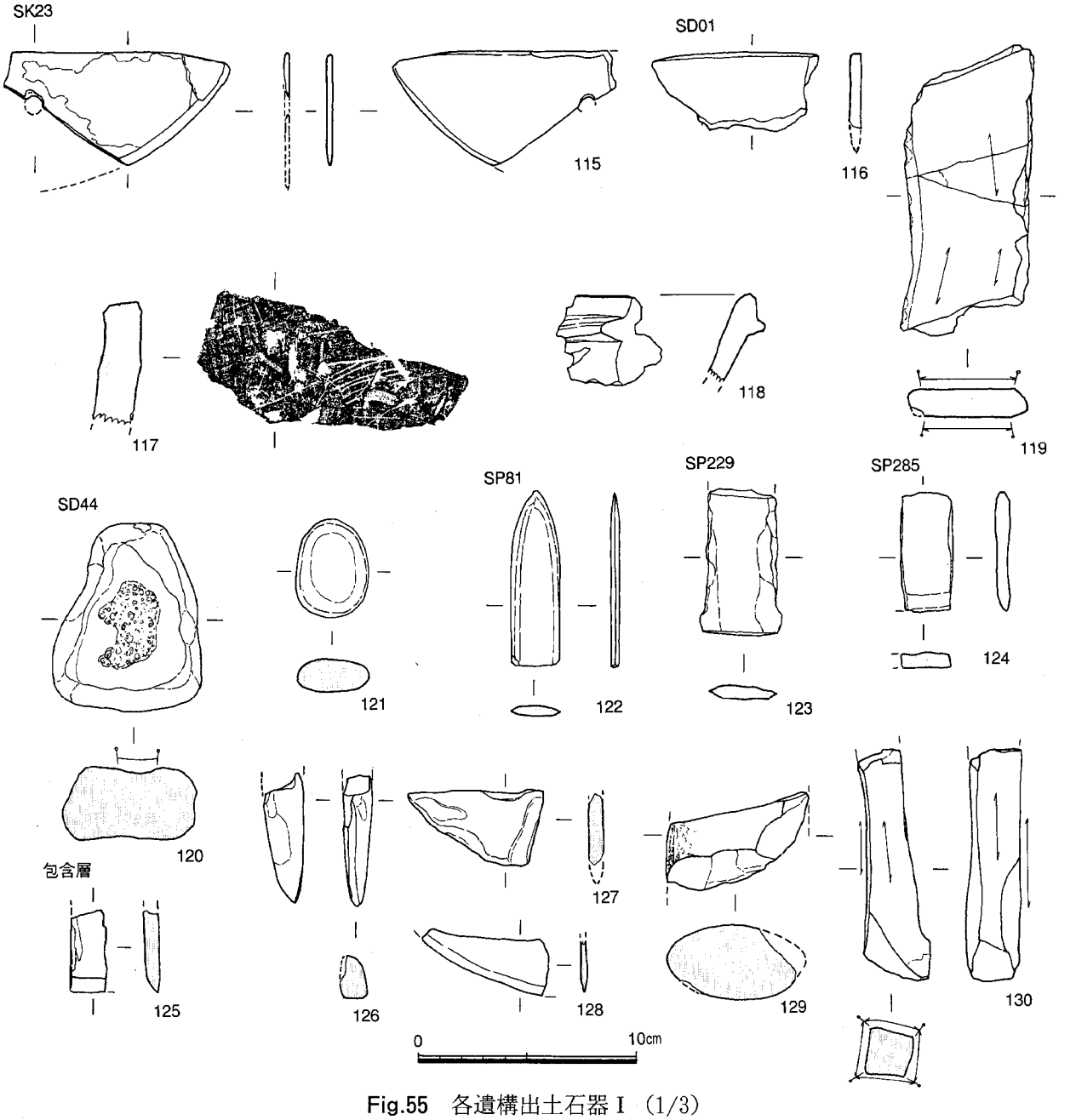


Fig.55　各遺構出土石器Ⅰ（1/3）

端は壁面が抉れているため崩落している。規模は長軸長70cm、短軸長65cm、深さ42cmを測る。底面は中央が僅かに深くなり、径25cm、深さ10cmを測る円形ピットがある。埋土は暗褐色土を主体とする。96は土師器。口縁が「く」字状に外反する甕の口縁から胴部小片。器表面は磨滅がひどいが、胴部内面はヘラケズリ調整である。

97は **SP56**か**58**出土。弥生時代中期中頃の甕口縁部細片。磨滅がひどく調整は不明。胎土に粗砂粒以外に赤色粒子を含む。98は **SP62**出土。土師器の脚部小片。口径9.8cmを測る。脚端部が外反する形態で、器表面の磨滅剥落がひどいが、指オサエ痕が外面に残る。99・100は **SP161**出土。99は須恵器坏身1/12片で、表面調整は回転ナデ、胎土は精良である。100は土師器の小型甕口縁部1/6片。復元口径12.8cmを測る。全体に磨滅がひどく調整は不明。101は **SP176**出土。弥生土器甕で鋤先状を呈す口縁部細片である。102は **SP180**出土。弥生土器の壷口縁部細片。口縁部が肥厚する前期の形態である。103は **SP193**出土。中世土師器の坏細片である。外底部は回転糸切り、その他は回転ナデである。胎

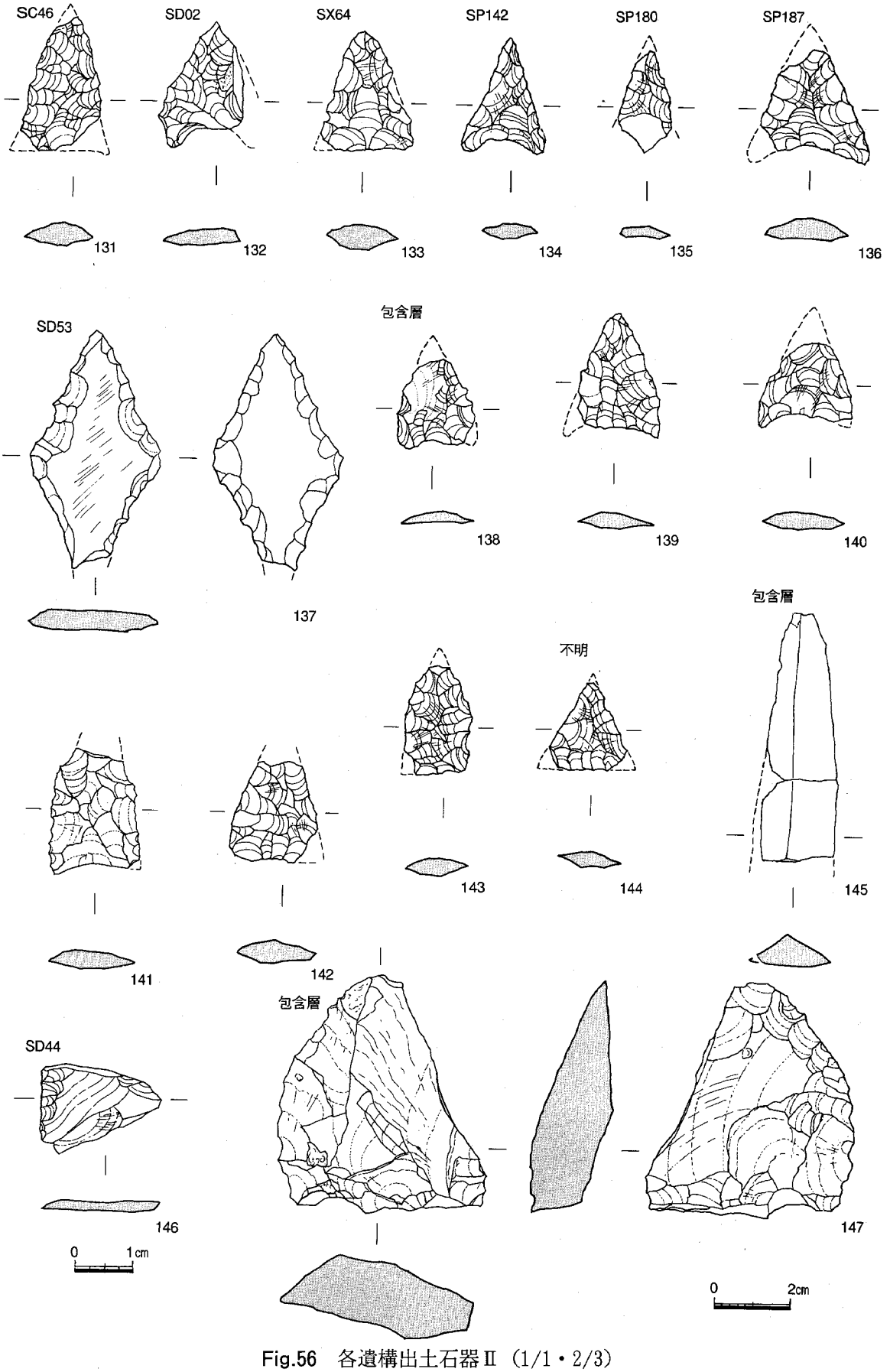


Fig.56　各遺構出土石器Ⅱ（1/1・2/3）

土は精良で、赤色粒子を含む。104は **SP258**出土。弥生時代中期の弥生土器の壷口縁部小片。復元口径は25.5cmを測る。器表面の磨滅はひどいが、ナデ調整か。胎土は精良である。105は **SP203・206・232・303**出土。須恵器の甕胴底部細片。外面は格子目叩きで下部にカキ目状の沈線が数条巡り、内面は同心円状の当て具痕が残る。胎土は精良である。106は **SP309**出土。高台が付く土師器埦底部1/3片。復元高台径6.8cmを測る。全体に磨滅がひどく調整は不明。胎土は精良、赤色粒子を含む。107は **SP320**出土。夜臼式土器甕底部1/2片。復元底径6.8cmを測る。底部は円盤貼り付けで、表面はやや磨滅するが、ナデ調整である。122は **SP81**出土の小型の磨製石剣。全長7.9cm、幅2.3cm、厚さ0.4cmを測る。石材は砂岩で表面は剥落している。123は **SP229**出土。石剣の未製品か。残存長6.7cm、最大幅3.3cmを測る。欠損磨滅がひどい。124は **SP285**出土の扁平片刃石斧で残存長5.5cm、厚さ0.7cmを測る。粘板岩製で風化が著しい。133～136は黒曜石の石鏃。133は **SX64**出土。凹基で、先端と基部を欠するが残存鏃長2.0cm、厚さ0.35cmを測る。134は **SP142**出土のほぼ完形。鏃長2.0cm、厚さ0.3cmを測る。135は **SP180**出土。先端部片。136は **SP187**出土。凹基で先端と基部を欠損する。残存鏃長1.9cm、厚さ0.35cmを測る。

⑦　**包含層出土遺物**（Fig.54～56、PL.20）

108は中国産白磁碗底部1/4片。復元高台径6.4cmを測る。見込みに櫛描き文が入る。焼成は不良で、釉の剥離が著しい。109は黒色土器埦底部1/2弱片。復元高台径は6.8cmを測る。外面ナデ、内面ヘラ磨き調整。110は土師器の丸底の坏か盤の1/6片。復元口径17.0cmを測る。摩滅がひどいが外面指オサエ痕が残る。焼成はやや不良。111は土師器の高坏2/3片。口径は16.2cmを測る。坏部外面は縦のヘラナデ。112・113は弥生時代中期須玖式の土器。112は鋤先状口縁の高坏1/8片。復元口径は24cmを測る。113は甕の1/6片。復元口径20.4cmを測る。胴部に１条の三角突帯が巡る。114は夜臼式土器の甕口縁部小片。口唇部直下に刻目突帯が付く。112・113・114とも摩滅がひどく調整不明。113・114以外の胎土は精良。125は扁平片刃石斧で、残存長3.7cmを測る。頁岩製である。126は小型の柱状片刃石斧片。残存長6.0cm、厚さ1.8cmを測る。石材はサヌカイトか。127・128は石庖丁片か。127は未製品か。石材はいずれも砂岩。129は玄武岩製の磨製石斧片。130は長方形の砥石片。残存長10.6cmを測る。４面が砥面で、石材は粘板岩で、仕上砥石である。138～144は石鏃。138～140は黒曜石製。138は平基で残存鏃長1.5cm、厚さ0.2cmを測る。139は残存鏃長2.1cm、厚さ0.3cmを測る。140はやや凹基で、先端と基部を欠損する。残存鏃長1.5cm、厚さ0.25cmを測る。141は平基で先端を欠損する。残存鏃長2.1cm、厚さ0.25cmを測る。石材はサヌカイトか。142～144は黒曜石製で基部と先端部を欠損する。142は残存鏃長1.8cm、厚さ0.4cmを測る。143は残存鏃長1.9cm、厚さ0.25cmを測る。144は三角形を呈し、残存鏃長1.5cm、厚さ0.2cmを測る。145は柳葉形を呈する剥片で断面は三角形を呈する。全長4.3cm、厚さ0.5cmを測る。風化がひどく二次調整は不明。石材はサヌカイトか。147はサヌカイトの大型剥片を利用したスクレーパーか。縦長6.0cm、最大幅5.4cmを測る。左側辺が刃部となる。110・111が試掘トレンチ出土、126・130・141～143・145・147は包含層下層で、他は包含層上層出土。144は出土地不明。

３）　小結

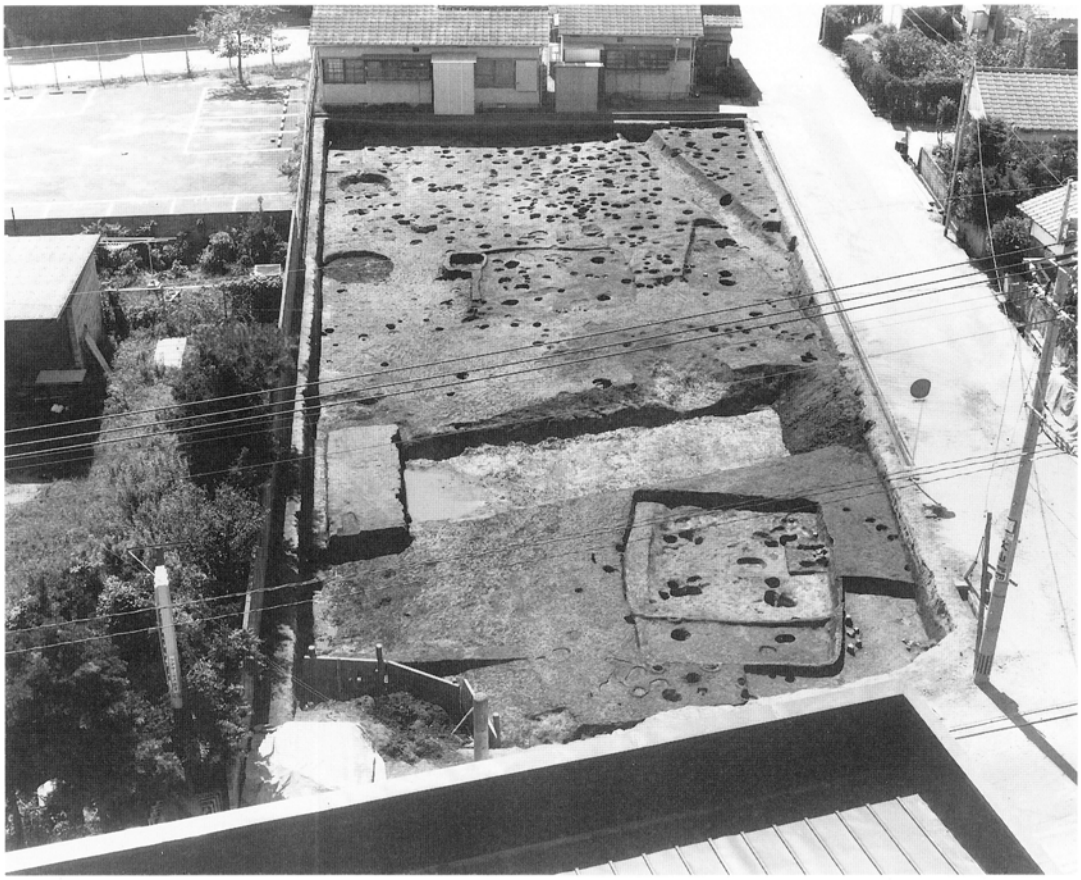
調査区での遺構の時期は弥生時代から中世末・近世初めにかけてである。弥生時代の遺構は竪穴住居跡 SC45・46・48・52、SK08・23・28・30、SP18などである。床面出土の明瞭な遺物はないが、SC48・52が弥生時代中期頃であろうか。SP18は中期末から後期前半頃か。古墳時代の遺構は SD44、SC55、SK38・40などがある。時期的には６世紀代であろう。SD44は小田編年のⅡｂ期からⅢｂ期頃の遺物が出ており、６世紀中頃から後半にかけてである。各建物は出土遺物は少ないが、須恵器片が少量出ており、古墳時代後期までの時期であろう。中世・近世の時期は SD01・02がある。SD01は第59次から続く溝で、屋敷などを区画する溝であろう。

図　版（PLATE）

第150次調査作業風景

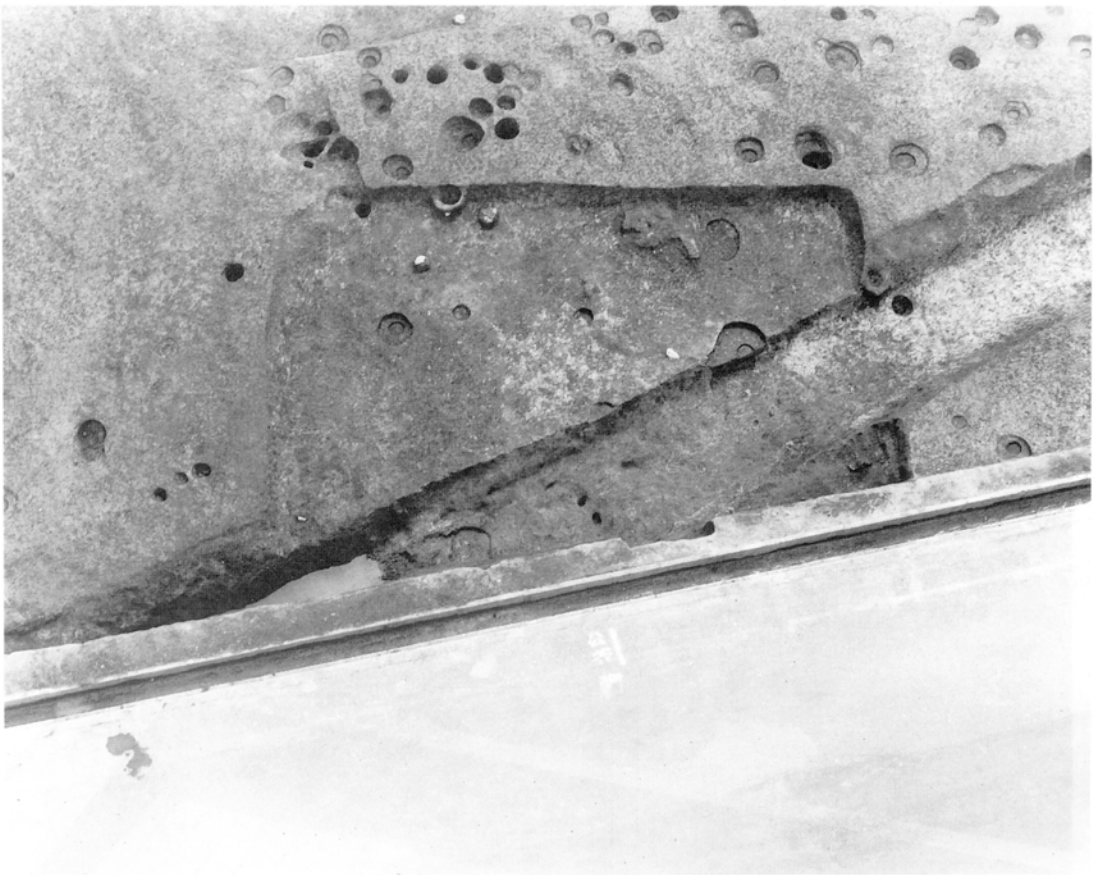
PL. 1　有田遺跡群周辺航空写真（1961年撮影）

PL. 2　有田遺跡群周辺航空写真（1972年撮影）



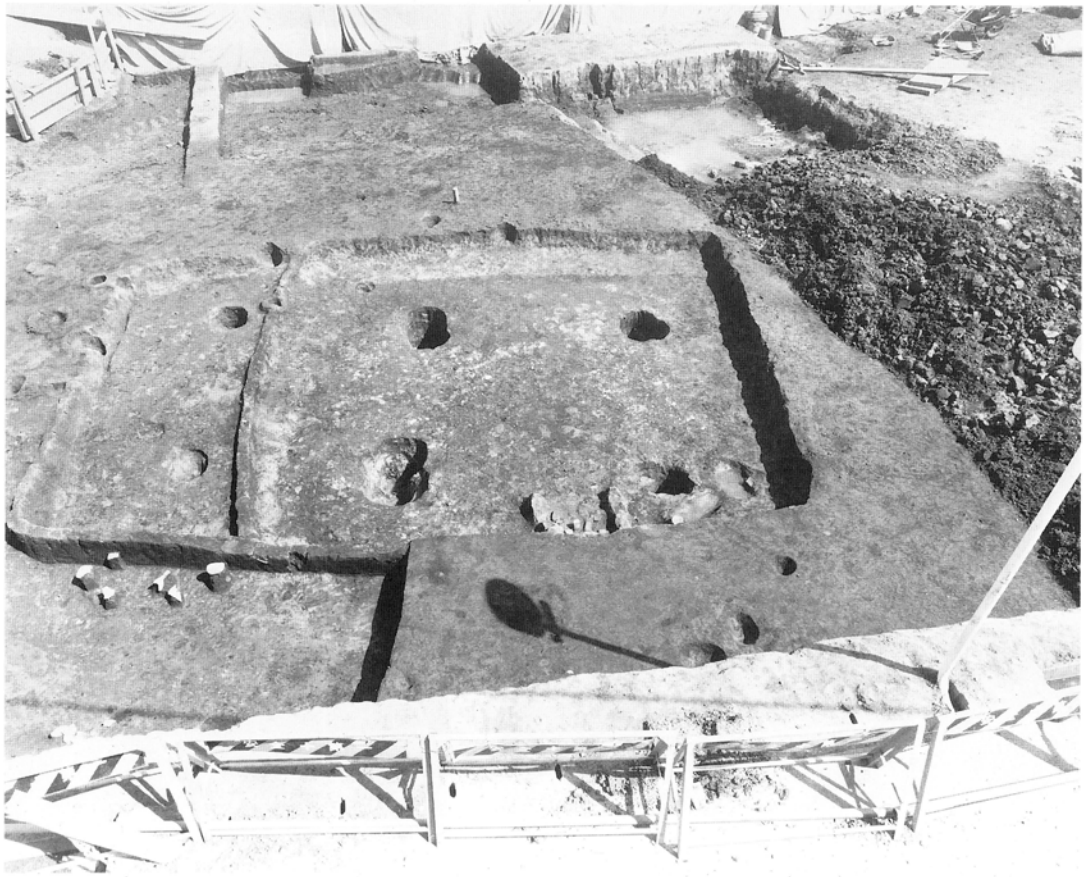
(1)調査区全景（北から）

(2)調査区南側と SD01（北から）



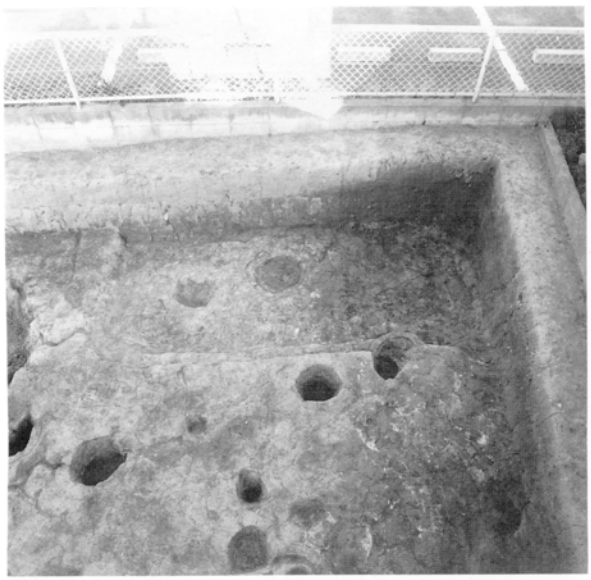
(1) SC01（西から）

(2) SC02（南から）

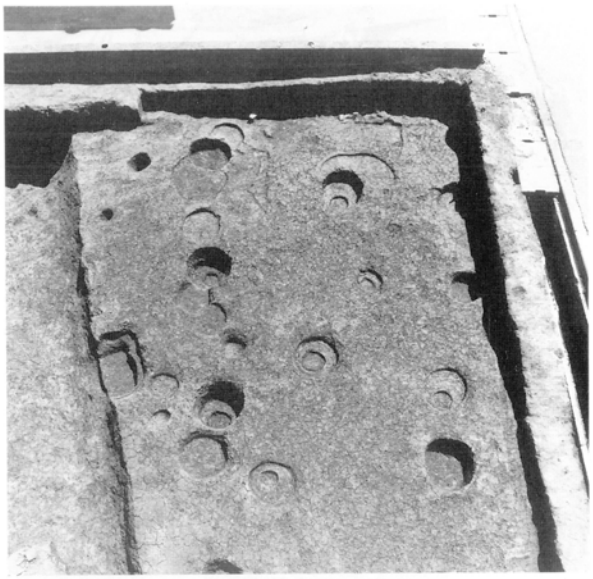


(1) SC05・07（西から）

(2) SC05～08（東から）

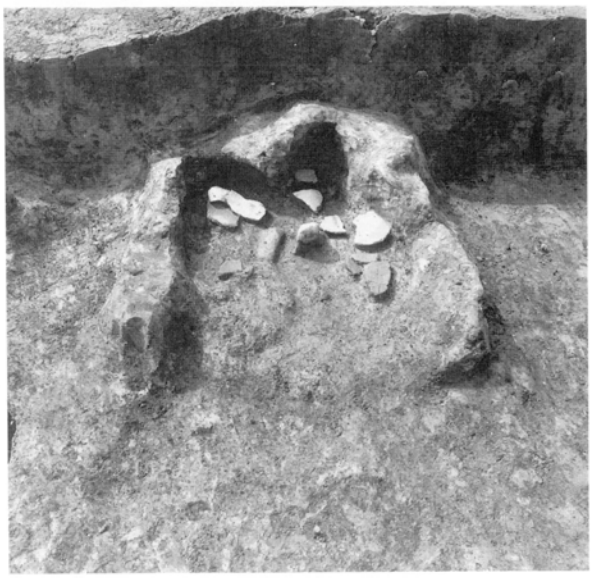


(1) SC03（西から）

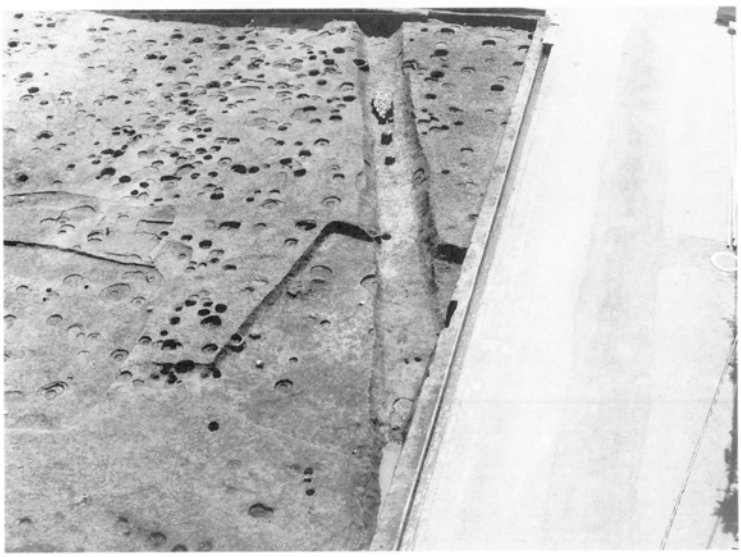


(2) SC04（北から）

(3) SC02竈（南から）

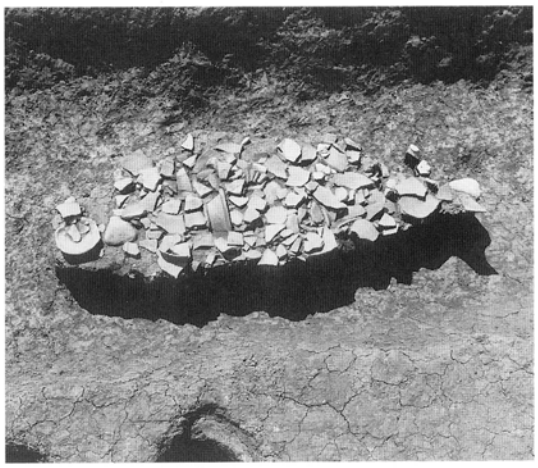


(4) SC05竈（東から）



(5) SD01（北から）

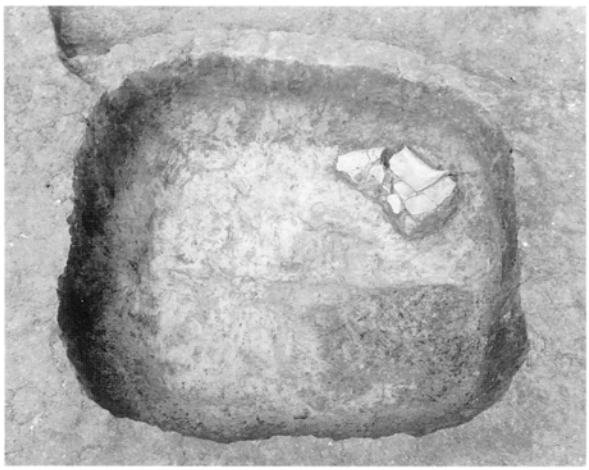
(1) SD01 1 号土層（南から）



(2) SD01須恵器出土状況（東から）

(3) SD02全景（西から）

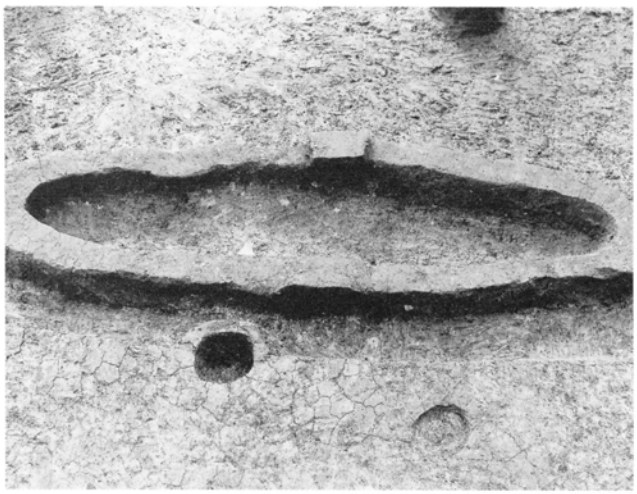
(4) SD02土層（西から）



(1) SK01（東から）

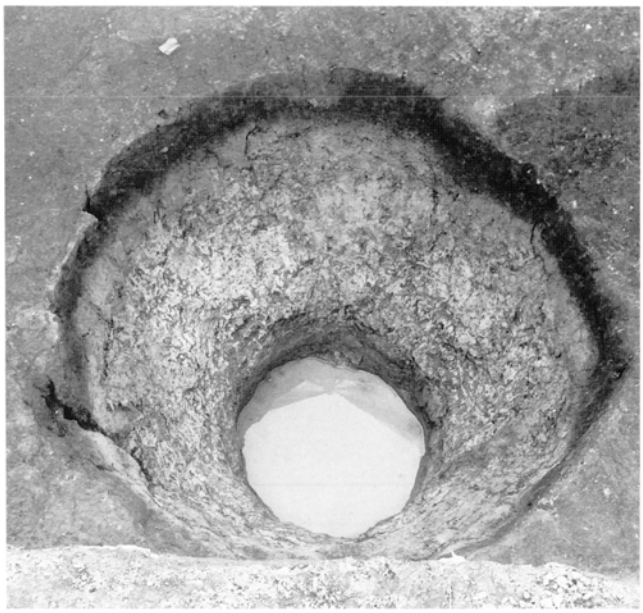
(2) SK02（南から）

(3) SK03（南から）

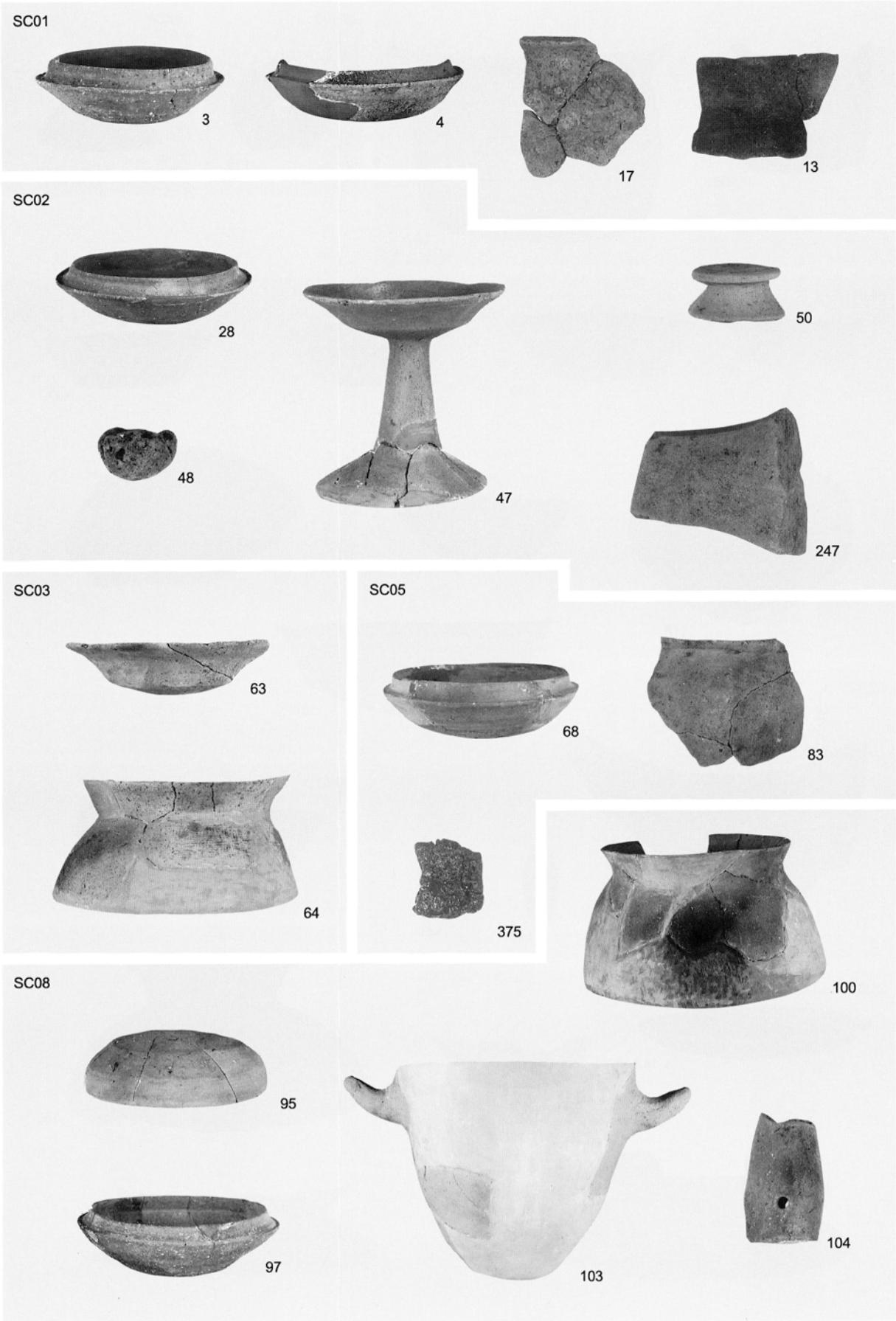


(4) SK04（東から）

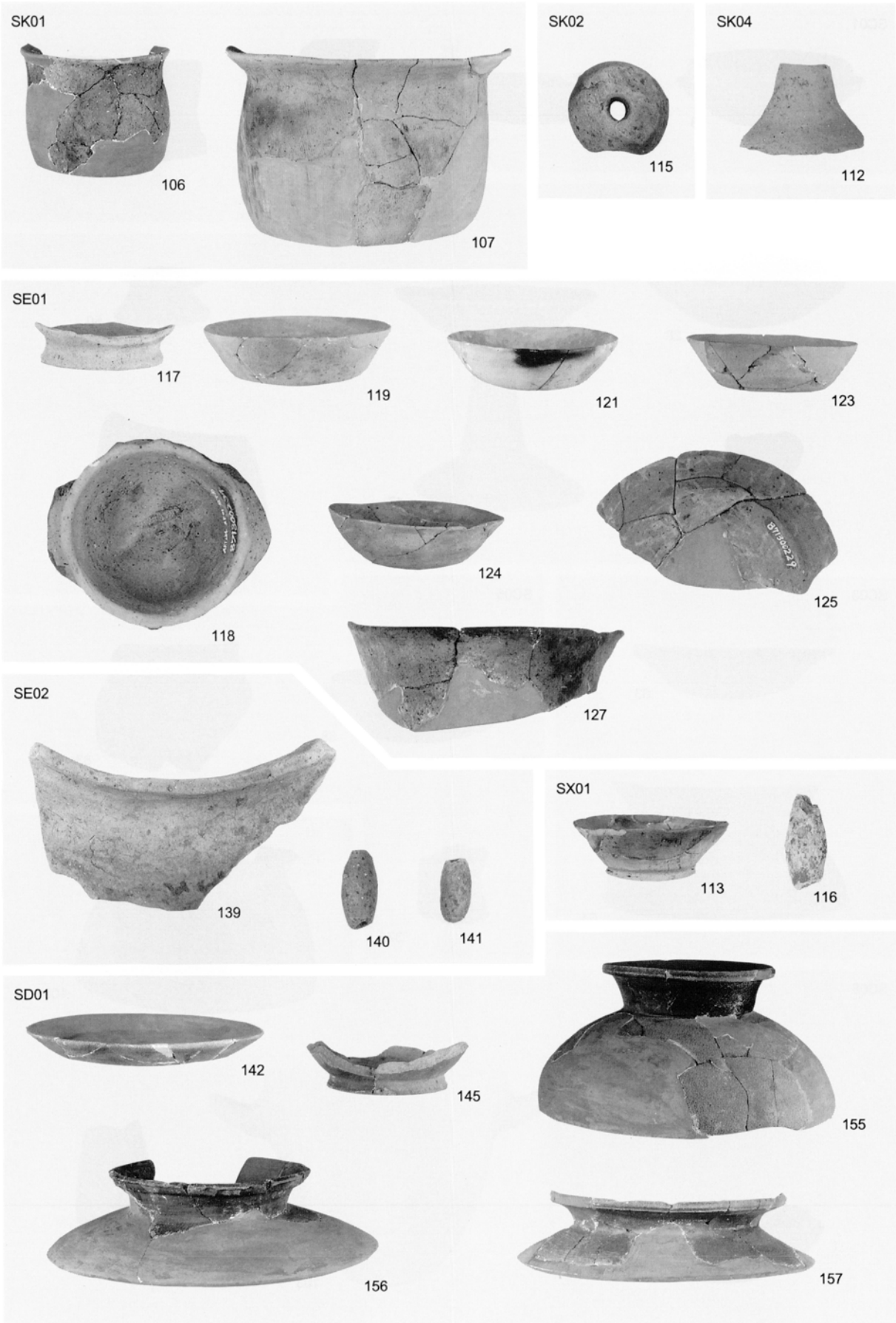
(5) SE01（東から）



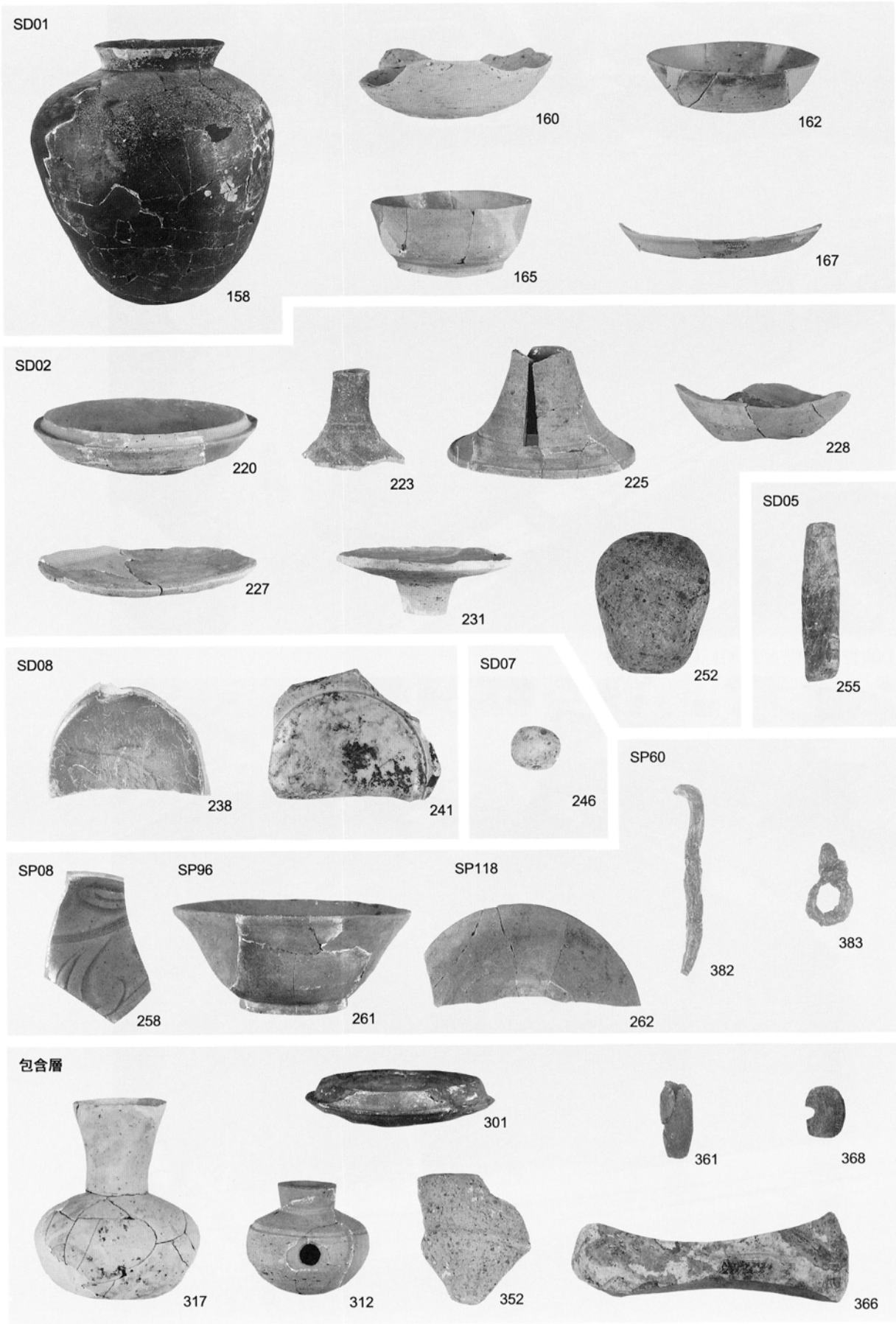
(6) SE02（東から）



各遺構出土遺物Ⅰ（縮尺不統一）



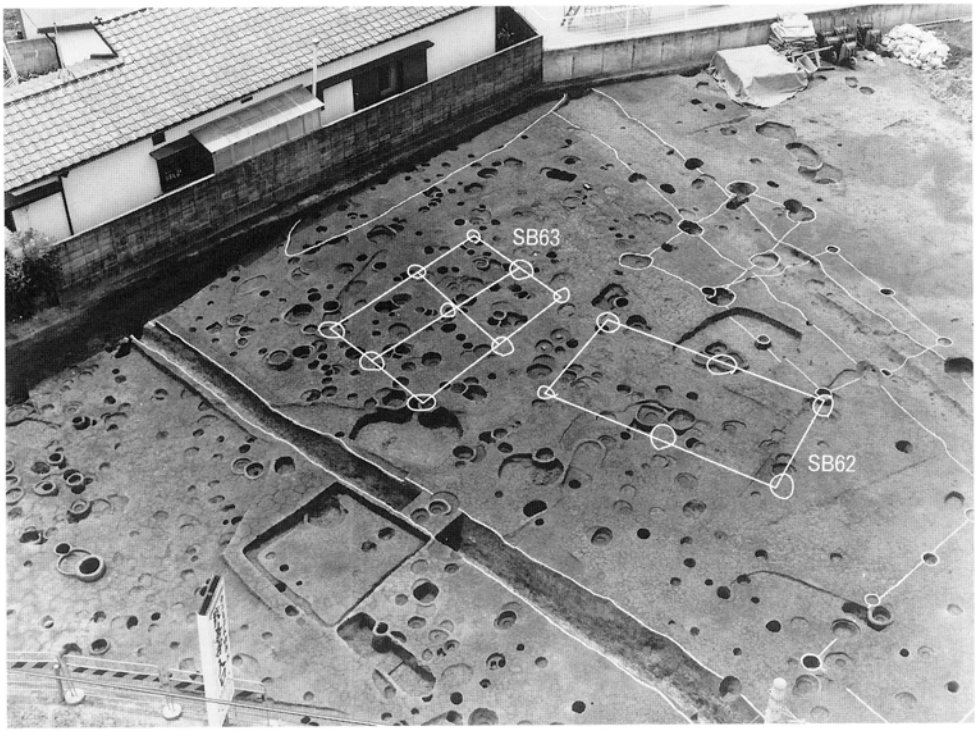
各遺構出土遺物Ⅱ（縮尺不統一）



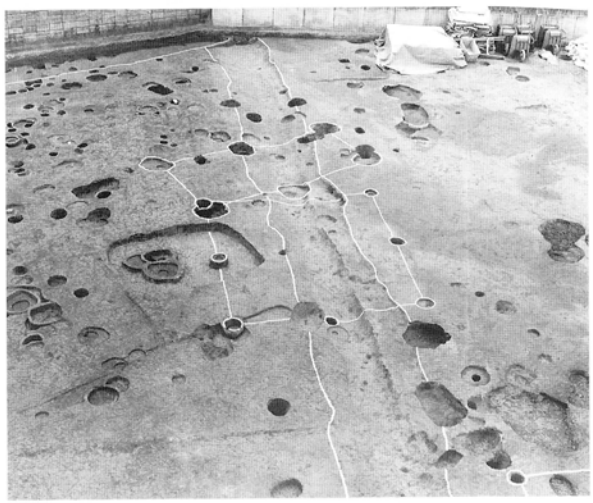
各遺構出土遺物Ⅲ（縮尺不統一）

(1)調査区西側と SD01（北西から）

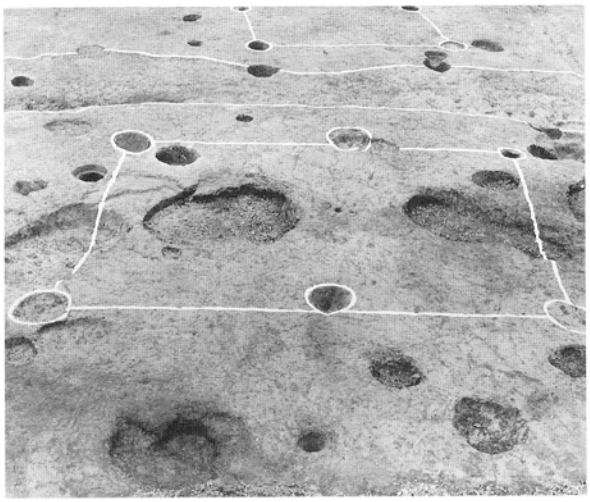
(2)調査区東側（北から）



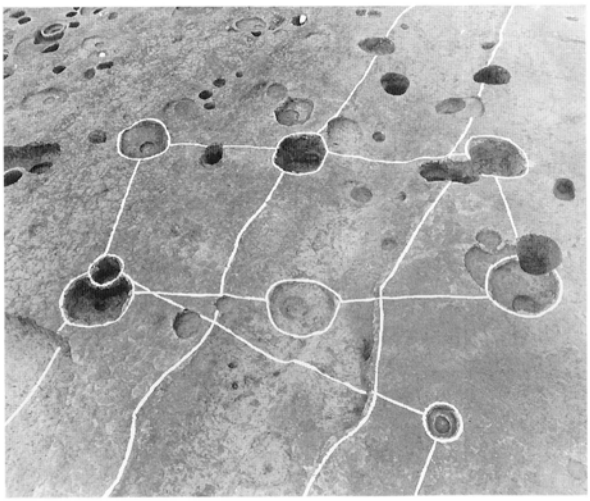
(1)東側ピット群・SB62・63（北東から）



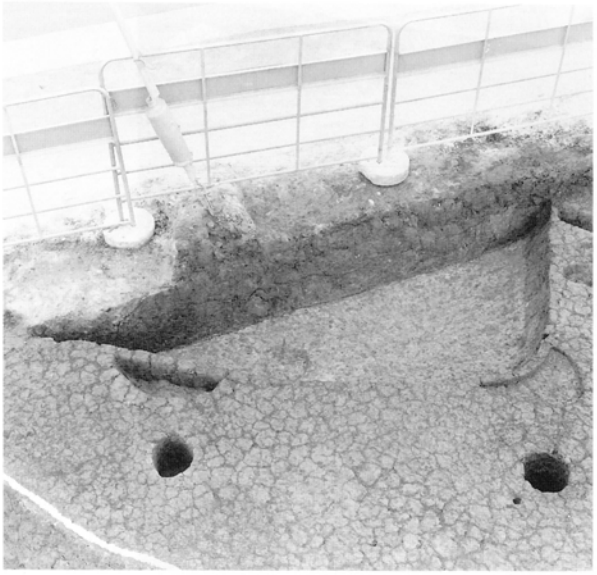
(2) SB57・61（北西から）



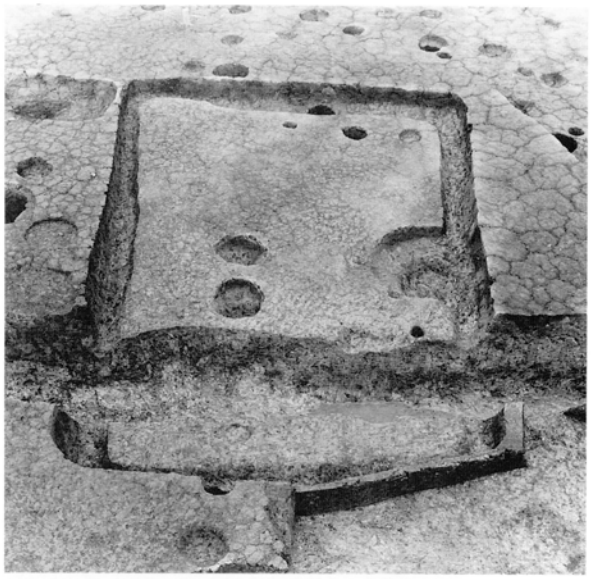
(3) SB60（南西から）



(4) SB61（北東から）

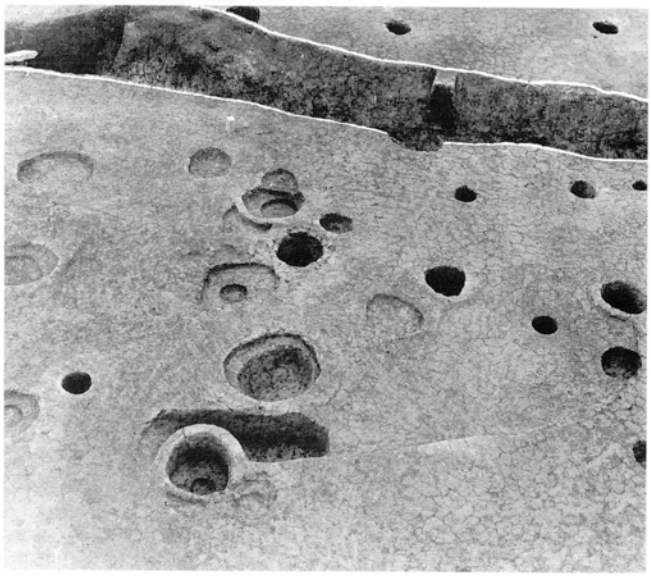


(1) SC45（南西から）



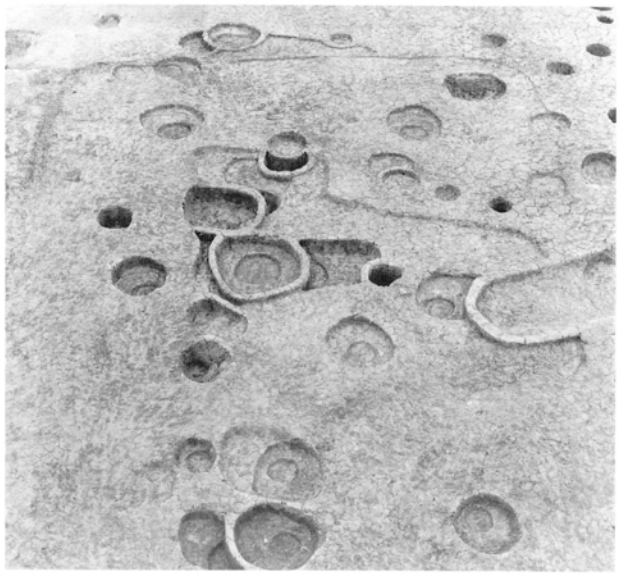
(2) SC46（南西から）

(3) SC48（南西から）



(4) SC49（南西から）

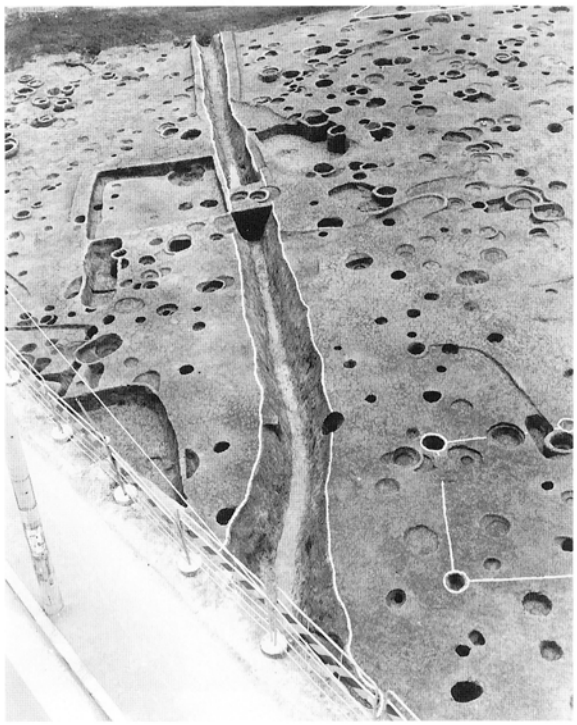
(5) SC52（北から）



(6) SC55（南東から）

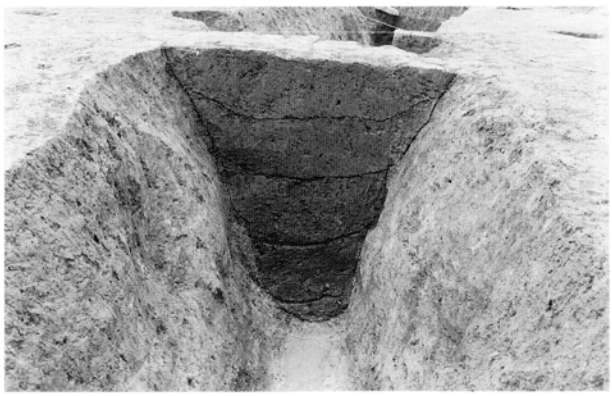
(1) SD02（北東から）

(2) SD53（北東から）

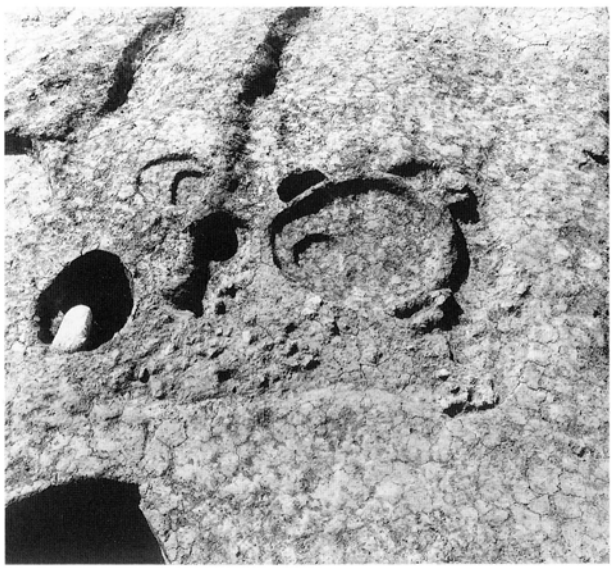


(3) SD44（北西から）

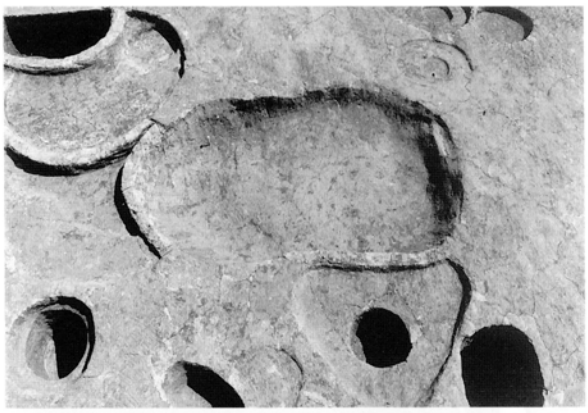
(5) SK51（南から）



(4) SD44　1号土層（南東から）



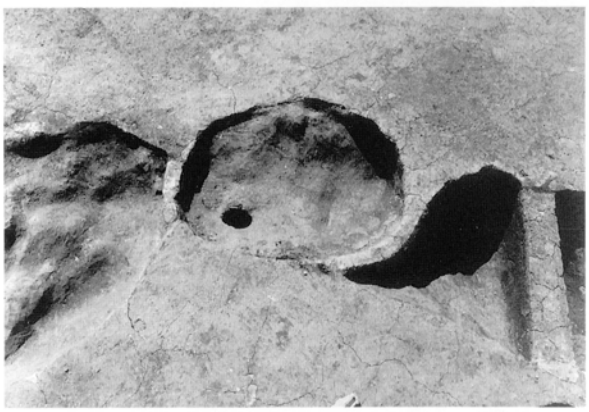
(6) SK58（南から）



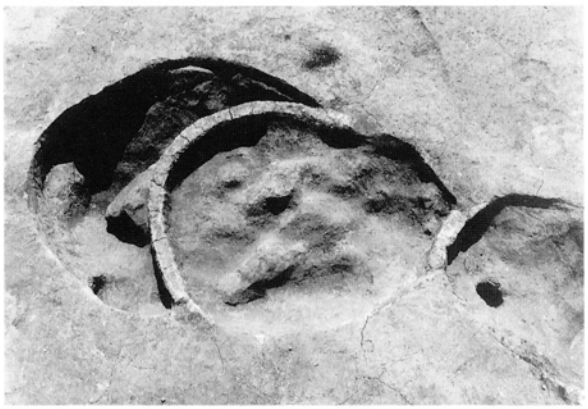
(1) SK07（北から）

(2) SK08（西から）

(3) SK10（北から）



(4) SK11（東から）



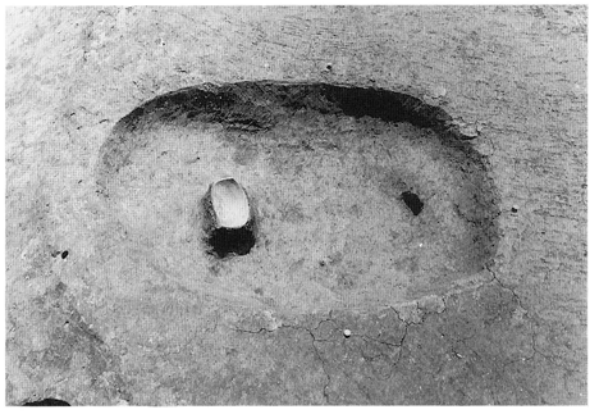
(5) SK12・36（東から）

(6) SK14（北西から）

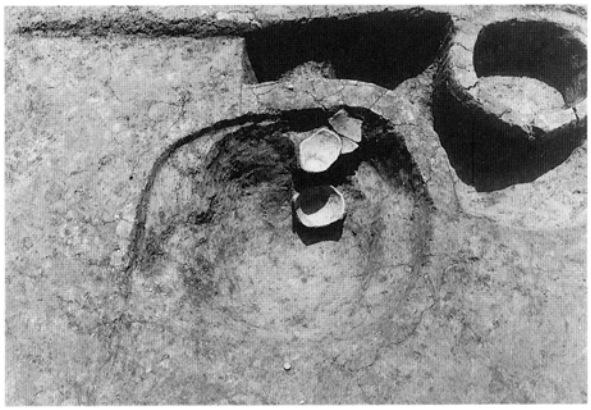
(7) SK15（東から）

(8) SK17（北東から）

(1) SK23（北から）

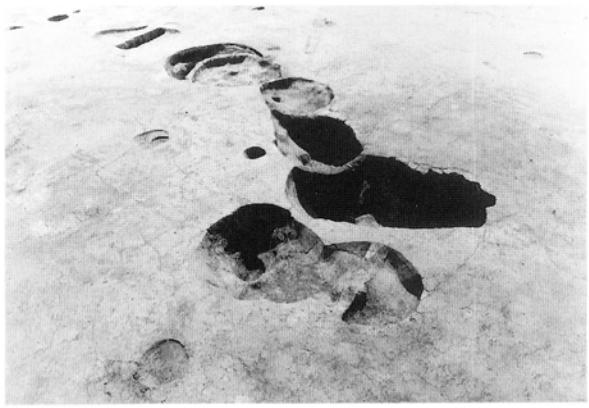


(2) SK25（西から）

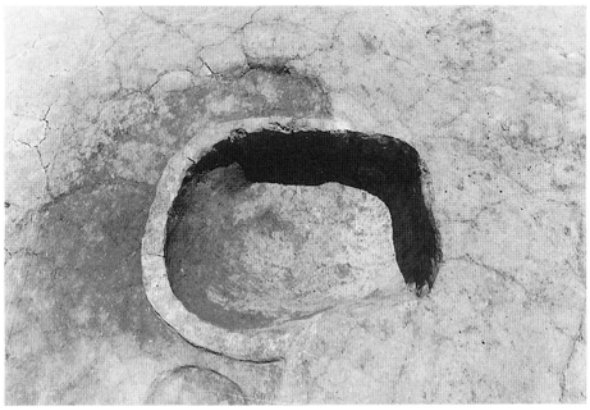


(3) SK26（北から）

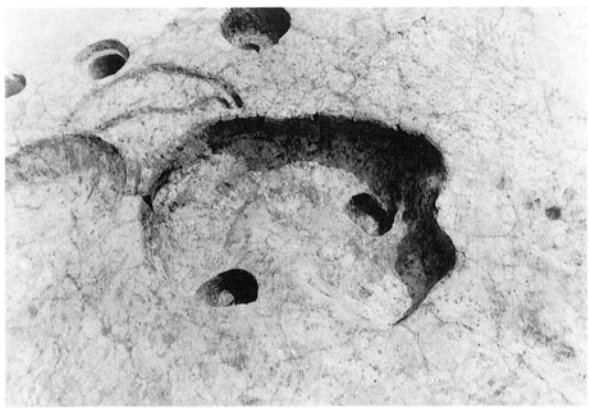
(4) SK28（北東から）



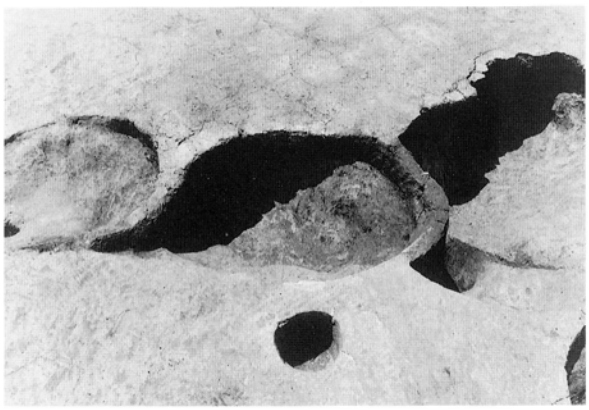
(5) SK11～13・20・34～36・38土坑群（東から）



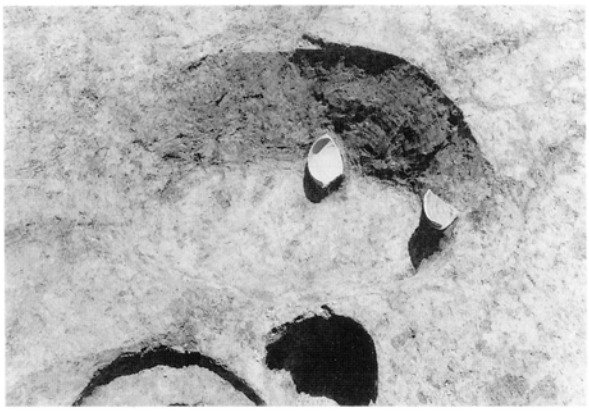
(6) SK31（西から）



(7) SK32（南から）

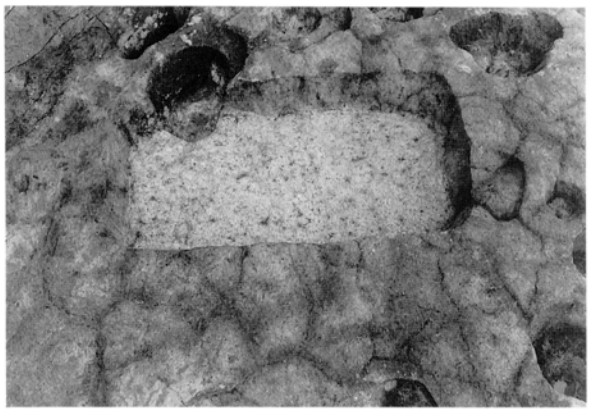


(8) SK38（東から）

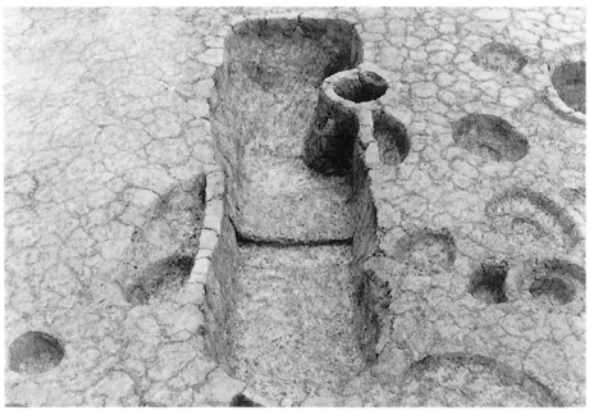


(1) SK40（西から）

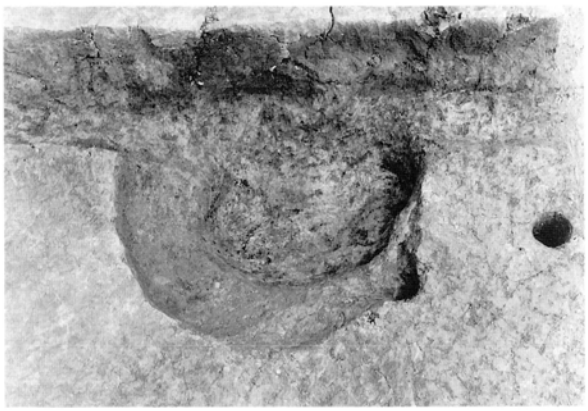
(2) SK41（東から）



(3) SK43（北から）

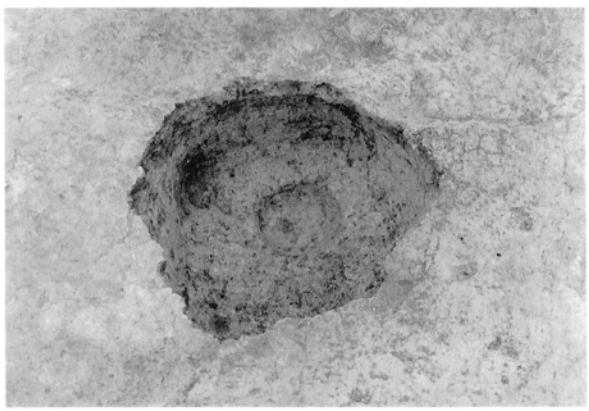


(4) SK47（北西から）

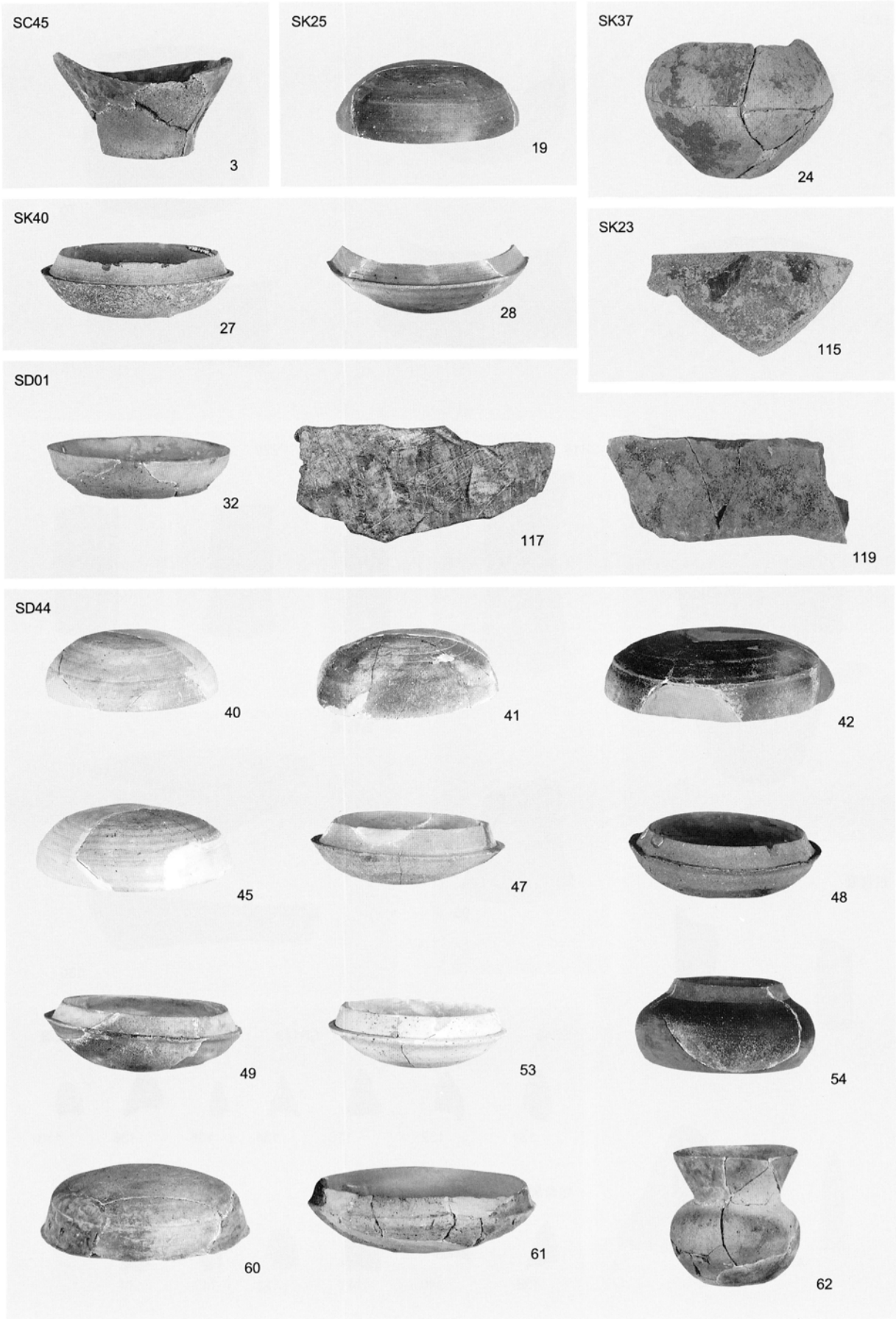


(5) SC46内 SK56（北西から）

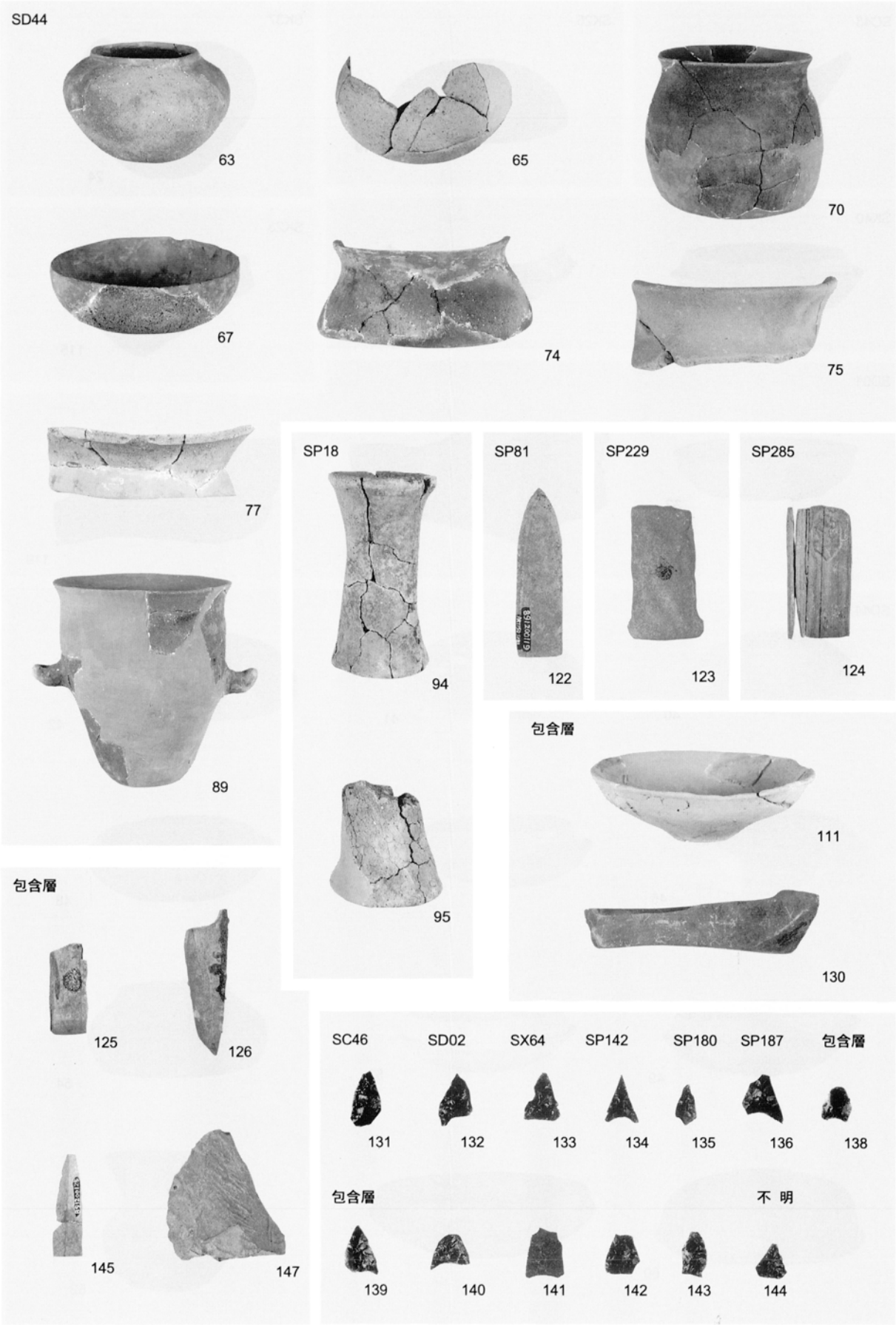
(6) SP18遺物出土状況



(7) SP28（西から）



各遺構出土遺物Ⅰ（縮尺不統一）



各遺構出土遺物Ⅱ（縮尺不統一）

有田・小田部 第37集

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第725集

2002年（平成14年）3月29日

発　　行　　福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8の1

印　　刷　　末松印刷株式会社